
東方人形記

蜘蛛の血

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方人形記

【Nコード】

N9368M

【作者名】

蜘蛛の血

【あらすじ】

とても悲惨な死に方をした少年。其れをあわれに思った閻魔によって生き返らせてもらい、第二の人生を送る。

【初話】 人生の幕開け（前書き）

第二作です。

前作の東方想描具記とは関係ないのであしからず。
どうぞ

【初話】 人生の幕開け

これは、災難に見舞われ、其れをあわれに思った閻魔によって転生した少年の物語。

「だ 畜生！ アンリミテッドレイチエル強すぎ！」

彼は、若干十七歳という年で、一人暮らしをしている、ゲームやパソコンが好きなありふれた少年。（十七で少年って言うのもどうかと思うが（汗））

彼は今、最高レヴェル＋強化で、半チート化したコンピュータと戦っている。

「アラクネは、アンリミテッド入れると別キャラだから入れたくても入れられないんだよなあ。」

やりまくっても勝てるのは五回に一回くらい。

それで息抜きに寝っ転がる。

「ハア、なんか最近おんなじことばっかやってて刺激が無いなあ。」
「いつも同じようなことを言っている。」

「・・・寝るか。」

やっている、偶にそのまま朝になるので、昏寝。

「ZZZZ」

数時間後

「くああ・・・よく寝た。」

気付くと、もう夕方。

「飯作んねえと。」

まだ、高校生。

作るのは基本精進料理。

「ちゃんと節約しないとな。」

だったら、ゲームを止めて電気代を浮かせるべきだと思う。

少年料理中・・・

「やべ、溢した。」

得意だが、微妙に溢す。だが、気にせずに、其れをフライパンに戻して、調理する。

少年料理中・・・

「さてと、食うか。」

今回の献立は、玄米飯、野菜炒め、胡瓜の浅漬け、味噌汁。

微妙に栄養価が偏るが、気にしない。

「いただきます。」

量が少ないため、ゆっくりと食す。

「一人分だから、楽だな。」

片づけはすぐにやる。

「はあ、食器洗い機ほしいわ。」

結構面倒臭がり屋である。

「髪邪魔！」

伸ばす気はないが、切りに行くのが面倒で散髪に行っていない。

「目にクリーンヒットするし。」

結んでも、10?に満たないし。」

いわゆる陰湿なヘアスタイル。

そんなことを言いながらも、皿洗い終了。

「さあて、散歩でも行くか。」

夜の散歩は日課である。

「都会は、夜でも明るいからな。」

「なんじゃこりゃ!」

ガン!

頭から落ちた。

「うう・・ガク。」

気絶。

「あら? アレは、人間ね。

此処に来るなんて自殺かしら?

でも、毒で自殺なんて。」

女性が少年に近寄り。

「まあ、死んでいるなら頂きましょうか。」

その女性は少年の死体を食べた。

????

「うう、畜生。

まさか頭から落ちるとは。」

少年は、あたりを見渡し、場所を確認する。

「あれ? こんなところだったか?

確か、鈴蘭畑に落ちたはずだが。」

説明しよう。

彼は、鈴蘭畑に頭から落下した。

その際に頭をぶつけて気絶。

気絶したまま、鈴蘭の毒素で死んだ。

「ってか、何で河原？」

元の場所と違ううえに河原と来た。

そこで、彼が最初に浮かんだのは。

「もしかして、死んだ？」

その一言だ。

「まあ、頭から落ちれば死ぬか。」

人生なんてそんなもんですよ。と言わんばかりに、開き直っている。

「ってことは、此処は三途の川だから、渡ればいいのか？」

そう言つて、川に入る。

「しゃっこい（冷たい）！」

微妙に方言が入った。

「とにかく行つてみるか。」

そのまま泳いで行こうとしたとき。

「おいあんだ。」

三途の河は泳ぐとこじゃないよ。」

後ろから女性に声をかけられた。

「何で人がいるんだ？」

彼の脳内では、三途の河では肉体をもった人間がいない。

つまり幽霊だらけだと思つている。

「さつさと上がりな。」

三途の河は泳ぐとこじゃないよ。」

なるほど。

幽霊だから、飛べるのか。」

そう思い、飛ぼうとするが。

「飛べないじゃないか！」飛べなかった。

「幽霊〓飛べるって……あんだ馬鹿かい？」

ま、馬鹿でもいいや。

さっさと乗りな。」

「乗るって何に？」

「船だよ。」

三途の河は船で渡るんだ。

知らないのかい？」

「知らぬ！ 分らぬ！ 解せぬ！」

「そ、そうかい。」

多少引いているが、気にせず船に乗った。

「で、あんたは何で死んだんだい？」

「多分頭を強打してそのままお陀仏だと思います。」

「何で、頭なんかぶつけたんだ？」

「急に足元に道が無くなって、そこに落ちたら空高くから頭から落
つこちました。」

「災難だったね。(スキマ妖怪の仕業だね。)」

「ま、死んでしまったものは仕方が無いでしょう。」

「ずいぶん前向きだね。」

「いちいち立ち止まって答えを求めても仕方がありません。

だったら後から付いてくるのを期待して前に進むべきです。」

「なるほどね。」

他愛のない話を続けながら、三途の川を渡り切る。

対岸

「さてと、付いたよ。」

後はこの幽霊の列に並んで閻魔様のところに言ってくればいい。

そうすれば、判決が下って天国か地獄に行けるだろう。」

「分かりました。」

その後、船をこいでいた女性はまた対岸に戻って言った。

「それにしても、あの恰好は何だ？
和服に大きめのスカート。」

しかもスカートが重力を無視してふわふわしていると来た。
あり得な。」

最後の一文字を抜く癖がある。

「やあ、あんたも死んじまったか。」

前の幽霊ひんが声をかけてきた。

「まあ。」

「どういふ経緯で死んだんだ？」

妖怪に食われたか？ それとも病死か？」

急にどうして死んだか聞いて来て焦った。

「えっとですね。」

散歩をしていたら、急に足場が無くなって、そのまま落ちたら今度は
上空に出て、頭からまっさかさまですよ。」

「はっはっは！ 面白い死に方をしたな。」

しかも隙間に落とされて、頭からか。」

「そういう貴方は、どんな死に方を？」

普通ならあり得ない会話に盛り上がる。

「ああ、俺？ 俺は森に山菜採りに行ったら闇の妖怪に食われて死
んじまったよ。」

「怖くなくったんですか？」

「そりゃ怖えよ。」

でも、対抗したとこで撃たれちまうからな。」

「うたれる？」

妖怪という科学とかけ離れたものから、撃たれるという科学的な言
葉が出てきた。

「撃たれるって、その妖怪は拳銃でも持ってるんですか？」

気になって問うと。

「けんじゆう？ 何だいそりゃ？ 撃たれるって言ったら弾幕だろ
？」

「弾幕？」

聞きなれている単語だが、それで撃たれるのはゲームでの話。

「火鉢ですか？」

「さつきからあんたわけわかんないこと言うな。

もしかして、こつちに来た途端に死んだのか？」

「こつち？」

まるで国を超えたかのような、言葉に戸惑う。

「こつちとは？」

「その口、あんた外来人か。

そんじゃあ、説明してやるよ。

此処は幻想郷って言う世界で忘れられたモノが来るとこだ。」

「つまり、異世界と。」

「んー？ まあ、そんなもんだ。」

「異世界ってあるんだ。」

驚きと関心が同時に顔に出る。

「幻想入り早々即死は大変だったな。

ま、此処の閻魔さまはお優しい方と聞いている。

だから、かなりかわいそうな死に方をすると、無条件とは言わない

が、転生させてくれるらしい。」

「そうなんですか。」

「……ってか何で閻魔様の情報があるんですか!？」

「ああ、こつちだけなんだ。」

こつちではな、一部の人が色んな世界を行き来することができるん

だ。

その人たちから、どんな人だったかを聞いたりできる。」

「そうなんですか。」

(この世界って何でもありだな。)

そんな話をしていると、前の幽霊の順番が来た。

「お願いします。」

「はい。」

えつと。」

閻魔と思われる女性が資料を見る。

そうすると、その人の死因や、善行がどうのこうの言いはじめて。

「えつと、白ですね。天国行きです。」

判決が下った。

「おつしゃ！ そんじゃあな。

俺は天国でゆつくり休ませてもらう。」

「あ、はい。

お元気で。」

次は当たり前のように自分の番。

「お願いします。」

「はい。

えつと、死因は、頭部強打により気絶し、その際に周りにあった鈴蘭の毒で絶命。」

その後に妖怪に身体を食べられると。

善行は親孝行。」

自分のした覚えのないものが出てきた。

「親孝行ですか？

自分は、親のために何かした覚えはないですけど。」

「親にマッサージしたり、覚めたギャグを言う父に突っ込みを入れたり、何よりも親に負担をかけまいと十六歳で一人暮らしを始めた。こんなところですかね？」

「アレって親孝行には言ってたんですね。」

「そこまで大きな部分ではありませんがね。」

その次に気になったのが。

「死因は、頭を強く打ったからじゃないんですか？」

「ええ。あの時に気絶せずすぐに鈴蘭畑を離れば死なずに済んだでしょう。」

「はあ。」

適当に説明してもらい、判決の時。

「えつとですね、貴方の場合死因とその後の死体が食べられたというとても悲惨な死にかたなので、もう一度人生を楽しんでください。」

（本当に優しい人だな。）

「あ、そういえば貴方は幻想入りしてすぐに死んでしまったんですね。」

恐らくあまり便利でない幻想郷では不便でしょう。

貴方にはいくつかの能力を与えておきます。」

「能力？」

「ええ、とりあえず自己防衛にでも使ってください。」

「分かりました。」

どういう能力かを楽しみにしているのが顔に出ている。

「ですが。」

「ん？」

何か問題があるらしい。

「貴方の体は食べられてしまって今ないんですよ。」

普通なら元の体に魂を戻して生き返るのが一番楽なんですけど。」

（死後硬直でキョンシ みたいな動きしかできませんよね。）

「どうしたものでしょう。」

少し考えていると。

「おっと、いいところに身体がありますね。」

これに移しましょう。」

「体が見つかったんですか？」

「ええ、それでは送りますね。」

「有難うございます！」

「それでは、第二の人生。楽しんできてください。」

「はい！」

身体が白い光に包まれて、そのまま意識が遠のく。

「うう。」

そこは、よくわからない森の中に座り込んでいた。

「えっと、何に入ったんだ？」

身体を確認してみると？

「球体関節？」

肘や膝はもちろんのこと、全身の関節が球体関節である。

「人形？ でも、そうだとしても大きいし。」

そこに、またもや知らない女性が来た。

「あら？ 男の子の人形なんて珍しいわね。」

（ああなるほど。人形って言ったら普通女の子だもんな。

男で球体関節は気持ち悪いってか。）

しゃべると面倒になりそうだからしゃべらない。

「どうせだから、持って帰りましょう。」

妖気が無いから妖怪化していないだろうし、上手くやれば使用人の人形にできそうだし。

（男の子ってのが不満だけど。）

（使用人だと？）

だが、しゃべらない。

「よっと。」

さてと、家に戻って改造しないと。」

改造という言葉に危険を感じ担がれている状態から離れた。

「誰が改造されて使用人になるか！」

「ふーん、魂入ってたんだ。」

仕方ないわね。」

女性は腕を振りかざし、何かが飛んできた。

「人形？」

彼には、彼女が人形を浮かせていることよりも、操られていない人形が動いていることに驚かないことに驚いた。

「人形がひとりで動いているのに驚かないのか？」

そういうと意外な答えが返ってきた。

「驚くわけないじゃない。」

「こつちでは、そんなことは日常茶飯事よ。」

「あ、そう。」

話している間に槍をもった人形に囲まれた。

「仕方ねえ。」

「能力使うか！」

「能力があるの？」

と、女性はたじろいだが。

「って、どんな能力か閻魔さまに聞いてねえ！」

「何だ、まだ使えないんじゃない。」

その直後に、囲まれた槍で突き刺された。

「ちよっ！ 止めっ！」

「うわあああ！」

ザクザクと身体を突き刺されたが。

「あれ？ 痛くねえ。」

思ったよりと言うよりも、全くいたくない。

「これなら無問題だ！」

刺さっている槍を無視して相手にダッシュで詰め寄る。

「だったら、こっよ！」

今度は、弓をもった人形が出てきた。

「今の俺に痛み何かないぜ！」

「今度は生身の人間でもいたくはないわよ。」また囲み、弓を射る。

「外してんじゃないか。」

矢はずれて本人には当たらなかった。

「苦し紛れか！」

「だがしかし。」

「！ う、動けね。」

身体が何かに束縛されている。

「ワイヤーか？」

「その通りよ。でも、ただのワイヤーじゃない。魔力を込めて、何があっても切れることはないわ。」

無理だと悟ったか。

「ああもあ！ チートだろ！」

そのまま、束縛されて連行された。

「で、何をするんだ？」

「まずデザインを女の子にして、後は終わってからよ。」

「え？ 今なんて？」

「だから、女の子にするの。」

「悪い。其れ無理だわ。まず身体は人形だけど、俺はもともと人間の男子だ。」

ニューハーフになりたかったわけでもない。

それで見えた目を女にするなんて言われたら拒否するわ。」

「そう言うものなの？」

「そう言うもんなの！」

とにかく！ 女になるなんて絶対いやだから！」

「うーん、そこまで言うなら良いわ。」

その代わり、ちゃんと使用人として働いてね。」

「ごめん、それも無理。」

「はあ、何もできないじゃない。」

もういいわ。何処が行きなさい。」

諦めたのか解放してくれた。

「マジか。そんじゃあ、自由にさせてもらっわ。」

そう言っただけ家を立ち去ろうとすると。

「そう言えば、貴方名前は？」

「名前はえーっと………何だっけ？」

「自分の名前でしょ！」

「いや、マジで忘れた。」

閻魔さまもこういうところはしっかり忘れさせるのか。」

まさかの名前だけ忘れさせられているという状況。

さてと、どうなることが。

【初話】 人生の幕開け（後書き）

一話なのに進展させすぎました。

さてと、第一話なのにいきなり読者のアイデアを募集します。

其れは主人公の名前です。

第一話で募集してんじゃねーよと思う方もいると思いますがよろしくお願いします。

それでは

【第二話】住居確保！ だがしかし（前書き）

はいどうも。

まず最初に名前はまだ決まっています。

てかアイディアすら来てません。

しよっぱなでアイディア募集はまずあったでしょう？

どうぞ

【第二話】住居確保！ だがしかし

閻魔さまによつて完全に名前を忘れられた少年。

「名前が無いなら何て呼べばいいのよ。」

「分からん。まあ、適当にやってくれ。」

「適当つて。」

あまりにも無関心なことに呆れる女性。

「ところで、そっちの名前は？」

「ああ、自己紹介がまだだったわね。」

私はアリス。アリス・マーガトロイドよ。」

「マーガトロイド？」

「違う！ ややこしいけど断じて違う！」

「ごめん、ふざけた。」

「全く。」

全くつかみどころのない性格に少々困るアリス。

「そう言えば、行くところあるの？」

「無い。」

「一言で返さないでほしいわ。」

「めんどい。」

「はあ。」

しゃべるが、反応が単調なことに怒りと呆れが混ざる。

「もしも住まわせてくれるのなら、使用人とまではいかんけど、手伝いくらいはしてもいいが。」

住まわせてほしいと申し出るとアリスは少し考え、ぶつぶつと独り言を言いはじめた。

「手伝いが増えるのはありがたいけど、部屋とかかないし、まず食事・・・は人形だからいらないのか。・・・・・・・・・・」

「何をぶつくさ言ってるんだ？」

考えがまとまったのか顔を上げた。

「まあ、来てもいいわ。人形なら食費もいらさないし、何よりそれで手伝ってくれるなら得よ。」

「お、マジで？ サンキュー。」
理由はどうあれ宿はとれた。

「じゃあ、早速手伝ってもらおうかしら。」

「了解。」

「それじゃあ付いて来て。」

手伝う内容を聞かされないまま付いていく。

奥の部屋

「それじゃあ、此処を片づけて頂戴。」

「……全部？」

「全部。それじゃあよろしくね。」

「ちよっおま！」

一人でこれを一人で片付けろと？

その部屋は、最初に入ったただでさえ広い居間よりも広く、空き箱からものすごく大きな金属の塊まで多種多様なものがほこりをかぶっていた。

「流石に一人とは言わないわ。人形を十体ほど貸してあげるからそれで何とかしなさい。後それと、この中の物は基本的に重要な素材だから捨てないで置いてね。」

「典型的な片付かない部屋だろ！」

「仕方ないでしょ？ 普通に人形作ってもつまらないし、鎧とか武器とかも自分で作ってるんだから。」

「そうなのか？」

「そうなのよ。まあ、とりあえず頑張つて。」

「はあ。」

ため息をつかずにはいられない。

「まあ、手伝いはするって言っちゃまったし、仕方ない、やるか！」「早速手をつけようとするが。」

「しよっぱなからこんな重量級かよ。」

入口付近の物をどかして、中の掃除に取り掛かろうとするが、どうやら金属が砂が入っているらしい。

「とりあえず外に出してつと。」

入口付近の物をひたすら廊下に出す。

廊下が広いことは助かるが、一人暮らしにしては広すぎると思うだろう。

「はあ、これで中の掃除ができる。」

とりあえずある程度運べるものは運び終えた。

「・・・あれ？ 疲れが出ねえ。」

彼は今までならこれだけの荷物を運べば息が上がり、やる気をなくしていた。だが、今は人形になり、無限の体力で作業を続けられる。

「まあ、良いか。そんなことよりもさつさと片付けないとな。」

アリスに貸してもらった人形の存在を忘れて作業に取り掛かる。

「つたくずいぶん放置してたんだな。」

埃たまりすぎだろ。」

文句を言いつつもしつかりと作業をする。

「あー、外に出した奴もきれいにしないといけないのか。」

そこでやつと人形を思い出し。

「えーつと、さつき出した奴を綺麗にしておいて、終わったらこつちを手伝ってくれ。」

人形は、少々表情をゆがめたが、作業を開始した。

「表情作れるとかすげえなおい。」
少々雑ながらも作業を続ける。

「このでかいの邪魔だな。一人で持てそうにもないし、ってか何で縦横斜めどれをとつても扉よりでかいものが部屋に入ってんだよ。一回砕いて戻したか？ 其れとも扉は後付けか？」
位置をずらすと押してみるが。

「おんも！ 何だしこれ、ありえねえだろ。これでも防球ネット一人で運んでたんだぞ？」

そんなものは自慢にならない。
それはさておき
閑話休題床を良く見ると。

「ま、まさか・・これって鉱石？」
床と其れには少々違和感があった。床に乗っているというよりも、床から突き出ていると言うべきか、とにかく乗っているわけではない。

「落ちてから修復したのか、それとも最初からあったとこに無理やり立てたのか。」

とにかく、ありえない！

「・・・まあいいか。とりあえず掃除つと。」
はたきでその鉱石の埃を落とし箒をかける前に他の残りの荷物を出す。

そのころには、人形たちも外の物の掃除を終えて戻ってきていた。
「流石にこれを一人は無理があるな。ちょうど良く戻ってきていることだし、一緒に運んでもらうか。」

人形の力に期待はしていないが、いないよりはましである。

「よし！ せーっの！」
思いっきり持ち上げると、驚いたことにものすごく軽い。

一人でやった時は持ち上がらなかつたものが、まるで中身が半分になつたかのように軽い。

「まさか、人形の力がここまで強いとは。」
そう、軽くなつた理由は人形が手伝っているからだ。

実際、掃除などのために作られた人形だが、掃除には力が必要だということ、アリスは人形の力を常人の1/2倍くらいにしてある。ちなみに戦闘用は三倍くらい。

「こいつは助かる。」

鉱石を除く全ての荷物を廊下に出して、出した荷物を綺麗にするように人形に頼む。

「さてと、やっと箒がかけられる。」

掃除の順序として上のほこりを落としてから箒をかける。

「にしても、倉庫にしては狭いが、居間よりもでかい部屋とはな。」
窓から吹き込む風が、埃を立たせる。

「ゴホツゴホツ！ 掃除機はないのか！」

不便とは聞いていたが掃除もままならないほど不便だとは思わなかった。

恐らくアリスは見えない部分は手を抜いている。

それはさておき
閑話休題

やっと人形が戻ってきて、一緒にはき掃除を始めた。

「小さいと時間もかかるでしょうに。」

そんなことを言いつつも埃を全て一点に集める。

普通ならここで塵取りを使うのだが。

「ちよつとゴミ箱取ってきて。」

まさかのゴミ箱を要求。

人形の一体が大きめの四角いゴミ箱をもってきた。

「塵取りで何度もやるのは面倒だからな。」

これで一気に全部集めるってことだ。」

ゴミ箱を倒し、箒を使いゴミ箱の中へ埃を飛ばしていく。

其れを見た人形たちはぼかんと口を開けてみている。

「はき掃除終了！ 次雑巾がけ！」

雑巾を持ってきて、適当にたたみ、両手に付ける。

「両手に一つじゃ効率悪いからな。だったら片手に一つずつだ。」
雑巾を床に押し当てて走る。

人形たちは普通に一人一つの雑巾で掃除をする。

「全く広すぎるだろ。」

普通の教室の三倍はあろう広さだ。

一人でやっていれば骨が折れる。

「五往復やってもまだ四分の一かよ。」

鉱石が中心にあるのが気に食わない。

「明らかに邪魔だろ。」

何かと文句を言っでは雑巾をかける。

十分後……

「やっと終わった！」

と、思いきや。

「ああ、鉱石も拭かなきゃいけないんだ。」

渋々鉱石に雑巾をかける。

「ったく何でこんなものがあるんだか。」

さっきから鉱石の文句しか言っていない。

「これで終了！」

鉱石もバッチリ拭き終えて荷物を中に入れる。

「できる限り少ない人数で効率よく運べよ。」

つとその前に肝心のアリスを呼んできてくれ。」

どれをどう片付けるのかを聞かなければ部屋に戻せない。
数分して、アリスは来た。

「あら、随分きれいになったじゃない。」

開口一番に感想を漏らす。

「ところで、荷物はどこにどうおけばいい。」

「とりあえず全部入口から見えるようにして。そうすればいつでも糸で取り出せるから。」

「了解。」

鉱石で見えなくならないようにバランス良く戻していく。

アリス本人が来たため人形の数が増えて出すときよりも早くしまう事が出来た。

「やっとオワター！」

身体を反り返し、腕を広げて伸びをする。

「魔王でも降臨するの？」

突っ込まれた。

「いやいや、其れはねえよ。」

居間

「お疲れ様。」

とりあえず、あの倉庫はしばらく使ってたから助かったわ。また何かあったらお願いね。」

「あ？ うん。」

素気ない返事をした。

それはさておき

閑話休題

これで住居の確保は出来た。

だが、いまだに理解できないことだらけだ。

無限の体力。

腹が減ることもなければどが渴くこともない。

声帯から声を出しているようにも感じない。

其れを全て知るには、人形を扱っているアリスの近くにいるのが最も有効だろう。

【第二話】住居確保！ だがしかし（後書き）

これでとりあえず風雨にさらされることはありません。

名前の募集は決まるまで続けます。

そしてもう一つ。

今度は能力募集です。

今回は能力をいくつか持っている設定なのでどんどんお寄せ下さい。
それでは

【第三話】そついえは能力は？（前書き）

今回は、能力が一つ使えるようになります。
どうぞ

【第三話】そういえば能力は？

アリス亭に来てから早くも三日がたった。

そんな中、かなり暇になのか、アリスが人形を作りながらこんな質問をしてきた。

「そう言えば、能力は分かったの？」

「分かん。」

一言で返す。

「知りたくないの？」

「知りたいが、閻魔さまが教えるのを忘れて知るうにも知ることができない。」

半分呆れているが、意に介さず暇をしている。

「じゃあ、軽くテストでもしましょうか。」

「test？」

「何で英語かな？ ま、そうよテストといっても大したことじゃないわ。」

私の質問に何も考えずに直感で答えてくれればいい。

覚えていないのはパスで良いから。」

「了解。」

と、言うことでテストだが。

【第一問】

Q 転生前はどうやって過ごしてた？

A 普通にゲームやったり、パソコンやったり、学校行ったり。

【第二問】

Q ゲームのキャラクターの動きをまねしようとしたことがある。

A 一応。

【第三問】

Q 二次元で「これ使えるな。」と、思ったことは？

A ある

「なるほどね。貴方の能力がだいぶ理解できたわ。」

「今ので?」

「今ので。」

能力って言うのは、その人の理想やその人に合ったものが付くの。貴方の場合、恐らくキャラクターの技とか使えたらどんなことができるかとか考えたことあるでしょ?」

「まあ。」

「多分そうだとすると、貴方の能力は【キャラクターをコピーする程度の能力】ね。」

キャラクターの、能力、技、見た目、動きとかができるよっね。」

「そうなのか。」

「そうだと思うわ。まあ、能力が分かれば、其れ条件も解る。条件はね、キャラクターとして認識しなければならぬよっね。よくわからないだろうけど、慣れるわ。」

「あ、そう。」

「まあ、そのくらいかしら? ちょっと試してみる?」

「練習も兼ねてか。」

「そんなとこね。」

「まあ、いいでしょう。」

能力の練習として、外に出た。

魔法の森

「さてと、貴方の場合下手したら最強だろうから本気で行くわよ。」

「了解。」

全力を了承して、戦闘を始める。

「まずは小手調べよ!」

そう言うと、十数体の人形を操って囲ませる。

「えっと、囲まれた時は。」

適当に考え込むと。

「これだな。」

「オメガゲストロイヤー！」

オメガゲストロイヤー

手から鞭を伸ばして、振り回す技。

「ちよつ！ 全部一気に落とすなんて。」

その技を見て唾然とするアリスだが。

「……」

「どうしたの？」

彼は其れを無視して、技を出した自分の手を眺めている。

「こうなるのか。意外だな。」

どうやら、腕に穴があいているわけではない。

「ちよつと油断したわ。今度は本番行くわよ！」

「よーし来い。」

その瞬間に。

ヒュン！

「え？ 何？」

自分の顔の横に紅いレーザーが走っている。

「オプティックブラスト！」

オプティックブラスト

目からビームを出す技。

「って、アレ？」

ビームが止まらない。

「まさか、制御できてないの？」

アリスが近寄るが。

「ああ、そっぴやあのゴーグルが無いと制御できないって公式に書いてあったな。」

ものすごく冷静。

「ま、止めれば済む話なんだが。」
レーザーが止まった。

「十分制御できてるじゃない。」
「すまん。」

アリスは調子が上がらない様子。
だが、彼はとても楽しんでいる。

「まだまだ楽しめそうだ。」
えっと、見た目もコピーできるんだっけ？」

今度は何をするのかと思いきや。

「マスターハンド。」

マスターハンド

右手

「手なんて面白いわね。」

だがよく見ると、カラーリングや形状は一緒だが、球体関節だけはそのままだ。

「うわー球体関節そのままとかだるいわ。」
そんなことを呟きながらも戦闘を続ける。

「指ーム！」
指ビームの略。親指以外の指から青白いレーザーを放つ。

「いちいち変身する必要ないんじゃない？」
突っ込まれたが気にしない。

「三次元なら避けれるよな。」
「もちろん。」

普通の指なら届かない角度に移動して避けるが。
「駄目じゃん。」

球体関節の指では、360°どの方向にも曲がる。
普通なら指の折れる角度だろうが曲がらないはずの横だろうが関係

ない。

「ほらほら！」

指をウネウネと動かし、不規則に放つ。

「これは、辛い、わね。」

だが、ビームをやめた。

「この体疲れる！」

そう、手全体が体なのだから指を動かすのは相当疲れる。

「もう良いや。」

元の普通の人形に戻った。

「もう良いって？」

「大体の感触はつかめたからもう練習は必要ない。」

「ちよっとちよっと。それじゃあ、犠牲になった人形はどうすんのよ。」

私はまだ収穫ないし、何よりも無駄に疲れたし。」

「気にすんな。」

「気にするわよ！」

能力自体は、それほど強くはない。

ただ、彼の能力との相性が優れているだけだ。

アリス亭

「あー疲れた。」

「疲れたのはこっちよ。」

肩を抑え首を鳴らす彼。

其れを呆れと怒りが混ざった顔で見るアリス。

だが、そんなこともお構いなしに、彼は言った。

「ああ、今日で俺ここ出るから。三日も泊らせてもらったし、そろそろ邪魔になるでしょうに。」

その言葉の後、アリスの怒りは消えて、ものすごい呆れの表情を浮かべていた。

「ちよっと待ってよ。まだ何も分かっていないのに、安全なところか

ら出るなんてどうかしてるわ!」

「どうかしてるや、おかしいなんてよく言われるぞ。」

「あ、そう。もう、どこにでも行けば!」

「最初からそのつもりだ。」

一緒にいればわかるはずのアリスから離れ、森の中をうろつく。

「はあ。」

突然の深いため息。

「やっぱ女って苦手だわ。」

説明しておく必要があるだろう。

彼は、昔から大の女嫌いである。

自分から泊ると言い出したのはこの家にたった一人なら我慢できる
と思ったからだ。

ちなみに、記憶は、能力に支障が出ない部分はきれいさっぱり消え
ている。

「中途半端な消し方しないでほしいわ。」

愚痴っけていても仕方が無いと思ったのか、ひたすら歩く。

「とりあえずこの森から出たいな。」

太陽光が来ないのはうれしいが、周りが見えない。」

明るいの嫌いらしい。

とりあえず、ひたすら歩き続けていると。

「ん? 霧?」

霧あたり一面いつの間にか霧に包まれていた。

「ただでさえ視界が悪いのに、こりゃないよ。」

空でも飛べればすぐに出れるのに。」

この後に無駄に歩きまわって、野宿をしたことは言うまでもない。

【第三話】そういえば能力は？（後書き）

徐々に短くなってきてます。

名前と能力のアイディア募集中です。

それでは

【第四話】森を抜け出すが・・・誰？（前書き）

今回は、魔法の森を出でて、今までレギュラーで出てきた人の存在にやっと気がきます。

どうぞ

【第四話】森を抜け出すが……誰？

彼は、森で野宿中。

人形になつたので体温が下がるかと関係ない。

寝る必要はないが、人間だったころの癖なんかで眠りたいのだ。

「zzzz」

そうやって爆睡していると。

「お、こんなところに人形が。落ちているのは私の物だぜ。」

魔女のような女性が彼を拾う。

「意外と軽いな。中身は空か？」

担がれようと爆睡している。

「zzzz」

だが、微妙起きている。

「……」

彼は、ぱっと起きることはない。

「うう。」

「ん？ 起きちまったか？」

「起きてるよ。」

「うおあ！」

予想は出来ていたが、まさか人形が寝るなんて思っていなかったの
であろう。

ものすごい驚きようだ。

「そこまで驚かなくてもいいじゃないか。」

「あ、ああ。」

「まあいいや。」

知ってるか知らないかわからないが言っておく。

人形だからってアリスって人のところには連れて行くなよ。そして俺
に直接触れるな。」

其れを聞いた少女は軽く不思議に思つても、はっと顔を上げた。

「ああ、なるほど。アリスに拾われてそれであいつに色々やられたが、其れが嫌になって逃げ出したと。」

「違う！ 1%くらいあっているが違う！」

「1%はあってるんだ。」

「転生先がこの体で、アリスに手伝う代わりに泊めてくれと頼み、三日もたつたら、もう手伝いもだるくなつたから出てきたんだ。」

「殆ど合ってるぜ？」

「……だな。」

納得。

「まあ、理由はどうあれ、アリスのところに連れて行かなきゃいいんだろ？」

「ま、そう言うことだ。」

とりあえずアリスのところに戻らなくて済む。

「ところであんた、名前は？」

「ん？ 無い。」

「ナイって名前なのか。」

「違う！ 名前が無い。」

一言では、伝わらないことも多い。

「まあ、名前が無いから適当に呼んでくれ。」

「適当って。」

アリスの時にもやったやりとりである。

「まあ、いいや。とりあえず能力持ちだな。他人の能力には興味が無いからどうでもいいが、一応見てみたいものだ。」

絶対に興味がある。

「【キャラクターをコピーする程度の能力】らしい。俺としては、結構い能力だ。」

「キャラクター？」

キャラクターが何なのか分かっていない様子。

「アリスは知っていたんだがな。キャラクターってのは、想像上の人物や生き物だ。」

つまり、かなり特殊な能力をもっていたり、ありえない形状をしたやつが多い。」

「なるほどね。」

理解してくれたようだ。

それはさておき
閑話休題

「一つ頼んでいいか？」

「その前に自己紹介をさせてくれ。」

「お、応。」

「私は霧雨魔理沙。この森で道具屋をやっている。」

「そうか。」

「そんなことよりも、頼みってなんだ？」

「どうやら聞いてくれるようだ。」

「この森から出たいのだから？」

「そう、とにかくこの場を出なければ始まらない。」

「何だ、そのくらいでいいの。良いぜ、付いてきな。」

「そう言っただけで魔理沙は箒にまたがり空を飛び始めた。」

「ちょっと待った。俺飛べねえよ。」

「そう言うが。」

「能力使えば、飛行能力を備えたやつくらいあるだろ？」

「能力を聞いたばっかで応用を考えている。」

「あ、なるほど。」

「能力を使う側が分かっていない。」

「えっと、飛行能力か。」

「意外と思いつかないものなのか、考える。」

「早くしてくれないか？ 私も暇じゃないんだ。」

「相当暇だけに見えているのは私だけだろうか。」

「ああ、ちょっと待ってくれ。」

「どうやら思いついたようだ。」

「マスターハンドって飛べるじゃん。」

「身体を右手の創造神に変える。」

「手？」

「これしか思いつかなかった。」

「そうか。でも、どんな姿でも球体関節何だな。」

「それは俺も不思議に思う。もしも、不定形生物になったらどうなるのか。」

「不定形生物？」

どうにも、もともとの世界で普通のことでも此方では、ありえないらしい。

「不定形生物ってのは、特定の姿をもたない生き物で、現実的なここでは、蛸とかそういうにゆるにゆるしたやつかな？」

「ああ、触手か。」

「そんなとこだ。」

適当に説明する。正直、こんな説明で理解できる魔理沙の理解力もすごいと思う。

「ところで、その小さい人形は何だ？」

「え？」

私は指を差された。

「ん？ 何だありゃ？」

どうやら、今まで気付いていなかったらしい。

「ああ、なるほど。アリスの家にいたから、自分の人形でも、アリスのと勘違いしたか。」

「知るか！」

急につかみかかられた。

「で、お前は何もんだ。」

私？ 私は、貴方のオプシヨンとでも思ってください。

「オプシヨン？」

まあ、戦闘のサポートや、貴方の足りない部分を補うようなものです。

「ああ、なるほどね……ってそんなの通用するかよ！」

もともとは、貴方の魂の入った人形のサポートだったんですが、そ

の人形の妖力が尽きてしまって、妖怪として生きていけなくなってしまうたんですよ。

「なるほど。だから閻魔さまは、何かを見つけたような顔をしたのか。」

多分これじゃなくてもなっただと思えますがね。

「そいつは同感だぜ。」

「ま、いいや。そんじゃあ、案内頼むわ。」

「了解だぜ。」

そう言つと、魔理沙さんはかなりのスピードで飛んで行った。

「ちよつ！ 速！」

其れを彼は拳の形になって追いかける。

「そう言えば、何で急にさんづけ？」

其れは、呼び捨てがやりづらいことに今さら気付いたからです。

「そう言うことが。」

私は、状況説明やナレーションを務めさせていただきます。

「勝手にしろ。」

「同じくだぜ。」

その方が助かります。

「どのくらいで付く？」

「もうすぐだ。この森は広いようで狭いからな。」

十数分後……

「とりあえず人里だぜ。」

「おお、サンキュー。」

人里に到着して、お礼を言つて、魔理沙さんと別れた。

「で、どうする？」

早速私に話しかけないでくださいよ。

「お前意外に話す奴いないだろ。」

まずですね、その見た目だと妖怪と間違われることも多いと思うので、あまり目立つようなことはしないように。

「分かった。で、何をすればいい。」

「そんなの私の知ったことじゃありませんよ。」

「だろうね。」

「そんなこんなで、目立たないように人里を廻る。」

「何で、ナレーションだけ語尾が無い。」

「ナレーションは普通語尾ないと思いますが。」

「・・・だな。」

「納得したようである。」

「この後、人里を廻っていてこんな話を小耳にはさんだ。」

「やっぱあの人は凄いよな。」

「だよな。今まで色々解決したけど、今回も解決しに行くって言うし。」

「その割には、貧乏だよな。」

「それ言ったら終わりだろう。」

「何のことやら気になったのか、彼は盗み聞きを始めた。」

「人聞きの悪いことを言うな。情報収集だ。」

「ま、そうしておきましょう。」

その後聞いていると、場所の情報が聞こえてきた。

「あそこは、賽銭入れれば何かと使えるよな。」

「でも、山の上ってのは答えるな。」

「だな。」

「聞いたか？ 山の上にあるんだとよ。」

「だから、私に話しかけないでください。」

「連れねえな。」

「それで結構。」

「まあ、そんなこんなで周りを見ると、ものすごく高くそびえる山があった。」

「アレか。」

「とりあえずそこに向かうことにした。」

「アレか。」

「アレか。」

「とりあえずそこに向かうことにした。」

【第四話】森を抜け出すが・・・誰？（後書き）

本当に徐々に短くなってきてます。

主人公＋オプシヨンの名前と能力のアイディアを引き続き募集中です。

それでは

【第五話】いざ博麗神社へ！ とか言っておきながら暇をする（前書き）

今回は、博麗神社に行って異変に行くまでです。
どろどろ

【第五話】いざ博麗神社へ！ とか言っておきながら暇をする

私たちは今、ちよいと小耳にはさんだ神社に向かっています。
ちなみに徒歩です。

「ところで、お前つてこつちの奴らのこと知ってんの？」
知っていますよ。ほとんどその身体のサポートをしていた時に、偵察させられましたから。

「元の奴つて、性格悪かったのか？」

ものすごくいい人でしたね。性格は貴方とは正反対でした。

「へー。」

まあ、そんな無駄話をしているうちに山の麓に到着。

「此処を上るわけだが。」

その山は、まるで日本昔話に出てくるような超急角度の山でこれまた急角度の階段がある。

「飛んでいきたいが、能力使って精神削るの嫌だしな。」

その身体は、肉体的には疲れないのですから普通に登ればいのでは？

「あ、そっか。」

はあ。

十分後

「まだつかねえのかよ。」

やっと半分まで登ってきた。

疲れない身体でもこれはやる気がうせてならない。

「お前は飛んでるから楽だよな。」

・・・

「無視するなよ！」

そしてそのまた十分後。

「やっと着いた！」

博麗神社に到着。

そこには、今にも解決に向かうような雰囲気醸し出した紅白の脇を出した巫女がいた。

「あら？ 貴方誰？」

少々苛立っているらしく、微妙に戦闘態勢。

「いやいや、戦う気はないから殺気を出さないでくれ。」

「そうなの？」

何とか静めた。

「えっと、とりあえず自己紹介って言っても俺名前ないんだった。」

「名前が無いって、おかしくない？」

また戦闘態勢に入った。

「いやいや、これにはわけがあるんだ。俺は転生したらこの体で、

もとは人間だったんだ。だけど名前の部分だけぼっかり無くなっ

ているんだ。名前が無いのは怪しいと思うがお願いだからその御札を

下してくれ。」

名前が無いというのは色々と不便である。

「なるほどね。ある程度理解したわ。とりあえず私も自己紹介ね。

私は博麗霊夢、まあ見ての通り巫女よ。

で、その小さいのは？」

私も？

「あたり前でしょ？ さっきから状況を適当に説明しているんだか

ら。」

はあ、分かりました。

私も彼と同じで名前はあります。基本的には状況の説明と彼のサ

ポートをやっています。

「ふーん、そう。」

私の時は リアクション reaction 薄いですね。

「微妙なところで英語出すなよ。」

ww

「とりあえず、御賽銭入れていくの？ それとも他に何か用？」

「いやちよつと、あんたが異変を解決しに行くって聞いたもんだからさ。其れを手伝おうと思つてな。其れ+俺の能力の手がかりになるようなものを探す。」

「能力の手がかり?」

彼は、いくつかの能力をもっているのですが、まだ一つしか使えないのです。

「多重能力ね。まあ、付いてきたければ付いて来れば? その代わりに私は手を貸さないから。」

「おお、サンキュー。」

いまさらですが、彼の考えていることはよくわかりません。

「出発は今日じゃないからゆっくりしていきなさい。」

「いや、其れは遠慮しておく。」

「何で?」

「この神社に男女二人は無理。」

彼は女嫌いなんですよ。

アリスさんのところに泊らせていただいた時もアリスさんの寝室から最も遠い部屋の角で壁の方を向いて寝ていましたから。

「人形つて寝るの?」

もともと人間なので、その時の習慣がまだ残っているんじゃないですか?

「ああ、なるほどね。」

「そう言うことだ。どうせ寝なくてもいいんだ。だったら周りから何か来ないか見といてもいいが。」

「あらそう? じゃあ、お願ね。」

「応!」

こうやって接しているのを見ると、本当に女嫌いか微妙になりますね。

「五月蠅え。」

そんなこんなで、暫く見張りをしていると。

「あー暇。」

ほとんどなにも来ない。

其れもそのはず。この神社には其れなりの結界が張られており、弱い妖怪は来れない。

「そうだったのか？」

「気付きませんでした？」

「全く。」

まさか、貴方霊力や妖力の類は無力ですか？

「何それ？」

「はあ。」

「え！？ 知ってなきゃまずかったか？」

能力もちなら知っておきましょうよ。

「すまん。」

霊力って言うのは、幽霊の力って言うだけあって、魂の強さなどを表します。

妖力は妖怪の力であり、特殊な能力の強さを表します。

ちなみに霊夢さんは霊力に頼っています。

後は魔力とかそこらへんですね。

魔力というのは・・・

「魔力なら分かるぞ。確か魔法とかそこらへんに使われる奴だろ？」

「ブレイブルーなら魔素だ。」

何でそこだけ知ってるんですか。

「よくゲームで使われるから。」

成程。

その後も暫く見張り。

「お人形さーん。」

呼ばれた。

「・・・」

「あんたのことよ。」

「あ？ 俺？」

「こつやって呼ばれた事ない？」
「無い。」

今まで貴方とかあんたとかしか呼ばれてませんからね。

「そうだったんだ。まあ、それはさておき閑話休題もう見張りは良いわ。そろそろ出るから。」

「お、異変解決か？」

「そうよ。貴方も来るんでしょ？」

「もちろん。」

凄いやる気ですね。

「リアル弾幕を感じてみたい。」

ああ、そう言うことですか。

「でも、まだメンバーが足りないわね。」

「誰が来るんだ？」

「魔理沙って娘なんだけど。」

魔理沙さんですか。確かにあの人は、こついうのに興味ありそうですね。

「俺も同感だ。」

「あら、知ってたの？」

ええ、人里に送ってもらいましたから。

「そう。」

数十分後

「ん？アレじゃね？」

彼が指さす方向にはまるで隕石のように風を切りながらこつちに向かってくる人がいた。

「そうね。其れじゃあ、行きましようか。」

無視ですか。

「メンバーって言っても多分全員ソロだろう。」

「その通り。私たちは待つことはあっても行動は別々でソロでやってるわ。」

そうなんですか。

「じゃ、俺らもソロだ。」

こうして、異変解決に向かった。「ちょっと待て。どうしました？」

「どこで異変が起きてるんだ？」

「ああ、言い忘れたわね。これから魔法の森の紅魔館ってところに乗り込みに行くの。何でも、あそこを中心に紅霧がかかってるって聞いたから。」

「ああ、それなら俺見たぞ？」

そうですね。魔法の森を出る直前に紅霧がかかりましたよね。

「だよな。」

「だったら、話は早いわ。さっさと行きましょう。」

「あいよ。」

改めて異変解決に出発。

【第五話】いざ博麗神社へ！ とか言っておきながら暇をする（後書き）

徐々に短くなる小説WW

ちなみに、異変はWindows盤は何一つ起きてない設定です。

閻魔さまが過去にとばしました。

そんなところです。

それでは

【第六話】番外編其の一（前書き）

今回は、名前が決まります。
どうぞ

【第六話】番外編其の一

「番外編ということだが。」
「何をやるのでしょうか？」

【いや〜ほ〜。】

「だ、誰だ！」

「やっと来ましたか。」

「ほへ？」

【はいどうも、作者でございます。】

「作者？」

【うむ、私はこの作品の作者である。

東方人形劇のプレイ日記と名前がかぶっているのこ作品の作者だ。】
「変えるつもりはありますか？」

【無いけど変える可能性はあるかもしれない。】

「そんなことより何しに来たし。」

【作者に其れはないだろ。まあ良いや。今回はお前たちの名前を決めようと思う。】

「やっとか。」

「やっいですね。」

「ほいじゃあ、とりあえず候補を出すぞ。」

「ハイド氏からのアイデア。」

「マリオネットより「マリオ」「リオ」

「デウス・オブ・マキナより「マキナ」

「後私が考えたので、自立人形オートマトンから取ってマトン。」

「後ほかにはギニョールから取った「ギニョール」とか、ビスク・ドールから取った「ビスク」とか。」

「さあ、どれにする！？】

「どうするって・・・多いわ！」

「良いじゃないですか。」

色々混ぜれば。

【混ぜるって、おい。】

「それにしてもよく調べたなおい。」

【ウイキペディア最高！】

そんなことよりもさっさと決めましょうよ。

「いまさらだけど意外と毒舌なのな。」

【まあ、確かにさっさと決めないと。これ以上読者様に迷惑かける負けにもいかないし。】

能力は募集し続けるんですよね。

【まあね。】

「ってか決めようぜ。」

【応！】

はい。

メンバー考え中……

「よし！ ころしよう。」

【まあ、いんじゃない？】

私もこんな感じで良いと思いますよ。

「そんじゃあ、改めて発表だ！ 俺の名前はキトリDAー！」

とりあえず説明しますか。

「マキナ」のキ

「マトン」のト

で、その間に「リオ」のりを入れるとこうなりました。

【そんじゃあ、次はお前だ。】

私？

【そつだ。一応レギュラーとして今まで出てきてるからな。】

まあ、良いですか。

【こっちはもう少し集めてもよかったかもしれないが、ついでに決める。】

ついでですか。

【うんついで。】

「で、今回の候補は？」

【これまたハイド氏よりサポートから取って「ポート」。

で、私が考えたのはオプシオンから取った「シオン」式神から取った「キガ」普通に「シキ」にしなかったのは単純すぎたから。後は人形の眼ドールアイって言う人形ドールの概念から取った「ルアイ」。

こんなところかな？】

「「ポート」と「シオン」を合わせてポーションなんてどうだ？」

【どこの回復アイテムだよ。】

ふざけないでください。

「すまん。」

【まともに考えろ。】

メンバー考え中……

それでは発表しますよ。

私の名前はルアートです。

「ルアイ」と「ポート」を適当にくっつけました。

「ま、いんじゃない？」

【うむ。それじゃあ、私はこれにて失礼する。】

「応！」

今度の番外編でお会いしましょう。

【それでは！】

【第六話】番外編其の一（後書き）

ものすごく短かったです。

この先はキトリとルアートが名前として使われます。
アイディアを出してくれた方々有難うございました。
それでは

【第七話】分れ・・遭遇・・初バトル！（前書き）

はいどうも。

今回は、初バトルです。

どうぞ

【第七話】 分れ・・・遭遇・・・初バトル！

彼と霊夢さんと魔理沙さんは、異変解決のために飛び立ったのは良かったが。

「はぐれちまった。」

右手のままでも考えるようなポーズをとっている彼。

「ま、いつか。」

本当に解決しに行く気があるんですか？

「一応な。」

その姿のままでも困るでしょうに。とりあえず元に戻ったらどうです？

「そうだな。」

戻した時に、思い出したように彼は私の方を向いて。

「魔理沙の声とカルルの声って一緒じゃね？」

知りませんよ。私は貴方の世界のことはああ他の覚えている部分のサポートに必要な部分しか知りませんから。

「そうなのか？」

そうですね。

そんなこんなで、勘を頼りに進むと、微妙に赤い、いや、紅い霧がうつすらとかかってくる。

「あつてるようだな。」

そのようですね。

恐らく敵の敷地内にかかっているであろうこの霧。だが、敵が誰一人として来ない。

「とりあえず濃くなっていく方に進むか。」
「ですね。」

と、決めた時だった。

突如として、何処からかエネルギー質の弾丸。

そう、弾幕が放たれた。

「うおわ！ な、何だ？」

これが弾幕です。

こつちの世界の主力武器とでもいいですか。とりあえず敵が近くにいます。

「応！」

気を引き締める彼をあざ笑うかのように出てきたのは一人の少女。

だが、その少女は妖力をまもっていた。

「妖怪か？」

そうですね。

「ねえ？」

「？」

「貴方は獲って食べれる人？」

「な！？」

妖怪だから人を食べるのは当然ですよ。

「そ、そうか。」

驚く彼を静めたところにその少女は姿を現した。

「あれれ？ 何だ人間じゃないんだ。つまんないの。」

まるで幼女を思わせるその格好は、真黒な服に金髪、そして紅い髪飾り。

だけど、其れは人間ヒトを欺くための外殻であり、実際は軽く100歳を超えているでしょう。

見た目相応の年ならば此処まで大きな妖力はありませんからね。

そんなことよりも、ところどころ怪我をしていたり服が破れているところを見ると、霊夢さんや魔理沙さんと一戦交えたようですね。

「なあ、同じ妖怪のよしみで聞きたいことがあるんだけど。」

貴方妖怪でしたっけ？

「五月蠅え！ ま、聞きたいことってのは、この赤い霧の元凶を知らないか？」

率直ですね。

「まどろっこしいのは嫌いだ。」

そうですか。

「この霧の原因？ どちらに行けば濃くなるのかは知ってるけど、後はわかんないよ。」

「それでも十分だ。」

頼む！ 教えてくれないか？ 仲間とはぐれてしまった。」

「まあ、教えても良いけど、私と弾幕ごっこしよう。」

「弾幕ごっこ？」

弾幕ごっことは、スペルカードルールにのっとった主に弾幕と呼ばれる飛び道具を打ち合って、先に相手の体力を削った方が勝ちです。

「つまり、シューティングのボス戦と。」

まあ、そんなところですね。

「やってくれる？」

「良いですとも！ 相手になってやる。」

俺の名前はキトリ！」

「私はルーミア。で、そっちの可愛いのは？」

可愛いって・・・まあ、私はルアートと言います。以後お見知りおきを。

「それじゃあ、はじめよっか」

「応！」

私は手を出しませんからね。

「まずはこっちから行くぜ！」

オプティックブラスト！」

「そんな一本のレーザーじゃ弾幕とはいえないよ。」

彼は、目からレーザーを出しましたが、難なく避けられて、よく言う通常弾を高密度で売ってきました。

「ちよっ！ めっっちゃ高密度じゃん！」

「このくらいできなくちゃすぐ壊されちゃうよ。」

其れをギリギリのところまで避けきった彼は、まるでロボットのような身体になりました。

「ドクター
ドクター」
「Drドウム！」
Drドウム

機械の体に緑色のローブをまとった人(?)。

「君のには劣るが、これでどうだ！」

「フオトンショット！」

彼は、指を大きく広げて、それぞれの指から、小さなレーザーを放った。

「もうちょっと頑張つてよ。」

「それをやはり軽々と避けるルーミアさん。でも、彼はそこに。」

「プラスマビーム！」

腕を合わせて合わせた部分から、オプティックプラストよりも少々太い程度にビームを出した。

敵機 ¥ / / / /

¥ ¥ ? / /

自機 ¥ /

ゲーム風になるとこんな感じですよ。

「それはだめだよ。」

「知るか！」

そのレーザーは思ったよりも早くルーミアさんは直撃した。

「一面つてとこかな？」

だが、油断は禁物ですよ。

「わかってらあ。」

だが、状況はさらにやばい方に行っている。

「ふう、ラッキー 御札が取れたよ。」

「御札？」

そこには、さっきのルーミアさんの面影を残し、大人になったルーミアさんがいた。

「そうそう。私の頭のアれって御札何だけど、霊力が強すぎて、自分じゃどうにもできないんだ。」

でも、さっきの君の弾幕で、上手く取れたってわけ。」

「……やばいかな？」

やばいと思いますよ。

とりあえず、御札を探して、また頭に張るのが一番いいかと。

「だな。えっと御札は……あそこか。」

御札は、ルーミアさんの後ろに跳んでおり、取りに行くには、ルーミアさんの弾幕をよけながら、御札を取りに行かないとならない。

「面倒だな。」

そう言うと、彼はまた身体を変えた。

「ダルシムだ。」

ダルシム

インドのファイター

ヨガの達人。

腕を伸ばしたり、火を噴いたりトリッキーな動きをする。

「ヨガ！」

彼は急にいなくなると思うと、もう御札を取っていた。

「え？ 何々？」

「ワープしただけだぜ？ こっちの世界では霊力とかの応用でできないのか？」

「そんなの無理だよ。」

「まあいいや。」

彼は、腕を伸ばして、ルーミアさんの頭に御札を貼ろうとするが。

「もうやだよ！」

其れをさっきよりも高密度の弾幕でガードして断固拒否。

「良いからつけてるって。」

「絶対いや！」

まるで、親が髪を結ぼうとして其れを暴れていやがる子供のようだ。でも、上半身裸の人が腕を伸ばしてつけようとする画はシミュールです。

「だったらこうするまでだ！ ヨガ！」

彼はまたワープをした。その先は、ルーミアさんの頭上。

「ドリルキック！」

手を合わせ、回転しながら下降していく。

その脚の先には、御札がくっついていてる。

「どこ？」

頭上を取られていることに気付いていない様子。

勝負ありですね。

「これで俺の勝ちだ！」

「あ痛！」

御札は、しっかりとルーミアさんの頭にくっついて、ルーミアさんは元の小さい姿に戻った。

「俺の勝ちで良いか？」

「うんいいよ。遊んでくれてありがとう。」

「うう！」女の子に俺を言われて身震いですが、本当に女嫌いなんですね。

【第七話】分れ・・遭遇・・初バトル！（後書き）

ルミア戦でした。

一応順番的に次回はその人です。

因みにカルルと魔理沙の声が同じと言ったのは、東方夢想夏郷の魔理沙の声とアルルの声の声優さんが沢城みゆきさんだからです。
それでは

【第八話】強い妖精たち（前書き）

今回は妖精たちとの戦闘です。
どうぞ

【第八話】強い妖精たち

ルーミアさんに教えてもらい、霧の濃くなつていく方に進んでいきます。

「ズエアアア！」

進んでいくと、見ず知らずの妖精に攻撃されています。

「まったく何なんだよ。」

紅魔館にいる妖精メイドではないところを見ると、これは異常ですね。

妖精は基本的に戦いを好みませんし、統率する者がいると考えるのが妥当かと。

「ドスジャギイみたいな言い方するな。」

気にしている場合ですか！

「つと、すまねえ。」

全く、油断は禁物ですよ。

「だって妖精って頭悪いつて聞いたし、不意打ちなんて予想外だ。妖精なめすぎですよ。」

「ああ。」

と、まあ、こんな調子で進んでいくと、微妙に水のようなにおい。

「流れる音はしてないから、湖でもあるんじゃないか？ 少し休憩するか。」

そうですね。

まあ、それも峠を越えてからですけどね。

「峠？ 此処は山なのか？」

敵がいますよ。

「マジか？」

ええ。今にも撃つてきそうです。

「先手必勝で攻撃するか？」

いえ、此処は様子見をしましょう。

「了解。」

様子を見つつ、先を急ぐため、進むと。

「止まって！」

発砲してきました。

「ぬあ！」

威嚇射撃だったのか、簡単に避けられました。

「何すんだ！」

「この先には、もっと危ない妖精ひとがいるの。死にたくなければ、さつさと帰った方がいいよ。」

忠告のようですね。

「そのようだな。忠告有難さん。だけど、俺の目的は、この紅霧を止めることだ。こんなところで引き返すわけねえだろ。」

挑発してどうするんですか！

「そう聞こえたか？」

ハア。

「そうなんだ。じゃあ、力づくでも止めるよ！」

「うっしや来い！」

「絶対通さない！」

「絶対通る！ 波道拳！」

波道拳

手から波道を出して攻撃する。

弾幕とは言えないが、弾は大きめなので、相殺狙いで十分威力を発揮する。

「この程度の実力じゃ、絶対無理だよ。」

「知るかよ。俺の能力は、ほぼ無敵だから問題ねえよ。」
「だから、挑発しちや駄目ですって。」

「そこまで言うんだ。だったら、私を瞬殺してみてよ！」

えっ？

「それなら通してあげるからさ。」

「いやいやいやいや、どういう流れですかこれ？」

「俺に聞くな。まあ、とりあえず、瞬殺すればいいんだろ。行くぜ！」

えっ？ 大空に飛んで何を？

「ガンマクラッシュ！」

ガンマクラッシュ

大空に飛び隕石をつかんで落ちる技。

「えっ？ それって弾幕なの？」

知りませんよ。

「食らええい！」

まあ、そのまま急降下で。

「キヤアアアアア！」

ですよね。

「どつちにしろ、霊夢とか魔理沙との戦闘でまともに戦えなかったんだ。どうせ、こつなっただろう。」

でしょうね。

大丈夫ですか？

「う、うーん。アレ？ あっちの人は？」

彼ですか？ 彼は女嫌いでした。あつちで私を待ってますよ。

「そうなんだ。ところで、この先行くの？」

ええ、行きますよ。

「この先には、私より強い娘がいる。気をつけてね。」

ええ。ご忠告ありがとうございます。では。

「あ、名前言っただけだね。私は皆に大妖精と呼ばれてる。ほんとは名前なんてないけどね。」

私はルアートと言います。彼はキトリと言います。それでは。

「がんばって。」

有難うございます。

「終わったか？」

ええ。それにしても女嫌いは治した方が良いと思いますよ。

「無ー理無理。俺の女嫌いは揺らがないさ。」

ハア。

大妖精さんを倒して、休憩のために湖を目指します。

数分歩いて、湖に到着しました。

のは良かったのですが。

「何故凍っている。」

今が冬かどうかは置いて、湖が表面ではなく、真まで凍っています。

「スケートリンクってレヴェルじゃねえぞ。」

と、そこにまたもや弾幕が放たれました。

「冷静すぎるぞお前！」

避け切れているのですから、良いじゃないですか。

それにしても、氷とは物理的な攻撃ですね。

「あー！サイキョーのあたいの氷を避けたわね！」

「いや、単発じゃあ、簡単に避けれるだろ。」

怒って出てきた妖精はまさしく氷という感じの水色の服に水色の髪、青い髪飾りをつけていました。

「アタイはチルノ！全知全能最強無敵だぞ！」

「黙れ馬鹿！」

「馬鹿じゃないもん！」

「そこで張り合うから餓鬼だし馬鹿なんだよ！」

「キーツ！ もう許さない！ ぼこぼこにして、謝らせてやる！」

「無一駄無駄！」

その挑発的な口調はやめましようよ。

「無一理！」

「食らえ！ アイシクルマシンガン！」

「バーニングハート！」

バーニングハート

腕や足に炎をまとい、攻撃する技。

四発当てると何かが起こる。

「いくら撃とうと、氷は炎にとかされる運命にあるんだよ！」

「そんなこと無いもん！ 真夏のスノーマン！」

今度は、徐々に大きくなる氷塊ですか。

「氷は火に勝てないんだよ！」

そう言っていると、彼は、腕に炎をまといながら、氷塊を粉々に砕き、チルノさんにそのまま攻撃をしました。

「と、溶けちゃう！」

氷の妖精は、熱気で溶けるんですね。

「風！ 林！ 火！ 山！」

四発軽く命中させましたね。

「それじゃあ行くぜ！」

風よりも早く、林よりも静かに、炎よりも熱く、山よりも高くに！
なんかかっこいい言葉を言っていると、彼の体は黄金に輝き、動きが、コマ動きのようにすばやく、一定の距離を動いてチルノさんを翻弄します。

「このまま粉々に砕いてやる！」

氷の妖精は、冷気さえあれば復活しますから、粉々にしても大丈夫

でしょう。

「行くぞ！」

そう言うと、チルノさんをつままえ、先ほどのガンマクラッシュのよ
うに飛び上がり。

「キング・オブ・テイガ！」

キング・オブ・テイガ

ガンマクラッシュの隕石を相手にして叩きつける技。

そのまま急降下して……

「うわあああああああああああああああああああああ！」
と、こんな感じに砕けて行きました。

「ふー。何でも敵が多いんだ。しかも、そろいもそろって霊夢
と魔理沙の後だしよ。」

ま、楽に進めるのですから良いじゃないですか。

「まあな。」

【第八話】強い妖精たち（後書き）

なんか戦闘になると、キトリ君がテルミヤハザマみたいになっちゃいます。

まあ、其れはそれで書いてて楽しいのですが。
それでは

【第九話】居眠り門番さん（前書き）

まず最初にいまさらですが、作者は原作をほとんどやったことがあります。

今回は、あの人です。

どうぞ

【第九話】居眠り門番さん

軽く湖で休憩を取り、チルノさんが復活する前に出発しました。その後は、今まで通りに霧のこくなる方を目指していると。

「zzzz」

「無傷ってことは？」

霊夢さんや魔理沙さんは面倒なのでこの寝ている方を無視していったと。

「そうなる。」

「私たちも無視していきますか。」

「それが一番だな。」

「ま、無視して進もうとしましたが。」

「食らえ！」

「なっ!？」

まさかの攻撃。

「zzzz」

寝ぼけでこの威力とは。

「ん？ ふああ、よく寝た。」

「つて、何奴！」

「あゝあ、完全に起きちゃいましたね。」

「だりい。」

「お嬢様の目的は分かりませんが、侵入者は排除しろとのことですが、恨まないでください。」

もう二人ほど侵入してますよ。

「えっ？」

「あなたが居眠りしている間に巫女と魔女が中に入って行ったと思っぞ。」

「何とっ!？ だったらこれ以上は絶対と通しませんよ!」「あちゃ。」

「さあ！ 何処からでもかかってきなさい！」

「その構え……あんだ、弾幕苦手だろ。」

「ギクツ！」

まあ、ご安心ください。彼も弾幕は得意じゃありませんから。

「つてか弾幕の撃ち方知らないしね。」

「だったら拳を交えましょう！」

なんですかこの熱い展開。

「俺はこういうの嫌いじゃないぜ。」

そうですか。

「今回能力使わないけどいいか？」

それで勝てるならどうぞ。

ちなみに、相手は妖怪、そして能力は気を操る程度の能力と近接戦闘においてとても強い組み合わせですよ。

「構わん！ 今回の目的は勝ちじゃねえ！ 通してもらうことだ。」

勝てなきゃ通してもらえないでしょう。

「知らん！」

「それでは行きますよ！ 私は紅美鈴！」
ほんめいりん

「来い！ 俺はキトリだ！」

じゃあ、今回はほぼ全て解説とさせていただきますか。

「ズエア！」

「なかなか重い掌低ですね。」

彼も近接の方が得意なようですね。

「だが所詮は人形！ 硬く脆い部分を狙えば！」

そう言うと美鈴さんは、彼の肘の関節に手刀を入れます。

「この体は痛みを感じないんだよ！」

そう言つて、アップパーをしようとしませんが。

「！ 腕が……無え。」

さっきの美鈴さんの手刀で右腕の肘から先が取れてしまっています。

た。

「痛みを感じないということは、自分の体の変化に気づかないということです！」

そこに、隙のない怒涛のラッシュを畳みかけますが。

「無駄あ！」

彼は唯一動かなかった頭に頭突きをして美鈴さんを怯ませました。

「腕、腕はどこだ！ あった！」

腕を見つけて、力づくで、関節を押しこみますが。

「やっべつける方向間違えた！」

腕が、左上に向いています。

「そんな腕で戦えるんですか？」

その状態を好機と見たのか、先ほどできなかったラッシュを一気に放ってきました。

「フン！ セイ！ ハアツ！ セイヤ！」

「ク！ 痛みはないが、壊れないか心配だな。」

とまあ、食らいながら腕の角度を調整して、攻め始めます。

「膝！ 肘！ 正拳！」

「小柄の割に重いですね。」

「うう。」

戦闘中でも女嫌いは変わらないのですね。

「せい！」

美鈴さんの型をガードして、その勢いを利用して距離を取ります。

「お？」

彼が何かに目覚めたようです。

「二つ目の能力か？」

「二つ目？」

二つ目は何なんでしょうね。

「ふむ。 もう少し確認するか。」

彼は美鈴さんに急接近して、スライディングタックルで、足元を崩そうとしますが。

「甘いですよ！」

ですが、其れを上から蹴りおろします。

「グッ！」

「まだまだ！」

その反動で浮きあがった彼に向かって、飛び蹴りをしました。

「どうです？」

「……なるほど。二つ目は吸収する程度の能力か。」

成程。だからあんな反撃がしやすい攻撃を。

「新たに何か見つけたみたいですけど、簡単にはやられませんよ。」

今度は、美鈴さんが間合いを詰めていきますが。

「吸収できるってことは、其れを使えるんだよな。」

何か一人で呟いています。

「考え事をしている暇はありませんよ！」

美鈴さんが、間合いを詰め切り、上段を決めようとした時。

「こうかな？」

「！」

片手で蹴りを受け切り、そこから、裏拳をすると。

「クッ！」

美鈴さんが、何の変哲もない裏拳で吹き飛び。

「う、うう。」

城壁にぶつかり、後頭部を打ったのか、気絶しました。

「おお。」

何故彼が驚いているのかは、分かりますね。

吸収した美鈴さんの威力を集中させて、今までの、威力を返したというわけです。

「弾幕も吸収できるのか？」
「知りませんよ。」

大丈夫ですか？

「！」

身構えないでくださいよ。

「えっと確か、何の変哲もない裏拳に吹き飛ばされて……ハッ、侵入者！」

彼ならもう先に行きましたよ。

「クッ！ これで三人目か。」

今回は、戦闘したうえで通ったとはいえ、前の二人は貴女の所為でしょう。

「面目ない。」

私に謝ってどうするんですか。

それでは、私も行かなければいけないので。

「はあ。」

【第九話】居眠り門番さん（後書き）

二つ目開花！　そして能力使っちゃったよ！
後ついでに、ルアートの能力ですが、先読みをする程度の能力です。
発動しているのか微妙な感じですがね。
それでは

【第十話】ルアートの戦闘（前書き）

今回は、オプションのルアートの戦闘です。
ぜひ

【第十話】ルアートの戦闘

美鈴さんを起こして、彼を追って紅魔館内に入ったはいいですが、彼が見つかりません。

それだけならばいいのですが……

「待てー！」

大量の妖精メイドと小悪魔に追いかけています。

私は、解析は得意ですが、戦闘自体はそれほど得意ではないというよりも、専門外です。

「そこ行つたよー！」

「それ！」

本当に、何で虫あみ何ですかねえ？

いくら私が小さいとはいえ、流石に虫あみはなめすぎですよ。

その証拠に、かすりもしてませんから。

「ハアハア、すばしっこい！」

「いくら侵入者といえど、人形だから、意味ないと思うんだけど。」

「お嬢様たちも何を考えているのやら。」

とまあ、逃げつつも会話を聞いて、情報収集なのですが、この方たちは、誰一人として目的を知らされていないご様子。

「今さらだけどさ、あいつしやべってない？」

「人形がしやべるわけないじゃん。」

あのアリスさんのだってしやべれないんだよ？」

「そうだよね。」

全く、なめられたモノです。

専門外ですが、たまには戦闘しますか。

えーっと、こうでしたっけ？

「何やってんのアレ？」

「さあ、でも、何か仕掛けてくるのは確かだと思っよ。」

スペルカード！ 形符「無情のクインテット」！

形符「無情のクインテット」
胴体から、脚、腕、頭が外れ、各自を動かす。

「え？ 分裂？」

流星に身体が全部分れるのは、コントロールが難しいものですね。

「ウグツ！」

「大丈夫！？ キャ！」

「何なのよー！」

各個体、弾幕発射！

「高密度！」

「もういやー！」

ふう、何とか追い払えましたか。

久々にやりましたが、やはりいい感触ではないですね。

この体になつて、早五千年。元がアレだとは思えませんね。

「いたぞー！」

「引つ捕えろー！」

流星に此処まで群がられると、彼の女嫌いも解らなくもないですね。ですが、この屋敷を破壊するわけにはいきませんね。

かといって、この狭い通路で逃げ切るのも無理がある。

仕方が無いですね。

兵符「悲劇のボードゲーム」！

兵符「悲劇のボードゲーム」

チェスの盤を二つに割り、双方とも自分のところに置く。

盤の上に置いてある駒は、実際の兵士となり、倒されれば駒も壊れる。

白と黒の両方が自陣にあり、どちらもキングは自分自身。

ポーン、一つ前、迎撃！ ルーク、三つ後ろ、防御壁！ ナイト、

五つ前、攻撃！

「何これ！」

「チエスの駒？」

「それにしても大きいし、歪でしょ。」

このスペルは、最も強いですが、戦術的要素が入りますからね。

正直、直感でやる方が得意なんですけどね。

つてか、ひと固まりの相手に毎回スペル使っていては体がもちますかね？

つて、今さら何を考えているのやら。私も彼と同じで無限の体力がありませんでしたね。

「さつきから、何この人形！ すっごいムカつく！」

「まあまあ、そう苛立たないで。」

「でも、流石に人形単体でこれはおかしいと思うよ。」

「それもそうだね。」

流石にこれだけ力を有していれば怪しまれて当然ですか。

とにかく、早く彼と合流しないと、彼はいつも私に解析の面では頼りっぱなしですからね。

とまあ、ひたすら進んできたわけですが、曲がり角を適当に曲がってきて、今現在一本道。

後ろは今まで通り大量の妖精メイドと小悪魔。

「この先はまずくない？」

「え？ 何で？」

「何でつて、パチュリーさまが侵入者と戦っているから、邪魔はしちゃダメでしょ？」

「あ、そっか。」

侵入者と戦闘？ この先には、確か図書館があつたはず。そこですか！

「スピードあげたよ！」

「挟んで！」

「了解！」

前からもですか、本当に面倒ですね。

まだまだ身体はもちますね。

夢符「正夢は夢が現実になったわけではない！」

夢符「正夢は夢が現実になったわけではない。」

相手に幻覚を見せて、その見えているものを実際に呼び出す。

呼び出すものは、見た目こそ同じであれ、本質は兵士。

「え、ちよつ、何？」

「さつき見たやつだ！」

「うそ〜！」

後は任せて私は急ぐとしましょう。

兵士は敵の数だけいるわけですからね。

ふう、やっと図書館ですか。

この図書館自体ものすごく広いですし、この中から彼を探すなんて
・・・できましたね。

私がないからってこんなに大きな音を出したら、地形利用もでき
たものではありませんね。

さてと、彼のどこへ向かいますか。

【第十話】ルアートの戦闘（後書き）

ルアート意外と強いなww

次回は同時刻のキトリ編です。

それでは

【第十話】キトリの戦闘（前書き）

時間が進んでいないため、第十話です。
どうぞ

【第十話】キトリの戦闘

ルアートを待たずに紅魔館内に入ったキトリ。言わずもがな其れを後悔した。

「何なんだこの館は！」

迷った。それだけでは良かったが、大量の妖精メイドと小悪魔に追われている。

「フォトンショット！」

「オプティックブラスト！」

眼と指からレーザーを出し続けながら強行突破をしていく。

「何これ！」

「不規則もいいとこだよ！」

ちなみに、オプティックブラストとフォトンショットは反射する。

「迷った！」

迷い続けている。色々と進んでいくが。最終的には。

「もうぶっ壊す！ ジャガーノートヘッドクラッシュ！」

ジャガーノートヘッドクラッシュ

ものすごい頭突き。

外を目指して、壁をぶっ壊す。

「どおおおおおりゃあああああああ！」

とりあえず館内から脱出。

そこで後ろでは。

「早く直さないと！」

「セメント足りる？！」

壁の修復工事中。

「えっと、別館とかから潰すか。」

そうして探すと、窓にしては妙に低い場所にある。

「地下室か。あそこから潰すか！」

パリーンという音を立てながら、スライディングで、その地下室に侵入。

「！ 図書館?!」

そこには、ものすごい数の本棚と本が並んでいた。

「ぬわい！」

地上に落ちる前に、急に弾幕が迫ってくる。

「ヨガ！」

其れをワープで軽くかわす。

シユウ……

弾幕は、壁に当たると爆発も何もせず消えていった。

「弾幕が吸収できないようなら不利かもな。」

そんなことを考ながらも、放たれた方向を睨む。

「ビクツ！」

「はあ？」

そこには、今までの小悪魔よりも強そうであるが、今までの小悪魔よりも小さな小悪魔がいた。

「中ボス？」

そこに、何のためらいもなく。

「プラスマビーム！」

ものすごい速さでレーザーが飛んでいき。

「にぎゃあああああ！」

直撃。

「ああるええ？ そこ避けないの？」

瞬殺された小悪魔をあわれに思いながらも、どこら辺から潰すか悩んでいると。

「オータムエッジ！」

急に歯車のような刃が飛んできた。

「！」

其れをギリギリで避ける。

「今度こそボスだよな。」

そこを見ると全身紫の服に、カラフルな髪飾り、月の飾りが入ったこれまた紫の帽子をかぶった少女がいた。

「ま・た女か。」

女嫌いとしてはこの世界は最悪かもしれない。

「先手必勝！ W指！ム！」

両手から指ビームを放つ。

「水よ！」

其れを泡のバリアでガード。

「できるのか？」

今まで避けられたことはあっても防がれたことはない。

「だったら近接戦だ！ 針で割つたる！」

そう言つて、腕を仙人掌の様に思いつきり殴りにかかるが。

「土よ！」

急に土の壁が立ちはだかるが。

「たかが土壁！ 無駄だ！」

と、思つて思いつきり殴る。

ズウウン

「！ 壊れない。」

結構自信があつたのか、壊れなかつたことに驚いている。

「無駄よ。私の魔法壁はそう簡単には壊れないわ。」

「チツ！ だったらこれだ！ ストレートフラッシュ！」

ストレートフラッシュ

カード型の爆弾を大量に投げる技。

「そらそらそらそら！」

カカカカカカカカカカ！

魔法壁に亀裂が入り、其れを駄目押しと言わんばかりに爆発で破壊する。

ポロポロポロポロ・

「自慢の魔法壁が壊れちまつたぞ？」

「なかなかやるわね。」

「俺の能力は無敵だ！」

「ずいぶん自信満々ね。」

「まだ名乗ってないな。俺の名はキトリ。」

「私はパチユリー・ノーレッジ。」

「さて、この戦闘を楽しもうか！」

「私はただの手伝いだいなんだけどなあ。」

「知らぬ！ 分からぬ！ 解せぬ！」

「うう・・・」

微妙に退かれる。

「さーて行くぞ！」

そう言っただけで最初にやったことは。

「ザ・ワールド！ 時よとまれ！」

ザ・ワールド

時を止める技。制限時間は約十秒。

「さてと、困むか。」

そう言っただけで、パチユリーの周りをぐるぐると回りながら。

「フォトンショット！」

両手の親指以外の指からレーザーを放つ。

「そして時は動き出す。」

止まっているレーザーが急に動き出す。

「！ 間に合わない！」

「チェックメイトだ！」

迫るレーザー、だがしかし。

「なんてね。」

「what？」

しゃがんで避けた。

「馬鹿ね 困んでいるとはいえ、貴方の狙いは頭だけ。簡単に避け

れるわよ。」

「……そうか。」

「まさか、考えていなかったの？」

「うむ。」

「はあ。」

呆れているのを無視して至近距離で。

「ガンマウェイブ！」

ガンマウェイブ

地面をちやぶ台返しのように返して、波のように攻撃する。

「馬鹿ね。」

其れを空中に避ける。

「追撃！ インフェルノデイバイダー！」

インフェルノデイバイダー

剣を逆手に構えて飛ぶ技。

「クツ！ 金よ！」

其れを、最初の歯車状の刃で防ぐ。

「だーもー邪魔！ こうなったら、アーマーゲドン！」

アーマーゲドン

小型隕石を大量に落とす技。

「ちよっ、それは！」

其れを避けることに専念するが。

ドーン！ バゴーン！ ズドーン！

ものすごい爆風である。

「吸収！」

その爆風の衝撃を能力で吸収する。

「さてと、後一発。後一発俺のパンチや蹴りを喰らえばお前の負け

だ。」

「何をしたのかしら？」

「教えるわけないだろ！」

【第十話】キトリの戦闘（後書き）

微妙に短かったです。

次回は、やっと十一話に入って合流すると思います。
それでは

【第十一話】合流・…そして100%（前書き）

やっとのことで合流です。

それで、パチュリー戦も終わります。

どうぞ

【第十一話】合流・・・そして100%

ルアートside

扉を念力で開き、図書館に潜入。爆発音のした方に彼がいると察し、向かっています。

「おぉらぁ！」

彼の声がしますね。恐らくというよりも、絶対戦闘中でしょう。図書館ということは、パチュリーさんですかね？

「火よ！」

「ぬわい！」

これはまずいですね。さっさと向かいますか。

キトリside

「さつきから、水だの金属だの面倒臭すぎるだろ！」

「これが私の力よ！」

戦闘が激しく、周りの本棚が少々倒れている。

だが、其れはキトリの攻撃による衝撃のみであり、パチュリーは本を傷つけないようにしている。

「正直無視していきたいが、仕方ない！」

倒れていない本棚の後ろに回り、パチュリーの方に殴りとばす。

「これなら防げまい！」

side out

本棚が倒れているのが幸いして、パチュリーさんは見つかりました。ですが、彼の姿が無い。

と、ゆっくり探しているのもつかの間、急に本棚が飛んできて。

「そんな！」

パチュリーさんが焦っています。

「って私も逃げ、うおあ！」

「ん？ ルアートか？」

やっと気付いてくれたのは良いですが、これはどういう仕打ちでしょう。

「全く、私が本を大切にしているのは気付いていたでしょう。」

パチュリーさんがそう言うと、いきなり本棚が軽くなり、浮き始めました。

私ではこんなに大きいのは動かせませんからね。助かりましたよ。

「お前何処行つてたんだ？」

貴方が勝手に入ったのが悪いのでは？

「それもそうだ。」

そんなことよりも、図書館なんですからもう少し地形を利用したかどうか？

規則的な並びなら、反射角を計算して、陰からレーザーを当てるのも簡単でしょう。

「性にあわねえ。」

そうですか。まあ、さっさとこの場を切り抜けるのが吉かと思いませんが。

「そうだな。とりあえず、あいつの能力が厄介だ。」

レーザーは泡でガードされるし、剣術は歯車が邪魔するし。」

だったら、簡単ですよ。かなり強引でチートですが、自分に衝撃をためて渾身の力で攻撃すればいいじゃないですか。

「その手があったか。でも、さっき使っちゃった。」

全く、貴方って人は。

「そんなことよりも、どうやって衝撃を吸収する？ どうやら弾幕には対応していないらしい。」

自分で殴るか、爆風を吸収するのが一番ですね。

ために私がやってあげましょうか？

「おお、頼む。」

本気でいきますからね。こうみえても力は強いですから。吹き飛ばされないように踏ん張ってくださいよ。

「あいよ。」

「ずおおおりやあああ！」

「ブフォア！」

あらら、しっかりと踏ん張ってくださいって言ったのに。そんなに簡単に吹き飛んでどうするんですか？

「ちよつと意外すぎた。」

「はあ。」

「とりあえず吸収完了だ。これを喰らわしたる！」
束縛していきますか？

「できるならやれ。」

了解です。

彼は、全速力で、パチュリーさんに詰め寄ります。
私も束縛の準備と行きますか。

「空を飛べない貴方が、私を殴れるの？」

「殴れるさ。動かないあんたならな。」

「無駄よ……」

「動けないんだろ？」

「クツ。」

全く、私がいないとこんなに簡単に倒せる相手もかなり時間がかかりますね。

「食らえ！」

「うっ！」

まあ、今回も美鈴さんの様に吹き飛んだわけですが。

「カハッ！ カハッ！ ウエ！」

パチュリーさんの苦しみ方がいようです。

何かしましたか？

「いや、普通に殴っただけだが。」

そうですか。

「喘息持ちなんじゃね？」

成程。喘息持ちであんなに動いたらこうなりますか。

ちよつと応急処置してきます。今度は勝手に行かないでくださいよ。

「応。」

大丈夫ですか？

「グウツ！ ガハツ！ ウウ・・・」

酸素不足ですね。えっと、人工呼吸をするにも私酸素使いませんし。

こういうときは、酸素で膨らませた風船を、くわえさせて。

絶対に口を開けないでくださいよ。

「コクコク。」

それでは行きます。

風船の戦を抜き、酸素が勢いよく肺に入っていく。

「ふう、助かったわ。」

いえいえ。それでは、とりあえず先に行きますね。

「私は負けたからね。止める気はないわ。」

有難うございます。

「おわつたか？」

ええ。

「それにしても、お前もよくまあ毎回毎回負けたやつらを治療するな。」

「それが仕事ですから。」

「は？」

【第十一話】合流・そして100%（後書き）

徐々に短くなるorz

まあ、頑張ってできる限り長くします。

それでは

【第十二話】完全で瀟洒なPADtYゲゲンゲンメイド長（前書き）

ちょっと長いです。

んじゅ

【第十二話】完全で瀟洒なPADtyゲフンゲフンメイド長

パチユリーさんに酸素100%の風船をくわえさせて、後は放置して、彼と先を目指します。

「お前って、色々やってるけど、道具とか何処から出してんの？」
私の体の中には時空穴がありまして、そこから色々と取り出しているわけです。

「なるほど。どら モンの四次元ポケットのような感じが。」
「そう言うことです。」

「まあ、雑談はこの辺にしていこうぜ。」
「そうですね。」

荒れた図書館を無視して、館内に改めて入ります。

私の場合は出ると言った方が正しいですがね。

「そう言えばお前何処にいた？」

普通に正門から入って、入ったと勝手に妖精メイドやら小悪魔やらに追いかけてられて、此処で戦闘していると聞いて入ってきたわけですよ。

「そうか。」

「ま、そんなんことよりもさっさと片付けましょーよ。」

「そうだな。」

「そう言うとは彼は、前方にいるまたお前かと言わんばかりの妖精メイドと小悪魔がいた。」

「本当に、ま・た・お・前・か！」

彼も追いかけられたようです。少々いらついているのか、微妙に力が入っています。

「バーサーカーバレッジ！」

バーサーカーバレッジ

長い爪で切り裂きながら突進する技。

「オラオラオラオラ！」

女嫌いのせいで服が切れないようにしているのか、ただ単に相手を気遣っているのか知りませんが、爪というよりも、棒でやっていきます。

「五月蠅え！ 切り裂くよりも鈍器の方がダメージがでかいだろ！」
はいはい、そうしておきましょう。

まあ、妖精メイドと小悪魔を蹴散らし、少々広い廊下に出ました。
「で、此処は何処だ？」

何処でしょうね？ 私が偵察したのは人物だけで、地形は偵察していませんからね。

「こういう時に限って使えないよなお前。」

自身の能力も有効利用できない人に言われたくないです。

「チツ！」

舌打ちしてどうするんですか。

「毎回毎回突っ込むな！」

はいはいっと。それよりも、何で此処には妖精メイドや小悪魔が来ないのでしょう？

「さっきので力尽きたんじゃね？」

其れはないですよ。いくらあなたが人形に魂の入った妖怪とはいえ、まだ妖力がゼロですから。

「俺って妖怪の部類なのか？」
ええ。

「でも、ルーミアの時に妖怪っていたら突っ込んだよな。」
其れは妖力がまだゼロだからです。

「おk理解。って、ズオア！」

！ ナイフ！？

「流石に関節部分のダメージはやばいぜ。」
何とか避けましたか。

「しかも首の関節だぜ？ もし人間のままだったら死んでたぞ。」

其れは良いとして、さつさとナイフを抜いてください。

「ん？ ああ。」

呑気なものです。

つと、早速お出ましですか。

「あら？ 首に刺さったはずなのに死んでない。」

「いきなり投げんなこの野郎！」

五月蠅いですよ！

「あが！」

十六夜咲夜さんですね。

「？ 何故私のことを？」

これでも幻想郷中の有力者のことはある程度知ってますよ。

「情報通ってことね。」

ま、そう言うことです。

「俺のこと忘れてない？」

「あらいたの？」

「いたよ！ いきなり首にナイフ投げられて死ぬかと思ったわド阿呆！」

「言葉に気をつけなさい！」

おや、流石は時を操る程度の能力。何事も0.1秒かからないとは。

「おだてても手加減はしないわよ。」

「だから俺を空気にするな！ マグナティックホイール！」

マグナティックホイール

電気をまといながらの高速ダブルリアットから、相手を地面にたたきつける技。

「！」

「ツチ！ カス当たりか！」

彼女は自分以外の時間を止めます。つまり、先読みも高速移動も無意味です。

「ザ・ワールドか。」

そう言うわけですね。まあ、今回はスペルカードルール。能力はスペルカード内と戦闘に影響の出ない範囲です。

「おk理解。俺の能力も制限あるのか？」

貴方はないでしょう。ものすごいチート能力もなければ、吸収能力も弾幕には対応していませんし。

「それは助かる。」

相手は人間です。貴方も元人間なら弱点くらいわかるはず。

「勿論。とりあえず、そのためには接近しなきゃどうしようもない。」

飛び道具でも使えば良いじゃないですか。

「弱点をピンポイントで突けてさらにすばやく打てる。鈍器の飛び道具があるか！ピストルは、弾が小さいうえに早いから突くと言うよりも貫くだ。」

全く馬鹿ですかあなたは。ピンで当てなくても少々突起物をつけておけばダメージ大きいでしょう。

「あ、そっか。」

はあ。

「だったらこれが一番だ！ハイパーミスティクスマッシュ！」

ハイパーミスティクスマッシュ

目玉の付いた緑色の棘の生えた丸い物を大量に発射する。

放たれた玉は放物線を描き、バウンドする。

「不規則団は避けれまい！」

「馬鹿ね。」

ですよ。

咲夜さんは、ナイフを一本投げました。そのナイフは、全ての弾に刺さり、串刺しです。

「一本で全部止めるだど？」

「だから馬鹿なのよ。」
「そう言うことです。」

「何でお前らは意気投合してるんだよ。」
能力を工夫して下さい。

今の攻撃の止め方は、空気の時間を止めて、その角度でナイフを自由
に反射させているのです。

「工夫たって、俺のは多重にかけられねえぞ。」

できますよ。ただあなたがやらないだけです。

「マジで？」

マジです。

「そうとわかればやることは一つ！」

アイスストーム！ オプティックブラスト！ フォトンショット！」

アイスストーム

大量の雹を降らせる技。

「ザ・ワールド！」

彼は、アイスストームの雹だけ時間を止めて、全く予測のつかない
反射をさせます。

って言うか一部だけって出きるんですね。

「無理やりやってんだ。集中させる。」

了解です。

「たかがコピー本物には勝てないわ！ ザ・ワールド！」

咲夜さんがそう言うと、いきなり、ナイフに囲まれていました。

「あの雹をどうやって抜けたし。まあ、そんなことは関係ない。」

ナイフは、此方に来ると思いきや、不規則に反射していきます。

何をしたのですか？

「細かい雪をバリアのように張ってるんだ。

その上にくれば、おのずと反射する。」

成程。考えましたね。

そんなことをしている内に、フォトンショット一つは咲夜さんのところに向かっています。

「避けれるか!?!」

「クスクス、全く馬鹿ね。」

咲夜さんは微動だにしません。

「何だ?」

頭に疑問符を浮かべた途端、咲夜さんに向かっていているレーザーは反射し、他のレーザーの一部が此方に向かっています。

まあ、雪の壁のおかげで当たりませんが。

それはさておき 閑話休題・まさか、どう反射するのか考えていませんでしたね。

「俺がそんなの考えられるわけないだろ! 電の結晶の形なんてしらねえよ!」

はあ。

「全く、オプシヨンさんも苦勞人ね。」

ええ、全くです。

「だから何故に意気投合している!

つてか、そろそろ時間切・・・」

急に電が動き、さらに不規則に反射します。

運が良かったのか、其れは全て咲夜さんの方に向かっています。

「避けてみやがれ!」

「ちよつと辛いかな?」

笑いながら言う和不気味ですな。

でも、流石に時間を止めたところでこの表はどうにもならないですよな。

「ソウルスカルプチュア!」

「何だと!」

まさか全ての電とレーザーを漸撃で消すとは。

「今度はこちらから行きます!」

咲夜さんは腕を力なくおろし、まるで操り人形のように動き始めます。

「来る！」

身構えるのが遅いですね。あっという間にナイフに囲まれています。
「これは無理だろ！ プラズマフィールド！」

プラズマフィールド

身体の周りに電気のバリアを一瞬張る。

その後は身体に電気を纏う。

「ユニークね。」

「五月蠅い！」

彼は、電気をまとったからだで、急接近を試みます。

「直線的。」

咲夜さんは、其れをナイフで迎撃するために、脚に向かいナイフを
投げますが。

「かかったな！」

彼は前宙しながら脚を外し、其れを咲夜さんに投げつけます。

「この程度で何が出ると言うのかしら？」

其れを難なく避けますが。

「かかったな！ 雷鳴剣！」

雷鳴剣

爪や刀から雷を散らす技。

「えっ？」

よく見ると、咲夜さんの身体が、ほのかにプラズマを帯びています。

「食らえ！」

彼は、爪を大きく掲げます。

「クッ！」

そうすると、彼の足と咲夜さんが引き寄せられています。

「さっきやったプラズマフィールドはマイナスの電気。雷鳴剣はプ

ラスの電気。其れに磁力の力を加えれば引き寄せることなんか簡単なんだよ！」

成程。磁力ですか。

「足が無いのは辛いかな。」

いまさらですが、彼は逆立ちです。

そこに、脚が上手くはまります。

「さてと、引き寄せちまえば俺の勝ちだ。」

引き寄せられる咲夜さんの鳩尾に向かって思いっきりひざ蹴りを要れます。

私たち人形では簡単に壊れるでしょう。

「グウ！」

「手ごたえあり！」

これは流石の彼女でも耐えきれないでしょう。

「まだ・・まだよ！」

「もう立たないでほしいんだがな。」

「お嬢様には指一本触れさせない！」

従者の意地ですかね。

咲夜さんは、がむしゃらにナイフを投げました。

「ものすごくかっこいいが、潰させてもらうぞ。

センチネル！」

センチネル

人間の三倍はあろう巨大なロボット。

金属の体にナイフは無意味ですね。

従者の意地も想像力には勝てませんか。

「ハイパーセンチネルフォー！」

後ろから、頭の部分が丸いロケットが数十機飛んできます。

「ガハッ！」

「すんごい人だな。とても人間には思えない。」

受ける瞬間に時間を止めているのでしょうか。

そうすれば、衝撃のいくつかは吸収されます。

「ずれるとどうなるんだ？」

吸収率が落ちたり、するんじゃないですか？ 失敗しませんでしたし。

「そうなのか。ところで、今まで通り治療するのか？」

勿論です。

「そんじゃあ、待つてるから早くしてくれ。」

分かってますよ。

えっと、打撲に骨折その他凍傷、火傷、電気による麻痺。

此処までやらなくてもいいでしょう。

凍傷と火傷の両方があるのは難しいですね。

とりあえず、折れている部分を固定してっと。

後は打撲と火傷の部分に氷を当てて・・・ッとその前に包帯を巻いておいてと。

・・・・・・これで良しと。

後は放置しておきましょう。妖精メイドが何とかするでしょう。

そう言えば、パチユリーさんと咲夜さんは戦った形跡が無いですね。

もうぬかしちゃっていますか。

「おわったか？」

ええ。後それと関係ないですが、霊夢さんと魔理沙さんをもっ抜いているみたいです。

「マジか。」

ま、少々苦勞はするでしょう。

そのころの靈夢と魔理沙

「やつと妖精たちを巻いたわ。」

「ずいぶん迷つちまつたぜ。」

ついでだからパチュリーに本を借りようと思ったのに。」

「あんた、妙に人脈広いわね。」

「まあな。」

未だ図書館に付かずじまい。

ついでその後の咲夜

「うう。」

「あ、目が覚めました？」

「此処は？」

「咲夜メイド長の部屋です。」

「そう。貴女が治療してくれたの？」

「いえ、治療された状態で廊下で倒れていました。」

「・・・そう。」

「どうかしら具合は。」

「パチュリー様。」

「その様子なら大丈夫そうだけど、今は一大事。回復魔法をかけるわよ。」

「お願いします。」

パチュリーに治療され、すぐさまさっきの場所に戻った。

【第十二話】 完全で瀟洒なPADtYゲフンゲフンメイド長（後書き）

そろそろ紅霧異変も大詰めです。

一話一話で一面ずつ進むと妙に短くなりますね。

レミフラは少々伸ばしましょうか。（多分無理だと思っけど）
それでは

【第十三話】scarlet sisters (前書き)

まずはじめに遅れました。

これを描くのに、二日くらい書きながら構図を練っていました。

結構長いですがよろしく願います。

どうぞ

【第十三話】scarlet sisters

咲夜さんを何とか倒し、ひたすら奥に進みます。

「分かれ道が無いことに助かったな。」

貴方は迷うと壁を壊しかねませんかからね。

「迷ったら強行突破だよ！」

絶対トラップとかにかかる人ですね。

「応！ 鮮明じゃないが、めっちゃ家広い友達の家に行って迷ったから片っ端から調べたら金庫で閉じ込められたことがある。」

自慢げに言うもんじゃないですね。

「いやいや、なかなかできない体験だぜ？」

其れはそうですね。

にしても、何故ここまで何もないのでしょ。

「そっぴやそっぴやだ。此処に来るまでに色々な扉を片っ端から開いて、奇妙だったから入って見たが。」

随分大きい部屋でしたが、さらにこんなに奥があるとは。

「正直ビビるよな。」
ええ。

「ってか、この先からもすごい殺気と狂気が滲み出ているのだが。」

「さあ？ 私が偵察したのは表の部分。こんなに奥深くには来たことがありませんから。」

「まじか、本当に肝心な時に役に立たないな。」

私は人込みでは目立ちませんが、こんな人気のないここでは偵察だつてばればれですから。

「でも、妖精メイドとか小悪魔とかに追いかけていたよな。」

其れは、この館の住人が飛ぶ人と歩く人が分かれていて色々と面倒なんですよ。

実際、此処の偵察には数回失敗しましたし。

「ほう。ところで、何処まで偵察したんだ？」

博麗神社、魔法の森、霧雨亭、アリス亭、香霖堂、白玉楼、マヨヒガ、紅魔館、妖怪の山、彼岸、無縁塚、地霊殿辺りですかね？」

「結構行ってるな。」

とはいっても私が偵察したのは表だけ。此処まで奥に来ると無知も同然です。

「つまり、最初の方は期待できるが、奥の方や裏の方は期待できないと。」

「そうですね。」

「そうやって話しているうちにもう一番奥です。」

「ほいで、そこには質素な扉と。」

「此処まで来て、やっとレミリアさんの気配がしてきましたね。」

「え？ レミリアってこんなな殺気と狂気に満ちたやつなの？」

いえ、彼女はほぼ全ての妖精メイドや小悪魔が信頼を寄せるほどのカリスマをもちながら、そのキャラ作りに疲れるのか、偶に見た目相応の行動を取ります。

「それって裏話だよな？」

一度なら見れなかったことですが、何度も失敗したがゆえに結構情報があります。

まあ、盗聴もこの辺にして。

「してたんだ!？」

「これでも、味覚を除いて五感は優れているんですよ。」

「何も食わないからな。」

「そう言うことです。」

「さて、入るか。」

今回の相手は挑発しない方がいいですよ。壊されかねませんから。」

「はいよ。」

十分な注意を払いながら、扉を開きます。

「結構重いな。」

少々開き、中をのぞくとレミリアさんと、赤い服に不思議な羽をも

った吸血鬼がいます。

「お前、盗聴で何聞いたんだ？」

「言わない方がいいと思います。」

「そうか。」

つと、気付かれましたね。

「あら？ 此処まで来たの。全く咲夜は何をしているのだから。」

「あっちの蝙蝠の方がレミリアか？」

ええ。でも、あっちの縛られている方は私の知らない方です。

「つまり裏の方と。」

そう言うことになります。そんなことよりも、そろそろ気づいたら

どうです？

「何を？」

もう、レミリアさんから殺気が出てますよ。

どうやら、この光景は見られなくなかった御様子。

「らしいね。とにかく死なないようにしよう。吸血鬼は怪力がある

と聞いたことがある。」

外界でもそれは変わらないのですね。

「そうだ。」

さてと、私は今まで通りにサポートに努めさせていただきます。

「了解！」

「さあ、ダンスの始まりよ！」

今まで空気にされたことにも怒っているようです。超高速で近づい

てきます。

彼は其れから逃げることに叶わず。

「捕まえた。」

「クッ！」

「カア！」

「グア！・・・なんてことにはならないのさ。」

吸血されましたが、今の彼は人形。血液があるわけもなく、歯形がついた程度で済みました。

「人間じゃないわね。かといって肉のある妖怪などでもない。」
「今さらかよ。俺の体は、ただの人形だ。血液もないし、体力が減ることもない。」

「それはちよつと不利ね。でも、吸血鬼は怪力をもつのは知ってるでしょう？ その硬く脆い身体で受け切れるかしら？」

「無駄だな。」

レミリアさんは、今までの人とは戦い方が違いますね。最も近いのは、美鈴さんでしょうか。

ですが、美鈴さんよりも弾幕慣れしている。

この組み合わせがどこまで影響するか。

「無駄というからには、それなりの対策があるのよね。」

「まあな、先に行っておくが教えないぜ。」

【吸収する程度の能力】ですね。ですが、吸収するイメージが無ければ、衝撃がそのまま身体に来るはず。さらに、弾幕は吸収付加。織り交ぜられた攻撃に上手く対応できますかね。

「さあ、始めるわよ！」

レミリアさんは、まるでガーネットのようなきれいな色の弾幕を出します。

「弾幕は消す！ スレツジ！ ハンマー！」

スレツジハンマー

腕に磁力をまとい、裏拳とげんこつ落としをする技。

飛び道具をかき消すことができる。

「なかなか重いわね！」

流星は吸血鬼の腕力といったところでしょう。簡単に受け切られています。

「ふん！」

「！」

腕をはじき、肘鉄を胸部に入れましたが、上手く吸収したようです。

「手ごたえが無いわね。・・・成程ね、打撃が吸収されているわ。」

「なかなか鋭いな。」

「だてに五百年生きてないわ。」

「五百才なんだ。」

「見た目相応じゃなくなってますか？」

「いんや。女なんて若くても老けていてもかわんねえよ。女嫌いからしちゃ、どんな奴も同じに見える。」

「でしょうね。彼は今まで、直接相手を触っていません。」

「ルーミアさんの時は、御札越してましたし、チルノさんの時や、今のスレッジハンマーは、超合金のアーム越しですし。」

「とにかく！ さっさとおまえを倒して、異変を止める！」

「目的は其れね。」

「日光があたりたくないのは、俺もありがたい。」

「だったら協力してくれてもいいじゃない。」

「だが、ほかの人様に迷惑はかけれない。」

「人は全体の奉仕者ってことね。」

「知らん！」

会話をしつつも戦いが緩むことはありません。

吸収されないようにレミリさんは弾幕の方に戦術を傾け、彼は其れを消したり弾いたりして、何とか接近を試みます。

「弾幕慣れしてないのね。」

「幻想入りしたばっかだ。」

「外来人？」

「ああ、正確には元か。」

「元？」

「この体は、転生先なんだよ。もともとは普通の人間で。こっちに来た途端に死んだ。」

「災難ね。」

「其れも人生！」

彼の接近のしかたが、徐々に激しくなります。

「なかなか速いじゃない。」

「ただ速いだけじゃない!」

彼の身体が、徐々に透けて言っています。

「何?」

「イコール0!」

イコール0

消える。

「! 消えた!」

正確には、身体の色素を無色にしているようですね。

「さあ! 何処まで来れる!」

さらに、地面の中を出たり入ったりして気配をかく乱させています。

私も正直だるいです。

「無駄よ!」

「ぬわい!」

其れを地面を砕き、気配をかく乱させるのを防ぎます。

「!」

おや?

「・・・どうした?」

「パチエの封印も、この子には効かなかったの!?」

「どういうことだ?」

縛られている方が、枷を外しましたね。

「正確には壊したただがな。」

そんなことよりもまずいです。今のあの方は、少々冷静です。これほどの力を冷静に制御されたらたまったものじゃありませんよ。

「だな。」

しかも、能力は【全てを破壊する程度の能力】です。私たちなんて、簡単にお陀仏ですよ。

「俺の能力の範囲外か。」
「そうですね。」

「じゃあ、一発たりとも食らうことは許されないな。」
ええ、実際能力の使い方によっては、遠距離から相手を爆発させる程度はされると思った方がいいです。

「もしそうだとしたら終わりだな。」

後それと今回は私も参加しますよ。弐対壹は流石に辛いでしようし。
「助かる。とりあえず俺はレミアアの方を先にかたずける。」

その間、あちらの方の注意を私にひいておけばいいでしょう。

「了解。」

この戦いがどうなるかは分かりませんが、この体になって本気を出すのは久しぶりですね。

「お姉さま。」

「！ フランに落ち着きがある。これなら何とか出来るかもしれないわ。」

「あの人たちは誰？」

「侵入者よ。貴女には言っていないけど、私たちは異変を起こしているの。私たち姉妹の弱点である太陽を封じるために。」

「そんなことしてたんだ。」

「それで、其れを止めに侵入してきたの。それで今ちょっと不利だね。協力してくれる？」

「良いよ。今までずっとこの中だったし、たまには思いっきり遊びたいもん。」

壊れちゃったら運が悪かったってことで良いよね？」

「ええ、構わないわ。」

「どうやら、殺されてもおかしくないようですね。」

「えっと、自己紹介しといたほうが良いかな？」

「一応やっておきなさい。これも当主の妹としての務めよ。」

「はい。私はフランドール・スカーレット。皆はフランって呼んでるから。」

「お、応。」

いくら落ち着いているとはいえ、殺気と狂気は消えていない。いつ発狂してもおかしくないですね。

「一人で解析していないで教えてくれ。」

とにかく喰らわないでください。

「それはさつき聞いた。」

では、戦闘開始です。

「ちよっ！　　ったく、とにかくこっちに来ないようにしてくれよ！」

「お姉さま、私はどっちをやればいいの？」

「自由にやりなさい。私はあっちの大きい方をやるわ。」

「はい。」

「食らえ！」

「私もこっちにしよう！」

！　　早速崩れましたか！

「うわっ！　　小さいのにすごい突進だね。　　いいよ、私が遊んであげる。」

死なない程度にお願いしますね。

キトリ slide

「すまないルアート。」

「さてと、周りを気にしている暇わないわよ！」

レミリアは、紅い蝙蝠のような高質量の球を数発放つ。

「ぬわ！　　ったくさつきから飛び道具ばかり！」

「それが弾幕勝負よ！」

「だったら引き寄せろ！」

急に腕を伸ばしたかと思うと、その腕は小さな時空穴を通り、レミリアを捕える。

「ミイラドロップ！」

ミイラドロップ

相手を包帯で巻き、振り回して地面にたたきつける技。

「クッ！」

「引き寄せちまえばこちらのもんよ！」

真下にたたきつけて、足元にいるレミリアに、超合金のアームをつけた腕で殴りかかる。

「近づけば勝てると思わないことね。不夜城レッド！」

其れを、自分を中心に紅い十字架の弾幕を放つ。

「マグナティックホイール！」

スレッジハンマーの要領をマグナティックホイールに組み込み、弾幕を何とかかき消す。

「ふーん。単発だけど、同じ技は出さないのね。」

「しゃべっている暇はねえぞ！」

バックステップで引いたレミリアにショルダータックルをかます。

「フン！」

其れを受け止めるが。

「ぬおら！」

腕をハンマーのようにして、かち上げる。

「飛べる私を浮かせたところで無意味よ！」

そこをすぐさま体勢を立て直し、弾幕を打とうとするが。

「エリアルレイヴ！」

エリアルレイヴ

空中コンボ。

すぐさま追いかけて、弾幕を打つ暇を与えない。

「ベクタードレーン！」

ベクタードレーン
回転しながら空中でバックドロップする技。

「落ちろ！」

「吸血鬼をなめないことね！」

そこを力づくではずし、脱出する。

「脱出したところで無意味！ フォトンショット！」

抜けられても回転を止めずにフォトンショットを乱発する。

「不規則弾幕ね。」

だが、弾幕慣れをしているレミリアは、軽々と避ける。

「つたく、こちらら初心者だぞ！？」

「初心者なのに、異変解決を？」

「能力的に問題ないと思っただけだなあ。」

「甘いわ。」

ルアートside

行きますよ！ アンリミテッド！

「さあ、遊ぼう！」

アンリミテッドとはリミッターを外し、全ての力を出し切ることで
す。

「私久しぶりで制御効かないかもしれないからよろしくね。」

それは此方も同じです。

先ほど戦闘をしたとはいえ、不得意で、さらに本気を出すなんても
のすごく久しぶりです。

「同じだね！」

さてと、無駄話はこの辺にしておきましょう。

「そうだね。一気に行くよ！」

黒い鞭？ それとも、槍？

「いろいろ出来るけどね。」
「そうですか。」

一応スペルを出しておきますか。
悲劇のボードゲームアンリミテッド！

「それね！」

投げますかね普通？ ルーク！ 防御壁展開！
とりあえず、これで様子見です。

「そのくらいじゃ、防ぎきれないよー！」

！ 気をつけて、少し強めに出しましたが、流石は【全てを破壊する程度の能力】、この程度ではできませんか。

「そう言うこと！」

防御壁だけでなく、駒自身も破壊されるとは。

「どんどん行くよー！」

この体は、避けるにはもってこいです。

「なかなか当たらないなー。」

無情のクインテット！

「分裂？」

両腕、弾幕！ 両足、かく乱！ 胴、近接！

「意外と慣れてるね。」

伊達にループを全て見てきたわけではありません！

「ループ？」

御気になさらず。

「六個は厄介だね。 過去を刻む時計！」

全個体！ 戻ってください！

「やっと戻ってくれた。」

攻撃的に行きます！ 悲劇のボードゲーム！

ビショップ！ ナイト！ ポーン！ クイーン！ トリック！

「トリッキーな攻撃は見ていて楽しいよ。」

「そうですか。」

「ま、どれもこれも壊しちゃえばいいけどね。」

そうなりますか。引いてください！

「離れても無駄だよ！ フン！」

！ 握った？

「ハッ！」

！ 駒が爆発した……

「君にはやらないよ。それじゃあつまらないもん。」

其れは助かります。

でも、握れなくなったらどうするんですか？

「できなくなっちゃうかな？」

其れは有利に進みますね。正夢は夢が現実になったわけではない！

「ZZZ……ツハ！ 何これ!？」

今あなたの見た夢に出てきた何かですよ。まあ、本質は兵士ですがね。

「じゃあ、遊んでいいんだ!」
どうぞ。

「ま、すぐ壊れちゃうんだけどね。」

でしょうね……ってもうやられてるし。

「さあ、まだまだやるよ!」

もうそろそろ合流ですかね。

キトリside

「ズエア!」

「クッ！ 間合いが。」

キトリは、爪を伸ばしたり、腕を伸ばしたりして、間合いを切り替えて戦っている。

「波道拳!」

「今度は飛び道具!？」

そろそろ、吸血鬼と言え、多少の疲れは出てくる。

「食らえ！」

波道拳をかわしたところに、正拳突きを思いっきり突いた。

「クウ！」

其れを受け切ったが、空中のため、吹き飛んだ。

side out

そろそろ来ますかね。

「何を気にしているの？ って、うわ！」

レミリアさんが思いっきり吹き飛ばされてきました。

正直、ちらちらと視線を送ってコンタクトを取ってくるのがうざかったです。

「いつまでも調子に乗れると思わないことね！」

「しゃべってる暇わねえぞ！」

フランさんにぶつかった後にたちあがった二人に飛び蹴りをしていきます。

「無駄よ！」

其れを軽く弾かれています。

「決めるぞルアート！」

全く、私をこき使わないでくださいよ。

「知らん！ さっさとつかまれや！」

どうやるんですか？

「お前は、ひたすらしがみついて、弾幕やらなんやら出してくれりやいい！」

はあ。

「何かする気らしいけど、間に合わないわよ！」

「私たちも何かしようよ。」

「そうね。神鎗「スピアザグングニル」！ これに乗りなさい。」

「オツケー！」

さてと、だいたい分かりましたが。

「オメガガデストロイヤー！」

やっぱりこうなるんですね。ですが、鞭で槍で突っ込んでくるフランさんを撃墜し、不規則な鞭の振り方に、不規則な私の弾幕。不規則すぎますよ。

「これは！」

「私はちよつとガス欠かな。」

「これで終わりだ！」

ガハッ！ 何で私がレミアさんとフランさんにぶつけられなきゃならないんですか！

「グッ！」

「ウツ！」

まあ、お二人は、壁にたたきつけられて、さらにそこへ。

「みぞ！」

鳩尾に鞭を突き刺し、気絶。

「ふー、とりあえず勝ちつてことで良いのか？」

「うっしやー！」

「うう。」

起きましたか。

「お姉さま大丈夫？」

「フラン？ えつと確か……はあ。」

貴方の負けです。

「負けちやったら仕方ないよ。」

ま、それはここであきら閑話休題早く、この紅霧を止めてください。まだ広がっていないのだからすぐにはできるはずですよ。

「分かったわ、分かったわよ。せつかく気兼ねなく外出できると思っただのに。」

周りのことも考えてください。

「……そうね。カリスマをもつものとして、周りにも気を配れ

ないと。」

カリスマブレイクしないように気をつけてくださいね。

「！ 何故それを！」

何故でしょうね。

「そんなことよりも早く戻しましょ。」

「そうね。ってフラン、貴女狂気の方は大丈夫なの？」

「んーとね、多分パチュリーの枷にかかっていた封印魔法で一時的に封印されたんだと思う。」

「そう。其れは良かったわね。」

えっと割って入るのはどうかと思いますが、とりあえず異変は解決とみていいのですか？

「ええ。少しすれば紅霧も普通の霧になると思うわ。」
「そうですか。」

「解決か？」

解決です。いやー、初めてなのにベテランよりも早く解決なんてすごいですねえ。

「なんだかんだできるたりするんだよなあ。」

そんなことよりも、後ろのお二方にお気づきですか？

「え？」

「もう終わっちゃったの？」

「いいとこどりされたぜ。」

御二人が、微妙に怒っています。異変解決がきたのでとりあえずいいと言ったところでしょうか？

「手間が省けたわ。」

「さっさと帰るぜ。」

御二人はすぐさま帰って行きました。

紅霧異変解決

【第十三話】scarlet sisters (後書き)

紅魔郷編終了です。

いまさらですが、ところどころ、重要なキーワードが出ています。

其れに気付いた場合は感想などによりしくお願いします。

それでは

【第十四話】身体（前書き）

はいどうも。

今回は前回に比べるとおっそろしいほど短いですが
どうぞ

【第十四話】身体

一応異変を解決しましたが。

「迷ったー！」

と、言うことです。

「無駄に広い！　そして入り組んでる！　こんなところで迷わないやつらの気がしれない！」

壊しちゃだめですよ。

「わあつてらあ。」

そんなこんなで壊せずにいらついている彼が不意にこんなことを聞いてきました。

「ところでさ、この身体つてもともとどんな奴が入ってたん？　色々な人が入ってますよ。」

「いろいろ？　つてことは一人じゃないのか。」

ええ、その身体に入っている魂の妖力が尽きるたびに毎回入れ替わっています。

「それって、俺はいつ死んでもおかしくないんじゃないのか？」

そうですよ。なので、とにかく気をしっかり持ってください。

「寝てた時超危ねえじゃん。」

そうですよ。正直その身体で寝る人は初めて見ました。

「今までの奴ら寝てなかつたんだ。」

寝るなんて、ほぼ禁忌タブイでしたからね。

「うわっwwやっちゃったww」

そんなことよりも、貴方の二つ目の能力。アレは、もともとこの体に入っていた人の能力の一部です。

「マジで！？　・・・でも一部ってどういう事？」

その能力を使っていた方は、弾幕も特殊なやり方で吸収していたんですよ。

「どうやってたんだ？」

聞いても無理でしょう。

「何故？」

その人形は、入るものによって姿かたちを変えるんです。

「あーなるほどね。そいつの姿と俺の姿は微妙に構造が違うと。」
そうなります。其れとついでです、人形を作ったのは私ですよ。

「What？」

このことについては追々話しましょう。そしてさらについで、その人形に入ってきた男性は貴方が初めてですよ。

「何だと！？ この体から出れるか！？」

できますよ。

「頼む！」

その代わり、私が仕えているのはその人形なので、人形から出た貴方とは関係のない人間になります。

「そんなシビアなorz」

私には、作った人間として、最期を見る義務があします。そのためこんな体になったんですから。

「ん？ もともと普通だったわけ？」

そうですよ。そんなことよりも出るんですか？

「いや、でない。」

おや、意外ですね。貴方ならさっさと出ると思ったのに。

「今さら欠点を直す気はない。」

駄目人間ですね。

「五月蠅え！」

まあ、遠回しに信頼していると受け取っておきましょう。

「そうしてくれ。」

つと、少々気になったのだが、この体って今まで何人くらいは言ったんだ？」

そうですねえ、正直いま思い出すのだからいいのですが、ざつと十人くらいかと。

「十人も入ったのか。しかもそろいもそろって女。」

後それと、その【吸収する程度の能力】の持ち主の名前は、キュー・ドレインと言います。

「名前の由来とかあるの？」

えっとですね、確か、吸収するってところからですね。今まで出会った人たちが勝手に考えていました。

「で、俺の場合作者と読者が其れをやってくれたと。」

んー、番外編以外で言うのもどうかと思いますが、そうですね。

因みに、私が名をもらうのは初めてです。

「名づけられなかったか？」

無いんですよ。

「え？」

今はこんな体ですが、私ももともと名の知れた人形師でした。ですが、人間の寿命は短い。それでは絶対最期を見れないと思った私は、不死の手段として、このオプションとして作った人形からだに入る道を選んだのです。

「お前、過去が暗すぎる。」

と、言ってみるテスト。

「ちよっ？」

こうでもしないと空気が乱れますからね。

「ん？ どうした？」

いえ、何も。

「っーか、お前各仕事多すぎ。言いたくなけりゃいいけど、いくつか質問させてもらっわ。」

えっ？

「お前に拒否権はない！」

其れはないですよ。

「まず最初に、前回この体に入っていた人の名前と能力、その他いろいろ。」

はあ。

えっとですね、前回その身体に入っていた人はキャスパー・メール

と言います。能力は【甲冑を操る程度の能力で】ほぼ常に妖力で生成した甲冑を携帯していきまして、妖力が無くなり始めると、其れを予備電池の様に使っていました。その人形からたで最も長生きした人でしょう。

「よし、じゃあ次。俺の能力ってどのくらいあるんだ？」

そんなの知りませんよ。貴方のオリジナルの能力＋十個前後じゃないですか？

「なるほど。そんじゃあ、今のおれはどう見える？」

は？ 貴方鏡見てないんですか？

「見てない。」

はあ、私はその人形からたの五分の一程度のほぼ同じ格好になります。

「えっと、つまりお前と俺は同じ見た目と。」

そうなります。

「マジかorz」

ピンクに近い紫の髪に黒い帽子、白衣ならぬ黒衣、で、さらにその下はハザマと。」

ものすごくアンバランスですよ。普通ならハットのところが、普通の帽子ですし。

何より、能力を使うと帽子の柄が一変するという。

「そうなのか？」

ええ、普通なら髪色と同じようなラインが入るんですがね。

「今度ビデオ撮るかメモってくれ。」

嫌です。

「何故？」

書いている間に私がやられたら目的もくそもありません。

「おk理解。」

他に質問は？

「キユーってどんな人？」

撮っても穏やかな人でした。何かが抜けているようなほんわかした人で、専ら魔法の森の巡回や、傷ついた動物や妖怪を保護していま

したね。

他には？

「お前は、どんな見た目でも男なのか？」

男も女も、私は入った人と子の人格以外全く同じです。

「つまり、今は男だけど、もともと女だったと。」

そう言うことになります。

「……カマ。」

……悲劇のボードゲーム。ナイト、ビショップ、総攻撃。

「ぬわー！ 冗談！ 冗談だからやめてくれ。」

……少々お黙りなさい。

「お、応。」

さてと、そろそろどうでもよくなってきましたね。無駄話をしたせいで先ほどから一歩も進んでいませんし。

「そうだったorz とりあえずぶっ壊す！」

壊しちゃだめです！

【第十四話】身体（後書き）

キトリの質問攻めww

色々と出ましたが、重要キーワードは出ませんでした。

キーワードは今のところ二つほどしか出てません。

それでは

【第十五話】地獄に住みし人形（前書き）

はいどうも。

またまたあとがきに書き忘れたこと。

キトリとルアートの見た目は、ハザマとメリー・ナイトメアを三で割ってたしたやつです。

書き忘れを編集で元に戻さない理由は、そうすると読んでもらえないことがあるかもだからです。

さてと、長くなりましたが、本編へ。

どうぞ

【第十五話】地獄に住みし人形

はいどうも、ルアートです。

今も私たちは紅魔館をさ迷っています。すれ違う方全てが女性です。と、言うことはお気づきですね。

「はあ。」

彼がものすごくやつれてきています。人形がやつれると言うのもどうかと思いますが、目に見えて分かるほどやつれています。

「ああ、ストレスたまるわ。もうぶっ壊していいか？」

駄目です。全く、人に聞けばいいものを貴方の女嫌いのせいで大変なことになっています。

「正直、この体に女しか入ったことが無いというのは驚きだ。」「其れさつきも言いましたよね。」

それにしても、かれこれ一時間強迷っているわけですが。

「まじで出口どこだ！」

そこまで叫ばなくても。

でも、流石は紅魔館ほとんどの方が目的を知らされておらず、半分以上の方がこの騒ぎにすら気付かない。

「どれだけ防音効果があるのか。」

ただ単に大きくて、届かないと言った方がいいのかと。

「そうなのか？ 俺はすぐに外に出れたけど。」

其れはただ単に外側だっただけです。

それにしても、さつきから壁にめり込みながら動くのやめてくれま
すか？

「だって。女だらけだし。」

かといって、飛んでいる方と歩いている方のちょうど中間を動かさないでくださいよ。私もそこに沿って飛ぶことになりましたし、目立つのは嫌なんです。

「知らぬ！ 分からぬ！ 解せぬ！」

はあ、流石というかなんというか、本当に曲がりませんね。

「決して曲がらぬ！」

一体何があつたんですか。

「知らない。ある程度の記憶はぼんやりとしか覚えていない。

ただ言えることは、他人、特に女に何かをされた。」

あえて聞かないでおきましょう。

「つてか、お前が壁には入れないせいで、俺はこのまま外に出れないんだよ。」

知りませんよそんなこと。

「お前はよく大丈夫だな。」

其れは当たり前ですよ。今まで入っていた人が女でしたし、そのせいで私も女の姿でしたし。

「そう見ると、お前も避けるべきか。」

良いですけど、貴方は無知ですよ。

「そうなんだよなあ。」

それにしても、いまさらですが、視線が痛いです。

「何で？」

壁に向かって話してるんですよ。しかも人形がひとりで。

絶対痛い目で見られますよ。

「ああ、確かにそうだな。」

もし出れないのであれば、泊めていただくのが妥当かと。

「絶対無理！」

何ですか？ アリスさんの時は泊めていただいたのに。

「あの超でかい家にたった一人しかいないなら遠い部屋にすればいい。」

だが、この家はアリス亭よりもでかいとはいえ、常に女が半径十メートル以内にいる。だから無理。」

つまり地獄ですか。

「そう言うこと。」

はあ。

「ねえねえ、貴方って普通にしゃべれるの？」
え、ええ。

「すごいすごい！ アリスさんでも出来なかったのに！ 誰が作ったの？」

私ですよ。

「そんな冗談はやめてよ。」

いえ、作ったのはこの人形からだじゃなくて、普通の体ですよ。

「なるほど。」

「……おい。」

あつと。

「俺のことはわかってんだろ！」

ぬわい！

「ちよつ！ 壁から触手！？」

「いい加減、理解しろ。」

分かりましたよ。それではメイドさん、この辺で失礼します。

「またね。」

「ったく、お前は良いけど、俺はだめなんだつての。」

そうでしたね。ですが、私は人脈を大切にする方なので多分無理かと。

「何でだ？」

この幻想郷は、大半が女性ですから。

「……マジで？」

マジです。

「めっっちゃ笑顔で言うなよ。」

正直、男が異変に手を出すなんて異例ですよ。

「それってすごくない？」

そーですねー。

「ちよつ、棒読みww」

とにかく、嫌ならば外に出なくてはならないかと。

「話している間に見つけてきた。」

「気が利きますね。」

「さっさとこの地獄の館から出たい。」

「でしようね。」

「何処が地獄の館ですって?」

「おや、咲夜さんじゃないですか。」

「貴方今、此処が地獄の館と言いました?」

「私じゃないですよ。」

「そうですか。」

咲夜さんは笑顔で、私を捕まえようとしていた彼の触手を引っ張り
ました。

「馬鹿な!」

「貴方ですね。確かに此処は悪魔の住む館と呼ばれていますが、地
獄の館と呼ばれる筋合いはありませんよ。」

咲夜さん、笑顔でナイフを構えるのは怖いかと。

「そう?」

「ってか、寄るなー!」

戦闘開始しないでください。

「どわ!」

「あら、一発で気絶なんて。」

壁に入って触手を使うからといって流動体や、不定形とは限りませ
んからね。

「それにしても、一部だけ触手つてもどうかと思うわ。」
「ですよね。」

「　　」

「で、何故ここまで?」

「ああ、お嬢様が、貴方方に興味をもってね。探して、つれて来い
つて。」

成程。

ですが、彼はものすごい女嫌いなので、多分行かないかと。

「無理ですね。お嬢様は、結構曲げませんから。」

「そうですか……今は気絶していますし、良いでしょう。」

「彼のことは無視で良いのですね。」

私が連れて行きます。

「お願いしますね。」

意外と軽いんですよ。

「でしようね。」

結構大きい扉の前に来ました。

「お嬢様、侵入者二人を連れてきました。」

咲夜さんは、扉をノックして私たちを連れてきたと言いました。

「入っていいわよ。」

「失礼します。」

そこは、フランさんの部屋に続く扉のあった部屋とは違う部屋でした。

正直、あそこがレミリアさんの部屋だと思ったのですが。

「あそこは、妹様が部屋を飛び出てきたときに、被害を抑えるための戦闘室です。」

そんなものがあるのですか。

「意外と複雑なのです。」

そんなこんなで、部屋に入ります。

「いらつしやい。迷っていたみたいね。」

ええ、興味をもったと聞いたので、暫く此処にいらつたことだと思いますが、この人は、大の女嫌い。恐らく、拒否するでしょう。

「大丈夫よ。私の能力は【運命を操る程度の能力】。簡単に変えられるわ。」

そうですか。

其れが、彼に通用することを祈ります。

通用しないと、私は彼の我儘で野宿をしなくてはなりませんから。

「そうね。」

彼が起きるのを待ちましょう。

「それまで、ちよつと話を聞かせていただけない？」

良いですよ、何処から話します？」

「貴方達が、今までどんなことをしていたか。」

そうですねえ、まずはじめに、魔法の森のアリアス亭で、彼が目覚めたんですよ。

「確か、その人形は転生先よね？」

そうです。

私はもともとその人形のサポートなので、特に気にしていないのですがね。

「そうなの。」

えつと、その後はアリスさんと戦闘をして、能力を知らない状況ですぐに負けて、暫くアリスさんの家にてお世話になっていました。

「よかったの？」

ものすごく大きい家に、たった一人しか住んでいなかったのので、我慢のできでしょう。

「成程ね。」

そして、流石に我慢も限界なのか、三日で出てしましまして、その後、人に里に行つて、そこで異変のことを聞いて、博麗神社へ行き、今ここに、紅魔館にいます。

「ずいぶん短いわね。」

まだ三週間もたつていませんからね。

「これからってことね。」

そう言うことです。

「楽しみなさいよ。」

有難うございます。

つと、起きましたね。

「えつと、此処は何処だ？ 確か、ルアートに背中を突かれて。」

「つて、下手したら俺死んでんじゃねえか！」

「大丈夫ですよ。」

「さっき推したのは、一種のスリープです。そこを押した場合は、普通に寝たり気絶するよりかは、はるかに安全です。」

「あつそ。」

「ところで、暫く住まわせていただけることになったのですが、どうですか？」

「・・・そうだな。」

「最も外側で、完全に隔離された場所なら構わん。」

「そう、そうするといいわ。」

「通用しましたね。」

「ええ。」

「？」

「この後、案内を断り、またさ迷ったのは言つまでもないでしょう。」

【第十五話】地獄に住みし人形（後書き）

紅魔館に住むことになりましたが、絡まないようになるかもです。
それでは

【第十六話】住人の疑問や質問（前書き）

遅れました。

内容が思いつかず、暫く考えていました。

グダグダです。

どうぞ

【第十六話】住人の疑問や質問

紅魔館内 キトリの部屋

この部屋は、レミリアさんに貸してもらっている部屋です。

「……………」
もともとは、誰も使っておらず、埃をかぶっていて足の踏み場もないような部屋でした。

まあ、正門からみて、左下奥の角部屋ですからね。

「……………」
その部屋を妖精メイドさんが片づけに来ましたが、彼がかたくなに断り、私と彼で片付けました。

断られた妖精メイドさんは、少々不機嫌な顔をしていましたが、仕事が減ると言うことで喜んでいました。

「……………」
つてか、しゃべりませんか？

「無理……………」

毎度のことですが、彼は女嫌いです。

私は特に何もないので、偶に館内を徘徊しますが、彼はさらに外側の角で膝を抱えています。

「……………」
ものすごいやつれようです。

気分転換をさせるにも、私では力不足ですし、紅魔館の方に頼んでも、紅魔館には、女性しかおらず、余計にやつれるでしょう。

「……………」
正直、すぐそばでこんなに暗いと私も少しストレスがたまるんですよ。

「……………」
寝ませんよ。

貴方と違って、もうこの体には慣れていきますから。

「そう・・・」

「・・・もう無理です。」

読者の皆さん助けてください。

と言ったところで無意味なんですけどね。

「・・・」

さてと、この頃私もストレスがたまっていますので、徘徊しますか。

さてと、この部屋は、ほとんどの人が通らず、来ると言えば、妙に私たちに興味をもつ妖精メイドさんと小悪魔さん達ですかね。

「あ！ ルアートさん！」

えつと貴女は・・・

「名前ないんでないですよ。そんなことよりも、パチュリー様が貴方達を呼ぶようにと。」

私がかまいませんが、彼は角で膝を抱えています。

「無理にとは言っていないので、ルアートさんだけでもどうです？」

私はいかせていただきますよ。

「それじゃあ、付いて来ててください。」

分かりました。

彼女は、浮いていた方が楽なのか、天井付近をいきます。

私は、其れに合わせて飛行します。

「どうですか？」

はい？

「キトリさんですよ。彼が膝を抱えて座っているって。」

ただのストレスでしょう。女嫌いの方が、この幻想郷で過ごすのは少々辛いかと。

「そうですね。」

まあ、恐らく、我慢できずに此処を出るとか言いはじめるので、その時は止めないでくださいね。

「分かりました。」

そんなこんなで図書館です。

おや？ ノックはしないんですか？

「この図書館はとも広いです。ノックしたところでパチュリー様には聞こえませんか。」

そうですか。

「パチュリー様、ルアートさんを連れてきました。」

そう言うと、パチュリーさんは、重そうな腰をもち上げて、此方に来ます。

「えっと、貴方は、キトリのオプシヨンね？」

いきなり呼び捨てもどうかと思いますが、そうですよ。

「レミイから聞いたんだけど、貴方達って、人形の中に、普通の人格が入っているのでしょ？」

ええ、そうですよ。

「ふーん。」

あのアリスでも出来ないのに、どうして人工以外の人格が入って、しかもしゃべっているのかしら？ それよりも、製作者は誰？ そして何故、大きい個体と小さい個体をワンセットにしたのかしら？ 何やらぶつぶつしゃべっています。

パチュリーさんは頭が良いゆえに、考え込むと、無限ループで出てこないような気がしますね。

こういうときは・・・ミニナイト、軽く刺激を。

「いった！ ちょっと、何するの!？」

貴方の様な方は、考え込み始めると、暫く抜け出しませんからね。私も、無駄に時間を浪費したくないですから。

「そうね、ごめんなさい。」

さっきの話を聞くと、私たちにいくつか疑問があるのかと。

「ええ、まず、貴方達を作ったのは誰？」

私ですよ。

「え？ でも、人形が勝手に意思をもつなんて聞いたことないし、ましてや、その身体であの大きな人形を作るなんて。」

正確には、この人形に入る前の私ですがね。

「？」

簡単に説明すると、私も普通の人間で、色々と探求し、この人形からだに入っただけです。

「えっとつまり、貴方はもともと普通の人間か妖怪で、あの大きな人形と、その小さな人形を作り、貴方はその小さい方に魂を入れたと。」

そう言うことになります。

因みに、私が覚えているのはこのくらいで、私がもともとどういう人だったとか、そこら辺は覚えていません。

「入った時に記憶が飛んだのかしら？」

そうですね。自分で作っただけのことを覚えている理由は、思い入れかなんかが強かったのかと。

「そう考えるのが妥当ね。」

はい。それでは、話を戻します。

彼の場合、あの人形には、今まで約十人くらいの人が入れ替わっています。

「入れ替わり？」

ええ、主に妖力をもった何かが入ってくるのですが、彼だけは、妖力がほぼ皆無で寝たりするのは危険なんですよ。

「見張りも大変ね。」

ま、彼はもともと人間。人間の習慣が魂にまで刻まれているのでしよう。

「そう。それにしても、貴方達は、というよりも、貴方は、妙に戦闘慣れしているようだけど？」

正直言うと、戦闘は専門外です。正直今までいろんな人に付いてきましたが、そのおかげで、偵察、戦闘、情報収集、その他いろいろと並みの人よりは出来るようになってしまったということです。

「ずいぶん長い間従者としてやってきたようね。」

そこまではないです。普通に美鈴さんや咲夜さんの方が長いかと。その前に私は従者じゃありませんしね。

「そうなの？ ま、そんなことは良いわ。その中でも一番得意なことは？」

情報収集と、色んな物の製作と改造ですかね？

「ずいぶん器用ね。」

今までで一番の傑作は、子手と具足に鎖分銅を取りつけたものですね。

「名前はないの？」

ええ、形としては、指の第二関節の手前側に分銅が付いていて、アリスさんの人形を操るときのように指を振って、分銅を飛ばしたりします。

回収は、動脈のあたりにあるワイヤーを引くと、回収されます。

脚の場合は、踝のあたりに分銅があり、蹴りの動作とともに分銅が飛ぶようになっていて、回収は脛のあたりにあるワイヤーを引きます。

「こ、細かい説明ありがとう・・・」

おっと失礼。私説明し始めると、無駄な部分まで説明してしまう癖があります。

「そ、そう。」

他にはありますか？

「いえ、このくらいで良いわ。有難う。」

いえ、この程度で良ければ。

ちょっと話しすぎましたかね？ あの後には、レミリアさんや美鈴さんにも同じような質問をされて、同じような答え方をして。

「・・・」

ところで、いつまで膝を抱えているのですか？

「・・・メイドと小悪魔が来た・・・」

私がいなくてもなんとかなるでしょう？

「・・・優しく追い出すのって難しい・・・」

貴方には難しくくて当然でしょう。

【第十六話】住人の疑問や質問（後書き）

この先の展開にまた困っています。

どうしようかな？

それでは

【第十七話】脱出を企む（前書き）

ものすごく遅くなりました。

最近ネタが無いです（泣）

どうぞ

【第十七話】脱出を企む

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ！」
はいどうも。

とりあえず、最初に状況を説明します。

彼が、壁を破壊しようとしています。

私の予想としては、限界が来たので、脱出しようという魂胆だと思
います。

でも、ものすごい音です。

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ！」

絶対やりかねないと思いましたが、これだけ五月蠅いと。

「何をしているんですか！」

咲夜さんと数人の妖精メイドの方。

開口一番に、どうにかして下さい。

「もとよりそのつもりです。五月蠅いですして、壊されたくないで
すからね。」

咲夜さんは、一瞬で彼をナイフで囲み。

「なっ！」

全てのナイフを関節に刺して、動けなくしました。

「畜生！」

「観念しなさい。」

「よ、寄るなあ！」

「何で、そこまで拒むのかしら？」

「そ、それは。」

其れはですね、彼が転生前に女性に何かをされたみたいなんですよ。

「何されたの？」

「うすぼんやりとしか覚えていない。」

其れでもいいですよ。

とりあえず話してもらえないと、此方も治しようがありませんし。

「肝心な部分が抜けているが、其れでもいいなら教えてみるか。その代わり、ルアート以外は出て行ってもらおう。」

「そのくらいなら良いでしょう。恐らく、この先ずっと、最も長く一緒にいるのは、ルアートさんだと思いますし。」

それで良いわね、貴女達。」

「はい！」

「分かりました！」

とりあえず、彼の我儘(?)で、咲夜さん達はこの部屋から出て行きました。

「さーてと、始めっか！」

オラオラオラオラオラ！」

何やってんですか！」

「あべし！」

さっさと話して下さい。そのために咲夜さん達を部屋から出したのでしょう！」

「お、応・・・」

で、何をされたんですか？」

「傍から見りや大したことないさ。ただ単に内の母が女系家族で、男というものを知らない。」

そのせいで、色々されたんだろう。」

多分主にR 18 的な意味だと思われる。」

成程、確かにそれでは女嫌いになるのも無理はないでしょう。」

「分かってくれるか。」

その身体にも、そんな人が入ったところがありますからね。」

「うっ、マジか。」

正直その時は、私もその身体の最期を見るのを諦めかけましたよ。」

「意外と似た者同士だな。」

一緒にしないでください。」

閑話休題それはさておきもう良いですね。」

「何が？」

咲夜さん！ お話終わりましたー！

「馬鹿っ！ やめっ！」

「何をやめてほしいんです？」

「ったく！ 蛇翼崩天刃！」

蛇翼崩天刃

ものすごい後ろ蹴り。上に飛ぶ。

「うわ！」

あーらら、妖精メイドさんが空高く飛んで言っちゃいました。

「何をしてくれるんですか……」

其れにより、咲夜さんが怒っちゃいましたね。

これは彼の自業自得です。私は手を出しませんよ。

にしても、一々時間を止めて、全員で囲むこともないでしょう。

「マグナティックホイール！」

囲まれたら毎回これですね。

「はあはあ、だから、寄るなって。」

これは重症ですね。早く何とかしないと、春雪異変まで持つかどうか。

つと、其れは放っておいていいでしょう。

今のところ、次の異変までは少々時間がある。其れまでに幾つの能力を覚醒させて、使いものにするかですね。

でも、覚醒云々の前にまず妖力を付けさせなくては元も子もないですね。

他にも、魔力、霊力、その他いろいろと。

「何一人でぶつぶつ言ってるんだ？」

おっと失礼、少々考え事を。

「お前が考え事ねえ。」

ところで、咲夜さん達は？

「ぶっ飛ばしといたぜ！（＾＾）b」

住まわせていただいているのに、何をしているんですか！

「あだ！ こうなるのは分かってんだろ。文句言つな！」
文句しかありませんよ！

「だったら、もう出るか？」

今出たら、何のためにレミリアさんに能力使ってもらったんですか。

「レミリアに能力を使ってもらった？ つまり・・・図つたな！」
私も野宿は嫌ですからね。

「知るか！ オプティックブラスト！」

たかが一閃！ 普通の弾幕で十分です！

「だったらこれだ！ フォトンショット！」

私の当たり判定をなめないでください！

「チツ！ ちょこまかと！」

そい！

「グフオア！」

貴方のことは知りつくしてますよ。

「ま、閑話休題それはおきあいつらは、何で俺らを泊めてくれるんだ？」

さあ？ 興味があるのでは？

「興味ねえ。ちょっとレミリアに聞いて来てくんない？」

その間に、壊したりしないでくださいよ。

「分かってるって。」

それでは、行ってきます。

「応。」

えっと、レミリアさんの部屋は・・・

「お嬢様の部屋なら、三つ目の角を左に曲がって、左手にあります

よ。」

有難うございます。

「いえ、何かあったら、私どもに言ってください。」

迷ったらそうします。

此処ですね。レミリアさん！ いますかー！

「お嬢様は、吸血鬼ですので、まだ起きないと思いますよ？」

吸血鬼は、夜型の妖怪ですもんね。

「起きてるわよ。」

「お、お嬢様！」

今日は、早起きな方ですか？

「さつきから、騒がしくて、寝ていられないわよ。」

え？

「そう言えば・・・」

少し地響きがしますね。しかも壁をたたく音がします。

「まあいいわ。紅魔館は丈夫ですもの。」

そうですか。

「それでは、私は仕事に戻ります。」

頑張ってくださいね。

「さつきから、私のことを忘れていないかしら？」

失礼しました。

「ところで、何か用があつてきたんじゃないか？」

ええ、彼が、何で私たちを此処、紅魔館に泊めていただけなのか聞

いてこいとのことです。

「ああ、それ？ ただ単に貴方達を見ていると楽しいからよ。」

そ、そうですか。

「他には？」

いえ、それだけです。

それでは、私は部屋に戻りますね。

「ええ、私ももう少し寝るわ。」

おやすみなさい。

さてと、部屋の前に付きましたが。

「オラオラオラオラオラオラ！」

また壊してますね。

壊れないとは思いますが、一応止めますか。

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ！」

何やってんですか！

「お！ お帰り！」

何で、壊してるんですか？

「脱出するためだ。」

真顔で言わないでください。

「絶対に出てやる！」

其れも此処までです。

「！」

腕が無ければ、殴れないでしょう。

「チツクシヨーーーーー！」

【第十七話】脱出を企む（後書き）

妖々夢編まで少々時間がかかります。

何かしらの希望がありましたら、感想欄にお願いします。
それでは

【第十八話】治してみよう（前書き）

最近では早めの更新だと思えます。

今回は、多分ギャグです。

どうぞ

「とにかく、スペースを確保しておいてくれ。せめて、半径十メートルだ。」

できればしておきましょう。

「できればじゃなくて、絶対だ！」

其れは無理ですね。

「チツ！」

中庭に引つ張り出しました。

「何故縛つたし。」

縛りでもしなければ来なかったでしょう？

「いやいや、どんだけ信用ないんだよ。」

こういうときは、貴方を信用する人はいませんよ。

「マジでか。」

ま、とりあえず、今回のもようしとは、貴方の女嫌いを少しでも治すためです。

「無_く理！」

いやいや、生身の人間や妖怪ならともかく、人形は、簡単にはいきませんから協力してもらったんですよ。

「何で人形だといけないんだ？」

其れはですね、生身なら、薬を使えるのですが、人形ではね。

「なるほどねえ。」

それでは、とりあえず適当に妖精メイドさんや小悪魔さん達と一緒に過ごしてみてください。

一応ルールがあります。

其の一、頼まれたことは拒まない。

其の二、妖精メイドさんや小悪魔さん達を困らせない。

とりあえず、これくらいは守ってください。

「あいよ。」

大丈夫ですかねえ。手は出しませんが、一応見張りはしますから。

「そりゃ辛い。」

クスクスww

とまあ、始めたのは良いですが。

「よっと！」

ものすごくこなしています。

今は、妖精メイドさん達の食事の用意なのですが。

「濃口？ 薄口？」

「薄口でお願いします。」

「はいよ！」

どうやら、普通にしゃべる程度は出来るようですね。其れでも、距離は10mと結構遠いです。

「大丈夫なんじゃないですか？」

彼は、そんなに簡単に曲がるとは思えません。

「どうですか？」

「！・・・失礼。」

やっぱり駄目そうですね。

料理が気になって顔を出したら思いっきりサイドステップですか。

「今度は絶対来ないください。」

「・・・はい。」

駄目ですね。ですが、一応話せるだけましでしょう。しかも敬語ですし。

「それはどうかしらね？」

レミリアさん。

「敬語は、慣れていないから硬くなっているだけ。もっと重症なら、主語が無くなるわよ。」

「・・・そうすると。」

「今ので、籠っちゃったわね。」

そうですね。

「・・・」

あ、本当だ。

「どうですか？」

「もちよい。」

彼はただでさえ一言ですからね。

「重症ね。せめて基準を高くすることができればいいのだけれど。」

多少乱暴ですが、やりようはあります。

「本当に？」

でも、其れをやると、其れに参加した方の彼からのイメージがものすごく下がりますよ。

「其れはまずいわね。それじゃあ、其れは最終手段として少し様子を見ましよう。」
ええ。

「できた。」

「・・・上手いわね。」

上手いですね。正直、料理ができるイメージなのですが。

「そうよね。」

とまあ、その後に掃除などを行ったんですが、問題発生です。

「無理。」

洗濯はまずいと思いますよ。この紅魔館には、女性しかあないわけですし。

「いきなりこれは上がっちゃわよ。」

メイド服にスカートetc.

これは彼には無理ですね。

「あ、私のソックス。あんなにしわくちゃに。」

これは無理ですね。

ですが、私は手を出さないと言いましたので。

「かといって、妖精メイドが近付くと、全部落としてしまいそうね。」

諦めてください。

「仕方が無いわね。」

この後には、フランさんと遊び、基戦闘をやって、一応手伝いの類は終了しました。

次は確か……

「食事会ね。」

そうでした。

ですが、人形は食事を必要としないので、彼は絶対行かないでしょう。

「いえ、今回はウェイターとして動いてもらうわ。」

無理ですね。

彼は、半径十m以内は戦闘中でしか無理ですから。

「それは残念ね。」

流石に無理を言うのは良くないですが、このままでは直りそうになりですね。

「最終手段かしら?」

そうですね。それでは、三十分後にやりましょう。

「面白いことになりそうね。」

「それじゃあ皆、用意は良いかしら?」

「大丈夫です。」

「これはこれで楽しいと思います。」

「それでは、スタート!」

「やー!」

「はぁ、疲れた。」

お疲れ様です。どうですか?

「無理・・・」

会話がなっていないませんよ。

「俺はもう寝る。」

「いやいや、ねちやまずいですよ。」

「じゃあ、スリープ頼むわ。」

「いえ、まだ早いかと。」

「は？」

「やー！」

やっと来ましたか。

「なっ、何だ？」

少々強引ですが、これで何とかなると思いますよ。

「わー！ 止める！ 寄るな！ ぎゃああああああああああ

ああああー！」

「そこそこー！」

「やっぱりこの体面白い！」

ww

「ああああああー！」

おや？

これは！

「「キヤーーーーーー！」」

爆発ってことは、三つ目の能力ですか。

これは、レイ・バーンさんの爆発を操る程度の能力ですね。

まさか、こんな状態で覚醒するとは。ちよつと色々とやってみますか。

【第十八話】治してみよう（後書き）

能力解説

空間や、物を爆発させる。

自分が爆発することもできるが、強制スリープになる。

この衝撃は吸収可能。

こんなところです。

そろそろ紅魔館から出ようと思いますが、まだ紅魔館でよろしくつて方もいると思います。

どうするかは、私次第です。

それでは

【第十九話】 逆効果でしたw w そんなことよりも (前書き)

とりあえず新しい能力を使います。

【第十九話】逆効果でしたwwそんなことよりも

え はい、この間、彼の女嫌いを治そうと色々やってみたのですが・・

「5、4、3、2、1・・・爆破!」

逆効果だったようで、新しい能力で壁を爆破しました。

「やっと此処から出れるぜ。」

工夫はしていますね。ところどころ、小さく爆破することで、崩れやすくしています。

「ずおい!」

あーあ、壊しちゃいましたか。

「脱出!」

ま、彼のいやがることをやってしまったので仕方が無いでしょう。

「さーてと、幸いうえはガラ空きだ。さっさと飛んで逃げるぜ。」

あ、ちよつと待「アバババ!」遅かったですね。

「な、なんなん・・・だ?」

紅魔館には、結界が張っており、美鈴さんのいる門からしか出れないんですよ。

つまり、入るにも出るにも、美鈴さんの許可を得るか、結界を無理やり壊すしかないのです。

「俺の能力で壊せそうか?」

無理ですね。

「マジか。レミリアが興味をもって俺を泊めているってことは、美鈴は絶対俺を出してくれないしなあ。」

珍しく頭が回りますね。

「お前なしで何もできない俺のような人間じゃないぞ。」

今は人間じゃないですけどね。

「それを言ったら終わりだろ。」

んなことよりも、まず美鈴をどうやって説得するかだ。」

確かにそれが最も難所ですね。

「ってか、お前は壊せないのか？」

壊せることは確かですが、まだ力が足りません。

「力が足りない？」

本当は、貴方の力が足りないですけどね。

「俺のか？」

正直、私の力量は、貴方の力量でもあるのです。

私は、これでも今までのループを全て生き残ってきたわけですから、工夫次第でいくらでも強くなれるのですが、貴方の場合じゃ。

「工夫が足りない？」

率直に言うとその言うことです。

「ダルシダルし。」

だったら、さっさと妖力を覚醒させてください。

「お、応。だが、妖力覚醒と言っても何をすればいい？」

精神と肉体を極限状態にして、そこから、さらに危機的状況に陥るのが一般的でしょう。

「なるほど。・・・待てよ？ 今のおれは疲れを知らない。そんな中、どうやって肉体的に極限状態になる？」

大丈夫です。

他には、覚醒とはちょっと違いますが、妖力を吸い取るのも一応ありです。

「混ざるよな？」

ええ。でも、其れを使いこなせれば、相当な力になるはずですよ。

「おk。そんじゃあ、手始めに美鈴の妖力でも吸収・・・って、生で触んなきゃだめ？」

勿論。

「じゃあ、これも無理だな。」

正直、あの時に妖精メイド達にべたべた触られて、湿疹が出るかと思っただぜ。」

大丈夫です。

「分かってらあ。人形だからそういった類は無意味だと言いたいだろ？」

「そう言うことです。」

「ま、工夫して下さい。」

つと、話している間に門の前です。

「おや？ キトリ君とルアートさんじゃないですか。」

「何で、俺が君付けでお前がさん付けなんだ？」

「空気・・・ですかね？」

「空気ねえ。」

「そんなことよりも、何でこんなところに？」

「えつとですね。彼が限界だとのこと、そろそろ紅魔館から御暇したいとのこと。」

「客人自ら出るとは、面白い人ですね。でもすいません。其れもお嬢様には予想できたのでしよう。貴方達が門に来たら絶対に通さないようにと言われております。」

「とのことです。じゃねえよ！ せっかく妖精メイドやら小悪魔やらに会わないように壁ぶっ壊してきたつてのによ！ これじゃあ、骨折り損じゃねえか！」

「壁を・・・壊して？」

「あ、やっべ。」

「つくづく馬鹿ですね。」

「そうですね。そこまでして、紅魔館ニから出たいですか。」

「おや？ すんなり通れますか？」

「そうはいかないだろう。」

「ならば、この娘たちを倒してからにしてください！」

門番隊ですか。

「能力を試すにはちょうどいい。相手になってやる！」
「ハア、毎回毎回良く飽きませんね。」

「この紅魔館せかいは地獄だからな。」
成程。

「早速行くぜ！」

「頭上注意！」

指示役は美鈴さんですか。

「簡単には当たりそうにないな。だったらこうだ！」

「！ 空中に回避！」

ぬわい！ 何で、自分の半径十メートルに爆発をさせますか！？

「楽だと思っただけだなあ。」

飛べないのは貴方だけですよ！

「嘘！？」

本当です。

「まあいいや。このくらいで勝てなきゃこの先は生き残れはしない。」

「ですね。」

「飛ぶ相手にやることは一つ！
ウォール！
Wall！」

「困んだ！？ 上へ！」

無駄ですね。

「壁は高くてなんぼだからな。」

更に上昇して逃げようと思ったようですが、範囲よりも高さを重視した爆発には無意味だったようです。

「これで一人！」

「なかなかやりますね。」

残り四人。いつもより少なめですが、選りすぐりの方々と見ました。

「そんなもん見りゃわかる。」

相手の力量を図るとは珍しい。

「何か気配って言うかそんなのが違った。」

妖気などが見えてきたようです。

「適応できてるってことか？」

そうしよう。

「油断は禁物だ！」

そのようです。

「吸収！」

「！」

やっぱりそのまま触れたくないようです。

「shield！」
シールド

門番隊の方の蹴りを吸収し、手ごたえのなさに体勢を崩したところを、小さな爆発で自分を覆って吹き飛ばすと。

結構考えてますね。

「変換！」

えっ？

「固定！」

変換？ 固定？ レイさんもこんなことはしなかったのですが。

「知らん！」

「話している余裕があるか！」

門番隊は地上の方が得意なようです。

「好都合だ。」

「ぐわっ！」

地雷・・・ですか。

「吸収した衝撃を爆発の力に変換し、少量の精神力で大きな爆発を生む。

これが、変換だ。

そいでもって、爆発の位置を固定して、法陣を見えなくすると、相手が近付いただけで爆発するって寸法だ。」

最近知的です。

「図書館で戦闘に使えそうなのを読み漁ったからな。」
偶に外に行くと思ったら、そんなことを。

「意外と危険なことに今さら知った。」

本当にいまさらですね。

それよりも、警戒してますよ。

「大丈夫だ。乱発はしない。どうせ弾幕しかやることが無いんだ。」

「……」

図星のようですね。

「だったら、こっちから行くぜ！ back！」

「！ 後ろです！」

宣言はやめましょうよ。

「これも先方だ！」

はい？

「トリックtrick！」

「不規則！ それでいて微妙に爆発に誘い込んでいる！」
成程、意外と面白いですね。

「レイってやつはどうやって使ってたんだ？」

ものすごく大きな爆発で、その場を一掃していました。

「うわあ。」

正直、貴方もそうすると思ってましたよ。

「だろうね。さてと、そろそろ決めるか。meteor！」

「変わりはないですね。そのまま避けてください！」

「甘いな。」

いきなり、地面が爆発しています。しかも大きさもタイミングも全てが不規則。

不規則 + 不規則は大変ですからね。

「これで終わりだ。」

「あーら、もつと鍛えないとだめですかね。」

「そんじゃあ、勝ったから出るぞ。」

「どうぞ。」

意外と凄い戦い方をしますね。

「意外は余計だ。無駄な知識は結構ある。この戦い方の原点は、ピルの爆破作業かな？」

「そうですねですか。そんなことよりも、紅魔館は、魔法の森内の霧の湖にあります。」

空も飛べない貴方が、どうやってこの先安全を確保するんですか？

「そんなこと決まってるんだろ。」

へ？

「来るやつは倒す！」

はあ。

その後の紅魔館

「美鈴！ キトリとルアートは何処に行ったの？」

「出て行きましたよ。いや、まさか、門番隊のSランクの娘を五人も倒しちゃうんですね。」

「感心している場合じゃないわよ。」

「うっ、咲夜さん・・・」

「何をやってるの！」

「御免なさい！」

美鈴は、咲夜に仙人掌サボテンにされたとか。

【第十九話】逆効果でしたwwそんなことよりも（後書き）

紅魔館から逃げました。

ネタが無いゆえにこの程度を書くのにかなり時間を使いました。
いつ頃妖々夢にしようかな？

【第二十話】（前書き）

遅れました。

タイトルが無いのは、特に何も無いからです。

どうぞ

【第二十話】

とりあえず、魔法の森を……

「ヒヤッハー！」

ワイヤーアクションのように、自由自在に飛びまわっています。

「ウロボロス最高！」

ウロボロス

アンカーの付いた鎖。

アンカーの部分が蛇の頭の様で、物だけでなく、空間にもかみつく。

これって工夫すると飛行にも使えるのでは？

「それは無理だ。」

何故？

「軸で、移動できるのは連続で二回までだ。

それ以上は、固定するだけだ。」

面倒ですね。

「つと、そろそろ人里か。」

もうですか？

「結構近いんだな。」

そうですね。

「到り着つと。」

良い感じですね。

「実りの秋つてとこだな。」

ですね、心なしか、皆さん嬉しそうです。

「俺らにはあんまり関係ないけどな。」

そうですね。

「そんなことよりも、住居確保だ！」

来るものは倒すのでは？

「無限の体力があるうと、破損したら終わりだ。」

何か、変わりましたね。

「そか？」

そんなことよりも、まずこれを。

「なんぞこれ？」

人形用のスーツとでもいいましょう。

「スーツ？」

はい。人里には、妖怪がほとんどおらず、妖怪を怖がります。

むしろ貴方のようにパツと見で分かるような型の場合はこれが必要
です。

「これ着るとどうなるんだ？」

関節が普通の人間と同じになり、見た目だけは普通の人間です。

「服は普通じゃないけどな。」
着るの速いですね。

「で、どうする？」

博麗神社で良いのでは？

「無理、霊夢がいる。」

私がかまいませんよ。

「今のメインは俺だ。」

そうでしたね。

「この世界って、ほとんど女だらけだろ？」

ええ、この幻想郷には、妖怪が居ることはご存知ですね。

「応。」

その妖怪のほとんどが女なんですよ。

「そして、其れを解決する主力人物も女と。」

そうです。

弾幕や異変とは、「男や大人の入る必要のない少女たちの遊び」と
いう考えが根強く、手を出す方はいません。

「先入観は怖いからな。」

です。

「とまあ、探してはいるが、なかなか見つからないな。まずお金が無い上に、妖怪ですからね。」

「そついやそつだ。」

お前の体から金出せなのか？」

できなくはないですが、本当は偽物なので不可能です。

「へー。」

ま、博麗神社は最終手段としておきましょう。

「ええええええええ！」

ええええええええ！ と言われましても其れしかないでしょう。

「作るという手段もあるぞ。」

貴方と私だけでできますか？

「あー・・・無理だな。」

ですよね。

そんじゃあ、さらなる手段として、私の体内に入りますか？

「抜け出せなくなりそつだから拒否。」

冗談ですよ。

「冗談じゃなかったら壊す。」

貴方じゃ無理ですね。

「だろつな。」

さてと、どうします？ ほぼ全部見回りましたが、貴方の行けそつな場所はありませんでしたよ？

「・・・作るか？」

できますか？

「できないじゃない！ やるんだ！」

根気論ですか。まあ、これも一興でしょう。

「そんじゃあ、頑張るか。」

頑張る前に、土地を探さねばならないのでは？

「土地か・・・」

何事においても、物を作ったり置いたりするにはスペースが必要です。

しかもそれが、家という大きな物となると相当なスペースが必要になります。

「だな。」

そんなこんなで、場所を探すのですが、なかなか空き地がありません。

「はあ。」

土地がそう簡単に見つかると思ったのが駄目でしたね。

「そうだな。」

と、言うことで。

「魔法の森の人里と反対の方に来た。」

途途中でいた妖怪たちは放置です。

「え〜っと、此処は完全に開いてるな。」

近くが森のおかげで、色々と不自由はしなさそうですしね。

「にしても、何も無いな。」

「つてか、家いるんですか？」

「と、いうと？」

普通の妖怪のように、木のうえだの何だので、やっていけばいいのでは？

「それもアリだが、どうせそうするんなら・・・そうだ！ 幻想郷つて、鈴蘭畑つてあるか？」

「一応ありますが、どうしたんですか？」

「俺が転生する前、と言っても、死ぬ間際の時に居たところだ。成程、よく見ておきたいと。」

「ついでだからそこで住む。」

「あ、其れはだめです。」

「何故？」

あそこでは、後少して新しい妖怪が生まれます。

其れは、捨てられた人形が、鈴蘭の毒をもち、妖怪化したものですので、今あなたが行くと、ループの周りがおかしくなるのです。

「……そか。」

なので、諦めてください。

「……」

大丈夫ですよ。幸い、今回はループ六十回目。

今回は、そこで生まれた方も、異変へ干渉してきますので。

「なるほど。」

因みに、ループがリセットされるのは、区々ですが、その異変は六十年に一度。今回は、其れが入ります。

「そうなん。」

そんなことよりも、結局どうするんですか？

「作らね。大体この森と、近くの草原を主にする。」

なんだかんだ言っておきながら其れですか。

ま、妖怪としては其れが一番良いでしょう。

特定の場所があると、攻め入れられる可能性があるのです。

「了解。」

ま、そんなことよりも、気が付いてます？

「？」

貴方のオリジナルの能力である【キャラクターをコピーする程度の能力】が弱まってきてるんです。

「うっそお！」

嘘じゃないですよ。

正直、新しい能力を使って言ってるうちに、もとからある能力が、弱まることは多々あります。これから妖力を覚醒させて使うのに、ろくに使いもしないものに妖力を回すのは良いとは言えないでしょう。

だったら、切り捨てるか、一部の技を残して消すか。

「新しい能力はどうなるんだ？」

新しい能力は、もともとその身体に刻まれているので、消す必要は

ないのですが、オリジナルの能力が、その身体に適応しきれない
ので、微妙な感じですよ。

「ゲームの慣れみたいなものか。」

そんな感じですね。

それで、どうするんですか？

「そうだな、ウロボロスと蛇翼崩天刃、後はとりあえず八ザマの部
分を残して消すか。」

そうですね。まあ良いでしょう。ほしくなったら、また復活させ
ばいいですよ。

「できるのかよ！」
できますよ。

「じゃあ、なんでそんな深刻そうに言ったし。」
見てて面白いんですよ。

「うわゝ、タチ悪いわ。」

クスクスww
じゃ、消しますね。

「応。」

終わりました。

「早いな！」

私が吸収したようなもんですから。

「うっそお！」

正直言うと、貴方よりも私の方が何でもありですよ。

「だろうね。」

さてと、何処に行きましようか？

【第二十話】（後書き）

そろそろ妖々夢編にしようと思います。
それでは

【第二十一話】ループ（前書き）

一応色々と確信云云です。

でござい

【第二十一話】ループ

はいどうも、ルアートです。

前回色々ありました。が、住居が見つからず徘徊しています。

「秋だというのに残暑が厳しい。」

そのせいか、彼もスーツを着ずに人里へ行くので、もう騒がしいの何のと。

ま、人形型の妖怪がいなかったことでもありますかね？ 大人は妖怪だから駄目だの何だの言いますが、子供たちは、人形だということ。で寄ってきますよ。

「邪魔くせえぞ！」

「ビクッ！」

ですが、彼は其れを邪魔だと言います。

まあ、子供は情報も持っていない。うえに五月蠅いですからね。私も得意とは言えませんよ。

「しゃべってないで何とかしてくれ！」

ウロボロスがあるじゃないですか。

「ああ、忘れてた。」

はあ。

「伸びろ！」

ちよっ！ 速すぎますよ！

「知るか！」

と、こんな感じのことをやり続けていると、彼が意外なことを聞いてきました。

「そう言えば、お前は何で未来のことが分かるんだ？」

そうですねえ。ほんの少し先の未来の場合、私の先読みをする程度の能力で読んでいるだけです。

遠い未来のことは、ループの関係で予測が可能なのです。

なので、少々ずれることもあります。

「なるほど。……待てよ？ ループって何？」

言ってますでしたっけ？ この幻想郷は一定の事件やらなんやらが起きるとリセットされるんです。

「リセット？」

はい、正確には、時間は戻らなくても状況が戻るんですがね。

「つまり、どゆこと？」

過去にも、紅魔館の主が紅霧異変を起こして、博麗の方が解決したんですよ。

「レミリアたちが過去にもやったと？」

其れはちよつと違いますね。

レミリアさんの先代と霊夢さんの先代の方々が戦ったんですよ。

「ふーん。でも、レミリアは五百歳だぞ？ 先代ってことはループするにはそんなに何百年とかかるのか？」

いえいえ、そんなことはありませんよ。

ただ単に先代の隠し子がいて、其れが今のレミリアさんなんです。

表に出ていない以上、いくら年をとっていようと不思議ではないのです。

「で、ループの状況が振り出しに戻るとどうなるんだ？」

振り出しに戻る前にかかわった方は亡くなり、次の方が表に出て当主となります。

因みに、全ての異変が起きてから、大体八十年くらいで元に戻ります。

「じゃあ、近いうちに霊夢たちも死ぬと。」

正常に行けばそうなります。

「何かいやだな。」

「……今までのループの記録ってある？」

一応ありますが、行ってみます？」

「頼む。」

と、言うことで、ほぼ全ての歴史が書物として保管されている稗田家の御屋敷にきました。

此処の方だけは、私と同じでループの関係で死ぬことはありません。「不老不死？」

「いえいえ、生きている間に全ての物事を記録して、転生し、また同じことをするんです。」

「几帳面な奴だな。」

正直、私も入ったことはありません。

「何故？」

気にするのが貴方だけだからですよ。

「……女つてそんなもん？」

そんなもんです。

さてと、少々交渉が必要になりますね。

相手は人間ですから。

「OK」

御免下さい。い！ 稗田さんいますか？

「はいはい。」

十代目は女性ですか。

「はい、私が稗田家十代目の稗田阿求です。」

数百年前のことでちよつと調べたいことがあるのですが。

「どうぞ、少しくらいならだれでも大丈夫です。」

それでは、四十三回目の紅霧異変の資料つてありますか？

「！ 今、何と？」

四十三回目の紅霧異変です。

「……貴方、ループを生き残ってるんですか？」

ええ、私は第一回のループからずっと生きてますよ。

「そんな！ 稗田家でもループ第四十回目からなのに。」

其れでも十分ですよ。

稗田家の方はループに関係なく生き続け、寿命も普通の人間に比べ

ると長い。それだけでも常人に比べたら生き字引でしょう。

「少々お話を聞いてもいいですか？」

ええ、良いですよ。

それでは、貴方はみただけ資料を見てください。決して傷をつけないように。」

「やっと回ってきたと思っただら其れかよ。」

「ごゆつくり。」

「うう。」

「えーっと、ああ、此処か。」

キトリは手始めに最も古い書物を取り出して読み始める。

「【第四十回紅霧異変】 紅魔館周辺を中心に幻想郷中に紅霧が広がった異変。」

首謀者はレイベルスカーレット。

動機は弱点である日光を遮るため。

その異変を博麗の御子である博麗靈牙はくれいれいがとその親友である霧雨豪魔きりさめごうまが解決。

一応先祖代々同じようなことをやってんだな。

えっと、次は。

【第四十回春雪異変】

春の月に雪が降り続け大変。

首謀者は西行寺幽吾さいぎょうじゆうご。

実行犯は魂魄露夢こんぱくろむむ。

同機は、妖怪桜の西行妖を急成長させるために春を集めた。

紅霧異変と同じく博麗靈牙と霧雨豪魔、そしてレイベルスカーレットとその従者である十六夜瓦井夜いほよいかいぢやが解決。

次に起きるのはこの異変か。

これ以上先を見るのも罪だろう。」

そう言つて、書物を巻き、次の書物を取り出す。

「【第四十一回紅霧異変】

四十回と同じような紅霧異変。

首謀者はリリアスカーレット。

同機は四十回動揺。

解決者は博麗霊霞はくれいれいがと霧雨魔猪香きりさめまいか。

本当にループ何だな。

【第四十一回春節異変】

第四十回と同じく春に雪が降るといった異変。

首謀者は西行寺幽巳さいぎょうじゆうみ。

実行犯は魂魄白夢こんぱくはくむ。

解決者は博麗霊霞、霧雨魔猪香、リリアスカーレット、十六夜咲姫いざよひさき。

男と女が偏るんだな。」

そんなこんなでループ四十回目から五十一回目まで読破した。

とまあ、こんなところです。

「なるほど。有難うございます。私もこれから貴方に負けないように歴史を記録していきます。」

頑張ってくださいね。

「ループに関する書物は、結構適当ですからね。私の代からもっとしっかり詳しく書いていこうと思います。」

そうですね。

「おわったか？」

いいタイミングです。それでは、私たちはこれで。

「また会う事があれば、いろいろきかせてくださいね。

そのころには、私も戦えるようにしておきます。」
ええ。

【第二十一話】ループ（後書き）

正直色々と手を抜いてしまいました（泣）

設定上現在は秋なので、春雪異変まで少々時間がかかります。

どうやってそれまでの時間を稼ごうか・・・

それでは

【第二十二話】キャラ設定（前書き）

今まで書いてなかったので書きました。
もしかしたら見なくてもいいかもです。
そしてものすごく短いです。
どうぞ

【第二十二話】キャラ設定

【「こんちゃっす！ 最近モバゲーを始めた作者です。」】

「久々の登場だな。」

名前の時以来ですかね？

【「うむ。ま、今回はお前らの設定を詳しく書いていくぜ！」】

「面倒なことを。」

一応説明は私と云うことで。

【「当たり前だろ？ お前はナレーターの変わりだからな。」】
そうでしたね。

それではまずは、主人公である彼から説明しましょう。

名前 キトリ

身体

身長 120？

体重 10？

容姿

見た目は、黒い帽子とジャケットを着て、その下にスーツと云う不思議なファッション。

球体関節のため、色々と自由だが、通常の生き物に比べると体が硬く脆い。

性格

極度の女嫌いで、戦闘時には、絶対に直接触れたくない。

ほとんど女しかいない幻想郷なので、色々と不便。

ある程度のこととはそつなくこなせる。

こんな感じですかね？

【「まあ、こんな感じだな」】

「少し適当な気がするのだが？」

【「気にしない気にしない。」】

それでは、次に私ですね。

名前 ルアート

身体

身長30?

体重2?

容姿

キトリをそのまま小さくしたような感じ。

小さいながらも関節は球体である。

性格

ほぼ常に敬語を話し、誰であっても同じように接する。

キトリの女嫌いのせいで色々と狂いはじめている。

キトリ以上に物事をこなせるが、身体が小さいためやれることも限られる。

私はこんなところでしょうか？

【さあ喰らえ喰らえ！ 蟲よ高まれ！】

「ぬわ！ 待て待て待て待て！ よっしや生き残った！ 蛇翼崩天

刃！ 蛇咬！ 蛇竜烈華漸！」

デイスト ションフィニツシュ！

【馬鹿な・・・】

「俺の勝ち！」

何をやっているんですか？

【失礼。】

「わりい。」

他に紹介する方は？

【私かな？】

了解しました。

名前 蜘蛛の血 通称 蜘蛛

身体

身長非公開

体重非公開

容姿

よく下駄をはく。

難しいですね。

【自分のことは意外と分からないからな。】

「ま、ある程度済んだからいんじゃないかね？ ただでさえキャラが少な
いんだから。」

【そいつもそうだな。】

それでは今回はこの辺で。

【第二十二話】キャラ設定（後書き）

もうちょっと細かい方がよかったですかね？
次回はちゃんと本編を書きます。

それでは

【第二十三話】体調不良 前編（前書き）

今回は、前後編です。
どうぞ

【第二十三話】体調不良 前編

「ああ。」

「どうしました？」

「ダツルイ！」

「何故ためたしwwって、貴方人形ですよね！？」

「応。」

「人形が体調を崩すなんて聞いたことないですよ？」

「動力部がいかれるたんじゃね？」

「いやいや、そんなことはありませんよ。」

「メンタル面ではないようですが、流石におかしいですね。」

「今までなかったのか？」

「ええ。」

「また、俺だけの特異体質かよ。」

「でしょうね。」

「ま、グダグダ言っても始まりませんから、とりあえず、どうします？」

「魔法の森ちよつと寒いから、人里で暖を取ろう。」

「魔法の森じゃ、火事が起きたら大変ですからね。」

「そう行くことだ。」

「其れじゃ、行きますか。」

「おう。伸びる！」

「もう、移動手段ですね。」

「ま、無いよかいいでしょ。」

「まあ、そうですねえ。」

「それにしても、いつもより遅いこと。」

「仕方ねえだろ。」

「ま、いいとしましょう。」

人里

「薪は持ってきたぜ。」

準備がよろしいこと。

「着火！」

ちよちよちよちよちよ！　こんな道のと真ん中でやっちやまずいでしよう？

「別にいんじゃない？　誰もいないし。」

こんな早朝に外に出る人なんていませんよ！

「それも・・・そうだなあ。」

と、言うことで、空き地に手、焚火です。

「やっぱ秋って言ったたら焚火だよなあ。」

もう冬ですよ？

「マジで!?!」

幻想郷は四季のめぐりが不安定なんです。

「外の世界の方が不安定だな。」

そうなんですか？

「不安定どころか異常気象だ。」

そこまですか。

「それにしても焚火は良いなあ。」

年寄り染みみたいことを言いますね。

「あつちでもよく言われたわ。」

でしょうね。

「にしても、体調がすぐれないな。」

正直、その身体で異常が起きたことはないですからね。私も貴方の体調不良については良くわかりませんよ。

「製作者のくせに？」

親でも分からないことがあるんです。

「親ねえ。」

それにしても、本当に原因は何なんでしょうね？

「俺に聞くなし。」

ま、経過をみるとしましょう。

「応。」

人里のはずれにて、焚火をしながら経過を見始めて、早や五時間。

「……」

さらに体調が悪化しています。

「はあ。」

これは流石にまずいですね。もう人里の方々も起き始めて、そこから辺をふらふらと。

「本当にだるいわ。」

流石に、これ以上長居は出来ませんね。

仕方がありません。紅魔館に行きますか。

「what!?!」

仕方が無いでしょう。こんなに調子の悪い中、住む場所もなく過していれば何が起こるかわかりませんからね。

「無理。」

一応、前の部屋が残っているはずですから、レミリアさんに頼んできますね。

「おいおいおいおい!」

とりあえず、美鈴さんに許可をいただかないと。

「ZZZZ」

本当にこの人門番ですか？ ほぼ毎回寝てるじゃないですか。

「ZZZZ」

美鈴さん！ 起きてください！

「ん？ くあゝ・ハッ！ 何奴！」

私ですよ。

「おや、ルアートさんですか。どうかしましたか？」

ちよつと彼が体調を崩してしまつて。体調を崩した状態で転々とすると何が起きるかわかりませんので、また紅魔館に一時的に入らせていただけないでしょうか？

「私がかまいませんが、そこら辺はお嬢様に交渉して下さい。」

分かりました。それでは、通りますね。

「どうぞ。」

えっと、確かこつちでしたっけ？

「あ、ルアートさん。」

こんにちは。

「どうしたんですか？」

いえ、ちよつとレミリアさんに用がありました。レミリアさんの部屋ってどこでしたっけ？

「えっと、後ろの通りを左に曲がって、二つ目の角を左に、そうすると、左手に見えます。」

そうですか、有難うございます。

「そろそろかしら？」

レミリアさん？ いますか？

「入っていいわよ。」

失礼します。

「どうしたの？」

ちよつと彼が、体調を崩してしまい、少しの間だけ、前の部屋に滞在させて頂けませんか？

「構わないわ。むしろ大歓迎よ。」

有難うございます。それでは、つれてきますね。

「やっぱ、能力は有効利用するべきね。」

ルアートが紅魔館に行った後のキトリ。

「あの野郎。人が体調崩してるつてのにおいていきやがって。その場に倒れ伏し、愚痴を言っていたとか。」

【第二十三話】体調不良 前編（後書き）

後半は紅魔館にて始まります。
それでは

【第二十四話】体調不良 後編（前書き）

後編です。

どしどし

【第二十四話】体調不良 後編

「あの野郎、病人をこんなところに放置しやがって。絶対にぶっ飛ばしてやる。」

誰をぶっ飛ばすって？

「……いつから居た？」

火が消えたところからです。

「それまで、観察していたと。」

ええ。其れと、今から紅魔館に運びますので。

「何だと！」

それでは、行きますよ。

「止ーめーろ！」

許可は頂いてます。

「そう言うことじゃない！」

ま、五分もあれば着きますから。

「知らん！」

とまあ、嫌がる彼を無理やり紅魔館に連れて来て、住まわせていた
だいた部屋に來ましたか。

「壁は直っているが……」

また散らかつてますね。

ま、良いでしょう。

「いやいや、良かないでしょ。」

暫く様子を見て、治ったら、出ますから。

「そうか。」

ま、妖精メイドさんにも手伝って頂きますがね。

「何だと!？」

えつと、腰の関節を外してください。

「はい！」

これですこれです。この動力部の核コアに異常が無ければ、ただのメンタル面です。

「な、何をする！」

失礼。

「……」

「どうしたんですか？ 急に死んだように静かになっちゃったけど。」

「

大丈夫です。また入れれば済む話です。

それよりも、此処からは色々とありますので、出て行って頂けませんか？

「わ、わかりました。」

さてと、調査開始です。

「……」

核事態コアに損傷や、異変はありませんね。

エネルギーの色は白ですか、漏れてもいないし、問題ありません。

えつと、他には……

やってしまいましたね。

「……」

まさか、私が抜かるなんて。つてか、今回は私のせいじゃありませんよ。

キャスパーさんが籠った後、十分もしないですぐに入ってきたんですから。

それじゃあ、能力が不安定になって、多重能力になるのも無理はありませんね。

さてと、原因も分かったことですし、メンテナンスを開始しますか。妖精メイドの方にも手伝って頂きますか。

「で、原因はなんだったんですか？」

メンテナンスをしていませんでした。正確にはできなかったというべきでしょう。

通常なら、私一人でやるのですが、彼はイレギュラーです。一人でやるのは少々辛いので手伝って頂きたいのです。

「事情は分かりました。」

おや、咲夜さんも来てくれましたか。これは助かります。

「仕事も終わって暇なので。」

そうですか。

「さて、早くやりましょう。」

そうですね。

では、この素体をリセットして、入れるようにしましょう。

もともと、リセットする前に入ると色々と不都合も生じるんです。

「なるほど。でも、もう入ってしまったている彼の体をどうやってリ

セットするの?」

簡単なことです。素体のリセットが終わったら、核元コアに戻す。ま、

そんなところです。

「つまり、その核コアさえあればどうにでもなると。」

そう言うことです。ま、其れは置いてやりましょう。

「ええ。」

えっと、とりあえず、このままではキャスパーさんの身体のままなので、一度ばらします。

「ばらす?」

ええ。一度完全にパーツごとの状態までばらして、そのパーツ一つをリセットします。

「面倒ですね。」

正直、こうした私も面倒です。

ま、これだけ人出があれば消滅することはないでしょう。

「消滅?」

ええ。核コアをずっと外に出しとくと、約二時間で消滅します。

「何で其れを!」

ま、まだ十分しかたっていません。

ミスをしなければ、一時間で終わるでしょう。

「今まで、どうしてたんですか？」

新しい精神ができるまでには、約一日です。

なので、私一人でもよかつたんです。

ですが、十分もせずに入ってきたんで、何もできませんでしたよ。

「それは大変でしたね。」

さて、無駄話は此処までです。さっさと終わらせませよ。

「ええ。」

では、関節を一つずつすべて外して、球を外すと消去の文字があるはず。それを筆でなぞってください。

「筆で？」

ええ、多少ずれても問題なしです。

「分かりました。それじゃあ、行きますよ！」

「おー！」

私は、一番繊細な核コアのメンテナンスです。

一時間後

「終わったー！」

思ったより早かったですね。ですが、此処からが正念場です。全てのパーツをもとに戻します。

「確かに正念場ですね。」

さてと、後一分で終わらせませよ！

「おー！」

手足を組み立てておいてください。

「はい！」

核コアを入れて、腰のパーツ何処ですか？

「ここです！」

有難うございます。・・・よし。えっと、次に、手足をはめてください。角度を間違えないようにしてください。

「えっと、ここですか？」

逆ですよ。

「すみません。」

えっと、頭は・・・。

「こうですよね。」

そうです。

ふう、良かった。時間内に終わりましたよ。流石に自分のやるべきことを自分で早めることはありませんよ。

「自分のやるべき事？」

私はこの素体の最期を見ないといけないんです。製作者として。

「そんな、いつになるかわからないことを。」

ええ、ですがだからこそやりがいがあるんです。

「そうですか。頑張ってくださいね。」

はい、有難うございます。

「うーん。」

やっと目が覚めましたか。

「んで、どうだった？」

随分と冷静ですね。

「大体予想はつくからな。」

そうですか。えっとですね。素体リセットで能力が安定しました。その代わり、もとからある【キャラクターをコピーする程度の能力】しか使えなくなりました。

「何だつて!？」

仕方が無いでしょう。能力のために、ずっと体調不良でいますか？

「・・・それも・・・そうだな。」

ま、頑張りましょう。

【第二十四話】体調不良 後編（後書き）

理由がまさかのルアートww

次回から、多分妖々夢編になると思います。

それでは

【第廿五話】冬の忘れもの（前書き）

今回から妖々夢変なので、廿にじゅうとさせていただきます。
ぞぞぞ

【第廿五話】冬の忘れもの

さてと、そろそろ春ですね。

「ずいぶん飛んだな。」

仕方が無いでしょう。紅魔館から脱出するのに、今度は門番隊ではなく美鈴さんと戦っただけで、特に何もなかったのですから。

「だな。まあ良いか。そんなことよりも、寒くないか？」

確かに、もう初春もとつくに過ぎていきますし、其れでも雪が降り積もっています。

「春雪異変か？」

そうなりますね。今回も干渉するんですか？

「もちろん」

それじゃあ、霊夢さんのところに行くのでしょうか。

「何で？」

ある程度の異変はあそこが出发点です。

「え、だって、今回はレミリアや咲夜も来るんだぜ？ それなの

」

行きますよ。

「言わせ」。

嫌です。

「能力活」。

してますよ。

「早すぎんだろ！」

ww

ま、そこまで嫌なら一人でもいいでしょう。その代わり、覚悟しておいてください。

「壊れないようにするさ。」

寒いので、いつもよりも少々もろいですからね。

「そうなんだ。」

「ま、良いでしょう。」
「出発！」

「で、冥界ってどこ？」
「知らずに出発したんですか？」

「まあ・うん。」
「えっと……どこでしたっけ？」

「お前も覚えてないんかい！ ¥ (^ | ^)」
「ま、とりあえず。遭遇する人に聞きますか。」
「だな。」

とまあ、遭遇した人は。

「また女か。」

「あら、女で悪かったわね。お父さんの方が良かったかしら？」

「まあ良いか。なあんだ、冥界ってどこか知らないか？」

「率直！？ (;)！！」

「私は知らないわ。でも、私は涼しいところに向かっているの。」
「何で？」

「私は冬の妖怪。早く寒くしないと暖冬になっちゃうから。でも」
「こら辺はまだ寒いから出るに出られなくて。」

「なるほどね。」

「私のこと忘れてません？」

「うん忘れてた。」

「貴方誰？」

「はあ、一応自己紹介しますね。」

「私はルアート、彼を観察しているだけの製作者ですよ。」

「製作者？」

「ええ、私はこの体に入る前に彼の人形にくたいを作り、彼がそこに入ってきたんです。」

「苦勞人ってわけね。」

「ま、そう言うわけです。」

「さてと、此処で会ったのも何かの縁。ひと勝負するか？」

「え？」

「かかってこないなら行くぞ！」

「こんな人なの？」

「まあ。」

「面倒ね。」

「ま、頑張ってください。」

「何時まで話しているんだ？」

「それでは、私はまた状況の分析をさせていただきます。」

「うおーい！」

「何とか避けられましたね。」

「危ねえ危ねえ。」

「よく避けたわね。」

「えつとですね、彼女はレティ・ホワイトロック。【寒気を操る程度の能力】をもちます。」

「不意打ちされたことに突っ込めよ。」

「なので、熱の類を使えば倒せますよ。」

「無視すんな！」

「私も身の安全が大事なの。」

「氷柱ていど、バーニングハート！」

「チルノさんの時と同じ要領ですね。」

「オラオラオラオラ！」

「クツ！」

足元！

「風林火山！ 韋駄天！」

このタイミングですか。

「早い！」

本当にチルノさんの時と同じにする気ですか？

「めんどいから。」

だったら、何故勝負を挑んだんですか？

「ん・・・なんとなく？」

はあ。

「だが、今回は簡単にはいきそうにない。
はい？」

「チルノと一緒にしないでくれない？ あの娘には負けたことはな
いわよ。」

「つつーことだ。」

理解。

「ま、だったら火力を上げれば良い。アーマーゲドン！」
隕石はどうかと思いますよ？

「さらに、オラオラオラオラオラ！」

砕いて飛ばすとは。これはえげつない。

「勝たねば意味が無い！」

そうですか。

「熱いわね。常に厚着だから、辛いわ。」

その言葉は本心でしょうね。

「関係ない！」

全く。

「いい具合に散ったところで、ファイアfire！」

あちら、隕石の破片を爆発させるとは。何でもありもいいところです。

「白符「アンデュレイションレイ」！」

「！爆発が凍っただと!？」

「冷氣と寒気では寒気の方が寒いだよ。」

「寒くて凍るのか？」

「今のは応用だから。」

「なるほどね。」

とにかく、近づく凍らされる可能性があるので気をつけてください。

「いあよ。」

「無駄ね。」

・・・気温が。

「今言っただばかりでしょう？ 私の能力は【寒気を操る程度の能力】。

距離なんて関係ないわ。」

「確かにそうだな。」

納得です。

「だったら、気温に関係ないことをするまでだ！ シルフィード！」

シルフィード

風を操る。

「寒気が！」

「女キヤラの技は使いたくないんだよな。」

でも、最良の手でしょう。

「さらに、ヨガファイア！」

今度は、熱風を吹きましたか。

「応用だぜ。」

「あっつい！」

「脱ぐな！」

「大丈夫大丈夫、一応下は半袖だから。」

「そういう意味じゃない！」

戦闘中の会話ですかこれ？

「知らぬ！」

「まだ暑いわね。」

「ストレートフラッシュ！」

「無視しないでくれる！？」

「脱いだ事を後悔するがいい！」

何を考えているのか。

本当に見てて飽きませんね。

「寒気が無い！」

「チエックメイト！」

あーらら、吹っ飛ばんじやいましたね。

ま、あつちは彼女の目的地だから良いでしょう。

「あ、上着忘れてる。」

一緒に吹っ飛ばして下さい。

「放置。」

吹き飛ばされた後のレティ

「へくちっ！ 今年は暖冬じゃないのね。

流石の私も真冬に薄着じゃ風邪ひくわよ。」

上着を脱いだ事を本当に後悔したとか。

【第廿五話】冬の忘れもの（後書き）

レティがひどかったorz

次回はだれだったかな？

それでは

【第廿六話】式の式（前書き）

最近更新力がめっきり落ちています。

ま、今回も戦闘です。

どうぞ

【第廿六話】式の式

一応、レテイさんを倒して、軽く進んでいます。

「同じとこ回ってない？」

「其れはないですよ。」

冥界は空に入口がありますから、空で同じとこをぐるぐる回るのは相当の馬鹿です。

「だよなあ。」

とまあ、一応もつと進むと。

「そこのお前！」

「ん？」

急に声をかけられ、振り向こうとした瞬間に。

「食らえ！」

「What?」

今度は弾幕ですか。

「あつぶねえな！ この餓鬼が！」

ビクッ！ という音がしそつなくらい、身構えている状態から身体が縮こまる。

「不意打ちとはとういうことだ？ ええ！？」

「ご、ごめんなさい！」

貴方は冥界への入り口を守るために此処にいたんじゃないですか？

「あ、そうだった。」

「余計なこと言うな！ ここ最近、女だらけでストレスたまってるだ！」

だからと言って、こんな子供に手を出すとは。

「子供じゃないぞ！ 私の名前は橙！ 八雲一家の八雲藍様に使える式さ！」

「だよ。しかも化け猫だから百年は生きてんだろ？ だが俺は、まだこの体に入ってから半年もたっていない。」

本当は俺の方が年下なんだぞ？」

精神年齢は上ですがね。

「そこは突っ込むな。」

「私のこと忘れてない？」

おっと失礼。

「で、かかってくるのか？」

「戦うにきまつてんじゃん！ 私の力を見て驚くな！」

「大丈夫大丈夫、お前はゲームで言うところ二面ボスあたりだから。」

「ゲーム？ 二面ボス？」

良くわからない単語を出さないでください。

「悪い悪い。」

ま、早速来ているので何とかして下さい。

「たまには戦えよ。」

二人以上来たら良いですよ。

「面倒だな。」

だったらさっさと倒してください。

「簡単に言わないでよ！」

普通弾幕ですね。簡単に避けれるでしょう。

「余裕！」

「避けられた！」

「絡め！」

「うわっ！」

ウロボロスで拘束ですか。

「こっちだ！」

「え？ え？」

ワイヤーですね。これで上をとりましたか。

「ストーン！」

ストーン

石になる。

これはえげつない。

「遅いよ!」

「解除! オプティックブラスト!」

「弾幕!?!」

ちよつと違いますね。

「ミスティックスマッシュ!」

ミスティックスマッシュ

ハイパーミスティックスマッシュの玉に姿を変えて体当たり。

「危なっ!」

「避けれるわけないだろ。」

バウンドしていますね。

これは簡単には避けられないですね。

「いった!」

「まだ軽い!」

確かに、まだ大きなダメージとは言えませんね。

「そういう意味じゃない!」

ま、当たり前ですが相手もくたばってませんよ。

「だろうな。」

「これでも妖怪だもんね!」

「.....」

どうしました?

「猫又と、化け猫ってどう違うの?」

知りませんよ。

「何で?」

私が詳しいのは人物のみです。

「本当に駄目だな。」

そんなことよりも来てますよ。

「食らえ！」

「何！」

おっと、久々に喰らいましたね。

「五月蠅え！」

「まだまだ行くよ！」

此処から怒涛の攻撃ですね。

「チツ！」

「ほらほらほらほら！」

「斬神！」

斬神

カウンターで投げたりする。

「アレ？」

「踏み込みが甘いぞ！　そして、一撃が軽い！」
随分と言いますね。

「俺の感想だ。」

「言ったなー！」

おっと、もう知りませんからね。

「かかってきな。」

「うおりゃああ！」

今回は随分と重い。

「フンツ！」

ま、受け切りますね。

「遅い！」

カウンターに足払いとは、本当に大人げない。

「重さに意識が行き過ぎている！」

今度は、攻めますか。

「上！　中！　横！」

掌低と手刀で軽いコンボですね。

重さと早さを兼ね備えています。

「うう。」

「こうだ。」

何か、スパルタトレーニングみたいになってますよ？

「ん？ そうか？」

「いったいなあもう。」

さてと、此処からどうなるか。

「あんまり頼みたくないけど仕方ないよね。

赤鬼！ 青鬼！」

「鬼！？」

鬼の四天王に比べれば随分と弱いですが、力は十分ですね。

「とにかく、そいつをやっつけるよ！」

「「ウオー！」」

「面倒臭え。」

ガンマクラッシュュ！」

「受け切って！」

「な！？」

おや、なかなかですね。

「それ！」

「怯ませられるほどの威力が無いと無駄なんだよ！」

痛覚なし、無限の体力ならではのですね。

「今度はこつちだ！ ウロボロス！」

赤鬼に急接近して・・・

「うおら！」

頭を地面にたたきつけて。

「おらこつち来い！」

ウロボロスで、赤鬼の上に青鬼をたたきつける。

「グオ！」

「仕留める！ ガンマクラッシュュ！」

重なっている二体の鬼に岩石をもって落ちる。

「！ 戻って！」

「チツ！」

おやおや、戻しちゃいましたか。

「式神じゃないから安全地帯に送っただけだね。」

ま、閑話休題それはさておきこれで一対一です。

「ちよつと強めの行くよ！」

「俺はこれで仕留めたいんだがな。」

「そう簡単にはいかないよ！ 方符「奇門遁甲」！」

「スペルカードか。ま、問題ないだろう。」

人形の体を生かして、身をひるがえしての回避ですね。

「そこだ！ 蛇竜蓮華漸！」

「えっ？」

「オラオラオラオラ！」

これは今戦闘で最も大人げない。

「くたばれ！」

「二ギヤ！」

あら？

「？」

いなくなりましたね。ま、式神なので恐らく呼ばれたかなんかした
んでしょう。

「そうか。」

とりあえず、これで進めますね。

「応。」

その後の橙

「大丈夫かい？」

「は、はい！」

「全く、珍しく部下の鬼達まで出して何をむきになっていたのかし
ら？」

「年下に、負けたくなかったから。」

「なるほどね。」

「じゃ、今度は負けないようにもっとしっかり修行を積みなさい。」

「分かりました！」

上司に色々と言われていたとか。

【第廿六話】式の式（後書き）

色々と変でした。

赤鬼と青鬼はウィキにて調べました。

次回は再登場のあの人はです。

それでは

【第廿七話】予期せぬ再会（前書き）

最初に出てきたあの人が再登場です。
どうぞ

【第廿七話】予期せぬ再会

橙さんが何処かに行った後、今まで道理に冥界を目指して進んでいるわけですが、結構上がってきたところであることに気付いたわけです。

「何で、桜の花びらが落ちてくるんだ？」

「そこです。」

ところで、貴方は異変の理由やらなんやらを見てきたんですね。

「ああ、阿求の家な。」

あそこにこの春雪異変についてのことが書いてあったはずですが、読みましたか？

「そこまででは読んだ。」

そこに何か記載されていませんでした？

「えっと確か、亡霊が西行妖を急成長させるって。」

そうです、西行妖と呼ばれているのは、妖力をもった桜の木、つまり妖怪桜です。

「成程ね。其れは良いとして、何で急成長させたりする必要があるんだ？」

えっと、確かその西行妖何か封印されているとか何とか。

「つまり、さっさと成長させて枯らしてしまおうと。」

違いますね。だとしたら、切れば済む話。何故成長させる必要が？

「じゃあ、逆に成長させきると封印がとけるとか？

でも、木って、何処まで成長するかわかんないぞ？ 樹齢千年とか

簡単にあるからな。」

そうですね。それでは此処で貴方に質問です。

「応。」

桜を見て、最も美しいと思う状態は？

「そりゃあお前満開の時だろ。」

その通り。西行妖を満開にすることで、封印がとけるかと。

「ふむふむ。」

ま、今はそんなことよりも先に進むことを考えましょう。
「だな。」

数分後

「……………」

どうしました？

「何でいるんだよorz」

「あら？ 貴方は確か、名無しの人形さん。」

「大丈夫だ、今はちゃんと名前があるから。」

「そうなの。」

それじゃあ、改めて聞くけど、何て名前？

「キトリだ。」

「ふーん。で、オプションの貴方は？」

私のこと知ってたんですね。

私はルアートと命名されました。

「良い名前じゃない。」

「それよりも、何でアリスはこんなところにいるんだ？」

「え？ そ、それは。」

「……………なるほど。」

「？」

聞きたいですか？

「応。」

「え、ちよつ、まつ！」

彼女はですね、今回異変を解決に来るとなたか、ま、私たちが来るのは予想外だったそうなので除外して、毎回解決している霊夢さんが魔理沙さんに会うために待ち伏せをしていたということでしょう。

「カア／＼／」

「凶星か。」

「全く、ひとのことを何にも考えないで！ 絶対、後悔させてやる！」

「今回、俺パスな。」

私単体ですか？

正直、戦闘は苦手ですよ。

「しらねえよ、今回はお前のせいだろ？」

はあ。

「行くわよ！ 私の人形達！」

面倒です。

ポーン！

「おお！」

「双剣をもった西洋騎士？」

とりあえず、適当に撃退しといてください。

「勝手に動くのか。」

アリスのは自立じゃないからルアートには余裕ができるな。」

「構わないわ！ 本体を狙いなさい！」

同サイズだと、肉弾戦でしょうか？

えっと、この間パチユリーさんに説明したあの武器はっど……

あつたあつた。

「何だあれ？」

「一斉攻撃！」

ハッ！

「成程ね。ワイヤーを使って分銅で攻撃と。」

「そんなの、絡めてしまえば良い！」

無駄ですよ。このワイヤーには対魔用の工夫を施しています。

貴方の魔法系に当たればそちらが切れるでしょう。

「何でもありもいとこだ。」

そんなことをしているうちに。

「ハッ！ 防御を！」

流石に一体では物足りませんね。

ビショップ！ ナイト！

「今度は魔道士と馬の頭か。」

・・・行動開始！

「ナイトが動いた！」

「直線的。」

どうでしょうか？

「おや？ ナイトの様子がww」

強く行きます！

「早い！」

「三脚の脚を合わせて踏みつけるか。しかも何度も飛び上がる。私のペースですよ。」

「そこ！」

「隙を突かれた！」

甘いですね。

「ヒビヒビィ！」

「角！？」

飛んで潰すだけじゃだめですからね。

さあ！ 二人そろって一気に攻めちゃってください！

「ほとんど何もしてねえな。」

そうでもないですよ。

この技は、常に妖力を駒に送らなければいけない技。

生身の人じゃ、ポーション一体が限界でしょう。

「マジか。」

さてと、そろそろですかね。

「二体なんて卑怯よ！」

十数体操る貴女に言われたくないです。

さて、離れてください！

「え？」

発射！

「あ、ビショップの存在忘れてた。」

彼は回復やら援護射撃やらを主に行いますから。

「偵符「シーカードールズ」！」

流石に飛び道具はまずかったですか。

「にしても、花卉の量が多いなあ。」

もう関心なしですか。

「今度はこちらからよ！ 戦操「ドールズウオー」！」

対人用の攻撃じゃ、密度が薄いですね。

「身軽だねえ。」

「だったら、引き寄せる！」

囲まれましたか。

だったら、爆符「パニックボム」！

爆符「パニックボム」

ありとあらゆるものが不規則な爆発を発生させる。

この技を喰らった相手は絶対当たらないのにパニックになることから名付けた。

「ボム！？ しかも不規則な！」

本当は、攻撃用ですが、こういった使い方もあります。

「チートもいいとこね。」

其れはどうも。

「アレ？」

「後ろを取ったか。」

失礼！

「あぐっ！」

「延髄に分銅はまずいだろ。」

色々と面倒なので。

「おー、人形が落ちてくる落ちてくる。」

ま、とりあえず先に進みましょう。

「はいよ。そんなことよりも質問だ。」

急に変わりますね。

「冥界ってさ、上空にある気がすんだけど。」

「・・・そうでした。」

「おいおい、だが、だとすると、俺は空飛べないぞ。」

翼でもはやしてください。

「はあ。」

目覚めた後のアリス。

「うう。」

「あれは、アリスね。」

「そうですね。」

「友達がいない子だけど、無視して早く行きましょう。」

「はい。」

「え、心配してくれないの?」

本当に友達がほしいと思ったそうだ。

【第廿七話】予期せぬ再会（後書き）

主人公ほぼ出番なし！

とまあ、色々頑張ってます。

部活が終わったのにこの更新力の遅さはどうにかしないと
それでは

【第廿八話】春ですよー春ですよー春ですよ．．．よ？（前書き）

今回はタイトルで分かりますね。
ぜひ

【第廿八話】春ですよー春ですよー春です．．よ？

久々に戦闘をして、精神的に疲れました。

「お疲れ〜。」

いやはや、口は災いのもととはよく言ったものですね。

「はは。」

そんなことよりも、どうやって、上空に行きましよう？

「それなんだよ。」

とりあえず、お前は良いとして、俺は上空高くまではいけないんだよ。」

翼の生えたキャラとかいないんですか？

「いても上昇力に欠けていたり、上限がある。」

私に持つて行けと．．

「そうなるな。」

最悪、投げ飛ばしますよ？

「いやいや、気圧変化とか考えろよ。」

私たちにそんなものは関係ないです。

「何でもありだな。」

其れが私たちです。

「だな。」

そいじゃあ、どうする？」

チートという手段は？

「ああ、其れがあつたか。」

私たちにリミットはありませんよ。

「そりゃいい。」

エアレイド！」

エアレイド

空中浮遊。

翼の形には、天使と悪魔の二パターンがある。

「さっさと行くぞ！」

できるようになったとたんになんか・

「ん？ ちょっと待て。」

どうしました？

「アレ誰だ？」

えっと、春の妖精であるリリーホワイトさんですね。

「かかわらない方がいいか？」

ええ、関わるだけ無駄に戦うことになります。

「それじゃあ、避けるか。」

其れが一番です。

「とりあえず、上に向かうか。」

油断はしないでくださいね。

「は？・・・！」

だから言ったでしょう。

「どういうことだ？」

今のリリーホワイトさんは、四季のめぐりがおかしくなっちゃって、暴走と言っかなんというか、そう言うやつです。

「おk理解。」

少々注意する程度で良いでしょう。

「はいよ。」

「ハ・ハ・ハ・ハルデスヨーハルデスヨ。」

「何なんだこの奇怪なフレーズは。」

そして、中途半端なラップ調。

何ででしょうね？

「俺が知るか。」

「あらら？」

「やっべ。」

気付かれましたか。

「それ！」

「いきなりかよ！」

流石ですね。避けることに関してはそれなりのお手並み。

「コメントは良いから、どうにかしてくれ。」

そうですね、ボムでも使ってください。

「レイの能力無くなってる。」

普通に爆発する感じの技とかないんですか？

「あるにはある。」

じゃあ、それで良いじゃないですか。

「相変わらず手伝ってくれないのな。」

私はサポート専門ですから。

「サポートなら何かしてくれよ。」

「弾幕ですよ。」

分かりましたよ。

パニックボム！

「あら。」

貴方は、去年見かけたわね。」

はい？

「去年は、結構長居していたから一部の人は覚えているのよ。キャ

スパーちゃんは元気？」

いえ、もう籠ってしまいましたよ。

「ひきこもり？」

ちよつと違いますね。

「そう。」

暴走しているのに、この安定感……まあいいでしょう。

「そんなことよりも、何で春が来ないの？」

「ん？ なあ、今少し幼くならなかったか？」

分かってますよ。

さつきから、どんどん春が吸収されていって、春の妖精である彼女の力や精神年齢が落ちているのです。

「なるほど。」

「そんなことよりも、何で春が来ないの？」

えっとですね、手短に申し上げますと、冥界にて、西行妖を満開にさせるために、春を集め、吸収しているようです。

「そうなんだ。じゃあ、何とかしないとね。」

・・・逃げたほうがよさそうです。

「はい？」

「いっくよー！」

「波道拳！」

「キヤアアアアアア！」

「あるええ？」

「痛いじゃん。」

「生き帰りよった。」

まだ春があるようですね。

「こんなガキみたいに見える目になったのにか？」

最初は、パツと見十八くらいだったのに、今じゃ小五だ。」

私に文句言わないでくださいよ。

「じゃあ、誰に言えと？ 俺は女と餓鬼は嫌いなんだよ。」

そこだけは理解に苦しみます。

「お前は慣れだろ。」

でしょうね。

さてと、無駄話は此処までです。この先、戦闘し続ければ、リリーホワイトさんは、幼児まで退化するでしょう。

それ以上はないと思いますが、一応さっさと退けて解決しましょう。

「あいよ。とりあえず餓鬼になるとうるさいからな。」

何をする気です？

「こつするのさ。植物の掟！」

植物の掟

つるで捕まえた相手を体内に放り込み身体を振る。

その際に体内で何が起きているかは不明。

「ありよ？」

「そのままは嫌だからな。

ルアート、毛布とかある？」

ええ。

「よし、かぶせる。」

大きいものはあまり出したくないのですが。

「つべこべ言うな。」

「あつたかい。」

「行くぜ！」

何故高速回転を？

「こついうこと。」

・・・成程。

「世界が回るゝ幻想郷も回るゝ・・・」

回転により、目を回させて、動きを封じると。

「後は放置！」

良い判断です。

「さてと、さつさと上に行くぞ。」

ええ、とりあえず入口のあたりに強い結界が張ってあるので、その

結界を探しましょう。

「何で今頃かな？」

その後のリリーホワイトさんですが、どうやら、毛布を渡した私になつてしまったようです。

「一緒にいこー。」

こうなったら、解決して春がめぐり、成長するまで待つしかないでしょう。

「俺は御免だ。」

私に言われましてもね。

「あの時に拘束しておけばよかった。」
「まあ、そう言わずに。」

【第廿八話】春ですよー春ですよー春ですよ・・よ？（後書き）

何で最後こうなったんだろう？

何か私、自分の小説の主人公を痛めつけている気がします。

それでは

【第廿九話】 幻想郷的音楽家（前書き）

今回もタイトルどおりです。

どしどし

【第廿九話】幻想郷的音楽家

リリーホワイトさんがくつついて来ているため彼が少々離れてい
ますが上に向かいます。

ひたすら進んだことが幸いして境界を越えられました。

「案外楽だったな。」

張つてないに等しいものでしたからね。

「はるまだー？」

今全力で解決していただきますので待つてください。

「わーったー！」

「全く、何で連れてきたかな？」

ついてきたんですよ、つれてきたわけではありません。

「同じじゃ。ん？」

この音楽は？

「おんがくー！」

「なかなかセンスのいい音楽じゃないか。

楽器はヴァイオリン、ペット、キーボードってどこか。」

わかるもんですねえ。

「音楽は良く聞いていた。」

「ゆづれいがくだん。」

「幽霊楽団？」

幽霊楽団とは、その名の通り、幽霊と言つよりも騒霊だけで出来た
音楽団です。

「単純だな。」

それでは、少々急ぎましょう。

「ああ。」

「最近、誰も聞いてくれないわね。」

「そうだね。」

「そんなに暗くなっちゃだめだよ！」

「私たちは明るくてナンボ何だから！」

「そうだけどさあ。」

「そんなんだから姉さんは根暗なんて言われるのよ！」

「うっ……」

「ほら！そこに三人人がいるから、聞いてもらおうよ！」

「そうね。」

「……すごい勢いでこっちに来るんだが？」

「ござーと？」

冥界には幽霊しかいないですからね。

大概が音楽に興味が無いんですよ。

「もったいない。」

でも、私たちには時間がありません。

失礼ですがさつさと目的地の白玉楼に行かなくては。
「だな。」

「あれ？ ちょっと逃げてない？」

「気付いていないのかな？」

「いや、さつきこつち見てた。」

「じゃあ、もう仕方ないね。」

「うん仕方ない。」

「無理だったら異変解決でもしょうか。」

「ん？」

「食らえ！」

まさかの不意打ち。

「ルナサだ〜！」

プリズムリバー三姉妹の長女ですね。

「解説している場合か！」

「それ！」

「メルランだ。」

次女ですね。

「主人公変われ！」

「嫌だ！」

「リリカだ。」

三女ですね。

「誰が主人公交代するか！」

「私たちに人気をよこしなさい！」

「人気あるかわかんねえし！ その前にお前らの方が知名度高いだろ！」

「そりゃあ、そうだけど。」

「俺は急いでるんだ。じゃあな。」

上手く抜けましたね。

「ああ。」

「何で聞かないの？」

急がないと春が遅くなりますよ。

「や〜だ〜。」

じゃあ、急ぐ必要があります。

「む〜。」

確か白玉楼は……

「ちよつと待てーい！」

「うおあー！」

「誰も行っていいなんて言ってないでしょ！ って、聞いてる？」

「生で触られた！ 生で！ うわあ〜〜〜！」

「えっ？ 私何かした？」

いえ、ただ単に彼が極度の女嫌いなだけですよ。

「だいじょーぶ？」

「く、くるなあ!」

お黙りなさい!

「ぐふあ!」

すいませんね。

でも急いでいるので聞いている暇はないのです。

「そんなの知ったこっちゃないわ! 私たちの音楽弾幕を聞きなさい!」

次女は元気ですね。

「……」

長女は根暗。

「人気よこせ!」

三女は不人気と。

さてと、そんなことよりもさっさと戻ってきてください。

「あ、落っこちてる……」

「全くお前はなんてことをしゃがる。」

貴方が悪いんですよ。

「知るか!」

「きといだいじょーぶ?」

「五月蠅い。」

本気ですねえ。

「さてと、邪魔な奴らは排除しないと。」

早くして下さい。

「簡単に言うわね。」

「私たち三人のチームワークには勝てないわよ。」

「……」

だそうです。

「だったら、お前も参戦しろ。」

嫌です。

「何故?」

最近私動きすぎで色々と不安定なんです。

「何でもありの裏にはいろんなデメリットがあるのな。」
「そう言うことです。」

「じゃあ、リリーホワイト。お前手伝え。」
「やーだー。」

今のリリーホワイトさんは最初に会った時のように大人じゃありませんから今じゃ普通の人間で言つと小学校低学年くらいですよ。

「じゃあ無理だな。」
「あら、意外と素直ですね。」

「ねえ？」
「はい？」

「そろそろ始めても良いかな？」
「待たせてしまいましたね。」

「応、かかって来い！」
「それじゃあ、早速。」

「真空片手駒！」

真空片手駒

片手で体を支えて高速回転する技。

「うわわ！」
「！」

「弾幕じゃない！」
「やり放題ですね。」

「今度はこつちよ！」
「ルナサ姉さん！ リリカ！」

「はいよ。」
「OK」

基本的な弾幕ですね。

「ぶっ、よっ、っど。」
「でも、簡単に避けますね。」

「なれた。」

其れは良いことです。

「流石は主人公ね。」

何か、小説内で言うセリフではない気がするのですが。

「知らない！」

「ちょ！ まさかのキーボードで殴るとは。」

それで良いんですかね？

「そろそろスペカ行くよ！」

「お、久々。」

「神弦「ストラディヴァリウス」！」

先ほどに比べれば高密度ですね。

「グレイズ避け！」

カリカリと。

「あわわ！」

なんだかんだでリリーホワイトさんも避け切れていますね。

「くっそー！」

「スレッジ！」

「弾幕が聞かない！」

「ハンマー！」

「うぐっ！」

スレッジハンマー

一撃目で飛び道具をすり抜けて、二発目で腕をたたきつける。

「ルナサ姉さん！」

叩き落とすしちやまずいでしょ。

「霊だからもう、死んでんじゃないの？」

違いますよ。

彼女等はレイラプリズムリバーという人間に想像されてその方が無くなった際に消えるはずだったのが残留しているだけですよ。

「なんかひどい言い方だな。」

間違っではいけませんよ。

「まあいいや。」

「結構効いたよ。」

さつきから弾幕でもないのに私たちに触れて攻撃できるなんてね。」

「いろいろとチートなんだよ。」

羽をつぶされたら終わりですがね。

「おいおい、それ言っちゃダメだろ。」

ま、すぐ再生させればいいんだけどな。」

全く持つてチートですね。

「お前が言うな。」

「戦闘中だよ!」

不用心に特攻ですか。

「エリアル!」

ただでさえ空中ですよ?

「落ちろ!」

「メルラン!」

「く!」

おお! メルランさんをリリカさんにたたきつけるとは。

「数にモノを言わせるつもりだったんだろっけどな。」

大体はいけるんだよ。」

「流石にこれはまずいわね。」

姉さん! リリカ! 大技行くわよ!」

「はい!」

「いいわよ。」

「「「大合葬「霊車コンチエルトグロツソ怪」!」」」

超高密度。

「グレイズしてる余裕ねえぞ!」

何とかして下さい。

「エイジスリブレクター!」

エイジスリフレクター

自分の前に自分の三分の二程度の大きさのエネルギーの壁を放つ。

「一時しのぎだ。」

どうします？ この状況じゃ上下左右潰されていますし。

「……これだ！」

お、何か思いつきましたか？

「マグナティックホイール！」

成程スレッジハンマーの力を加えていますね。

「ちよつとちよつと、まずいかもよ！」

「全部弾かれてる！」

「鬱だ。」

「接近完了！ テラブレイク！」

ピチューン！

「はい？」

アレですよ。シューティングゲームで言う喰らった時のアレです。

「ああ、アレか。」

「アレ？」

「流石に三対一は辛いわ。」

そうですか。

「お疲れ様。」

「ん？ ああ。」

おや……クスクス。

「あー、負けちゃった。」

「いくらなんでもあれは予想外だよ。」

「此処まで悪いこと続きだと逆に気持ちいいわ。」

「……演奏聞かせてくれないか？」

「えっ？」

……やっぱり。

「リリーも聞く。」

多少遅れても問題はないでしょう。

「本当に聞いてくれるの!？」

「ああ、久々に音楽が聴きたくなった。」

「OK それじゃあ二人とも、行くよ!」

「OK」

【第廿九話】 幻想郷的音楽家（後書き）

キトリ君に分かりやすい変化がありました。
それでは

【第参拾話】昨日の敵は今日も敵（前書き）

ちよつとゲームに関係ないです。
どろぞろ

【第参拾話】昨日の敵は今日も敵

「良い音だったな。」
ええ。

でも、ソロの時は大変でしたな。

「ああ。ルナサとメルランの時は記憶が無い。
もう少し気をしっかり持ってください。」

精神力は妖力でも間違いいはないのですから。

「あそう。」

「zzz」

リリーホワイトさんはソロの時に気を失ってしまい今は私が担いでいる状況です。

私の方が小さいんですけど。

「にしても、妖精つてのは精神力も弱いのかな。」

今の彼女は春が無くなってきていて弱っているのもありますが、大
体が弱いですね。

「よし、置いてけ。」

いやいや、其れはないですよ。

「なんだかんだで戻ってこれるだろう。」

妖精が記憶力が無いのは知っているでしょう。
其れでも置いていくと？

「……だな。」

さてと、恐らくもう大きな敵はいないでしょう。

「まじで？ 超楽じゃん。」

ま、其れも白玉楼につくまではですけど。

「そりゃあ、そうだな。」

「……でも、注意はしておいてくださいね。」

「応。」

おや、もう驚いたりしないんですね。

「一回見ちまったらな。」
「そうですか。」

「あら、なかなか進歩しているようね。」

「まあ、まだ妖怪としての年齢は零歳ですので当然かと。」

「それもそうね。」

「咲夜さんとレミリアさんですか。お久しぶりです。」

「お久しぶりです、ルアートさん。」

「貴方達も異変解決ですか？」

「ええ、今回は単独で二人だけで行動をしています。」

「前は、あの後に霊夢と魔理沙が来て大変だったわ。」

「おわったのに弾幕勝負したのか？」

「あら、いたの？」

「いたようです。」

「何でお前らが出ると俺が空気になるかな？」

「一人だけ外れてるんですよ。」

「どこが？」

「言動とか性格とか。」

「つまり？」

「もう少し礼儀正しくしてください。」

「ごもつともね。」

「ですね。」

「はあ。」

「ところで、其方も異変解決ですか？」

「ええ、流石に春が来ないと宴もワンパターンになってしまっから。」

「四季折々の宴をもよおすのが紅魔館のやり方です。」

「其れは楽しそうです。」

「今度宴があるときは誘ってくださいね。」

「ええ、喜んで。」

「ところでさ？」

「どうしました？」

「何で攻撃してきたし。」

「ああ、どれだけ成長したか見ようと思ってね。」

「どこの神出鬼没のキーキャラだよ！」

「まあ、良いとしましょう。」

「そんなことよりも攻撃してきたということは敵意があると見ていいですね。」

「それはもちろん。」

「良いですよ。」

「それでは、私も参戦させていただきませんか。」

「お、アリス以来だな。」

「休息は足りてるか？」

「まだ三時間もたっていませんが良いでしょう。どちらにしろ、私たちに無限の体力があります。問題ないでしょう。」

「OK」

「それでは、行きますよ。」

「お願いだからすぐにくたばらないでね。」

「大丈夫ですよ。」

「で、どっちがどっちやります？」

「お前は咲夜を頼む。俺はあいつが苦手だ。」

「了解しました。レミリアさんは任せますね。」

「無論そのつもりだ。」

「そっちは決まったかしら？」

「ん？ ああ、待っていてくれたのか？ いつでも大丈夫だ。」

「では、行きますよ。」

「かかってくるな！」

「先手必勝よ！」

「はい！」

「ルーク！」

「貴方の方が弾幕慣れしているんですね。」

まあ、軽く七千年は生きてますから。

「とてもそうとは見えませんね。」

まあ、声と見た目がこれじゃあ。

「無駄話は此処までよ！」

「あなたの相手は俺だ。」

おや、サイドからシヨルダーですか。

「！ 吸血鬼である私が血を流すとはね。」

「前回の戦闘でも普通に出血してただろ。」

「・・・それもそうね。」

さてと、ビシヨップ！

「！ 結構な密度の火炎弾ね。」

あらら、かき消されましたか。

「なっ！」

！ 時間、止めましたね。

「もちろん。」

「急に後ろとは、予想外だ。ヘルズファンゲ！」

ヘルズファンゲ

腕にエネルギーをまとって殴る。

そこから追い打ちできる。

「甘いわね。吸血鬼の怪力は知ってるでしょ？」

「そんなん分かってるさ。」

「！」

「おらよ！」

「がっ！」

「流石に折れちゃいねえよ。首の骨は折れたら死ぬからな。」

これはうまいですねっと、ポーン！

「よそ見してもこの実力、伊達に七千年生きていないわね。」

其れはどうも。

にしても、彼もそれなりに工夫していますね。

相手にとって初見の技をあえてフェイントに使うとは。

「お嬢様も負けていませんよ。」

「私たちも従者同士としてどちらが優秀か。」

「私は従者じゃありませんよ。」

「あら？ そうなんですか？ 奇術「ミスディレクション」！」

「ナイフは無駄ですよ。」

「弾幕だったらどうでしょう？」

「其れは、こうするまでです。ビショップ！」

「ボム？」

「まあ、その一種です。」

「なかなか楽しいわね！」

「おや、流れ弾ですか。」

「喰らうが良い！」

「そこ！」

「！ 弾かれてからの、下段！」

「うあ！ 切り返す！」

「上段だと！」

「ずいぶん速い球だったけど、あんなサイボーグみたいなのでどんな攻撃を？」

「教えませんよ。終わるまでは。」

「それはそうね。」

「さて、こっちも再開しますか。」

「そうね。」

「ビショップ！ ルーク！ クワトロ！」

「塔と魔道士が四体ずつ！」

「トリックをお願いします！」

「時間の前には無意味よ！」

「だったら、これでどうです？ ステルス！」

「見えない……」

「フレイル！」

「熱っ！」

「どうです？ ビショップの火炎弾のエネルギーをルークのレーザーに加えました。」

「なんか、いろいろ出来るのね。」

「我ながら便利で仕方がありません。」

「マグナティックホイール！」

「高速回転！」

「ただの高速回転だと思ふなよ！」

「……！ 引き寄せられてる！」

「お嬢様！」

「行かせませんよ。ルークウォール！」

「壁！」

「発射！」

「！ ザ・ワールド！」

「注意して下さい！」

「了解！」

「何！？」

「甘え！」

「ハッ！ お嬢様危ない！」

「咲夜！？ あれ？」

「道仕打ちとは皮肉な。」

「……これで良いのか？」

「さあ？ ただ言えるのは紅霧異変の時よりも確実に強いのですが、終わってしまったがゆえにどっか抜けたんでしよう。」

「単なる平和ボケ？」

「そう言うことですね。」

「カリスマもくそもねえな。」

「従者が主人をナイフで仙人掌にするとはい。まあ、一応避け切れてる」

みたいですけど。

「危ないじゃないの咲夜。」

「申し訳ございません。」

「さてと、とりあえず一か所に集まっているから……」

おやおや、えげつないことを。

「ジエネシク・エメラルド・ティガ　・バスター！」

ジエネシクエメラルドティガバスター

磁力で相手をひきつけて、真上に投げた後に空中で捕まえて地面にたたきつける技。

「しまった！」

「全く、何をしているのよ。」

これは決まりですね。

「食らええい！」

とりあえず私たちの勝ちで良いですか？

「ええ。流石にアレを喰らってから戦おうなんて思わないわ。」

それでは、先に進ませていただきます。とりあえず薬だけは置いていきますね。

「有難うございます。」

それでは。

「後は任せな。」

【第参拾話】昨日の敵は今日も敵（後書き）

なんとなく出したかっただけです。

次回はあの庭師です。

それでは

【第参拾巻話】 刀を振り回す庭師（前書き）

今回は、二刀流のあの方です。
どろどろ

【第参拾壹話】 刀を振り回す庭師

「乱入者も蹴散らしたことだし、さつさと白玉楼に行くぞ！」
随分とやる気ですね。

「さつさと終わらせて、家を探さないといけないことを思い出した。」
「
特にあってもなくてもいいんですけどね。」

「個人的にほしい。」

元人間だからでしょうね。

「ま、そう言うことだ。」

それでは、急ぎましょう。

「応。」

つてことで、エアレイドの速度を上げて急ぎで白玉楼に向かいます。

「おはよー。」

！ ストップ！

「どした!？」

リリーホワイトさんがお目覚めです。

「あそつ。」

だから、止まってください。

「なんだ!」

少々待ってください。

「はあ。」

流石にこの速度のままでもリリーホワイトさんが起きてはだめです。

「なんで?」

落ちたらどうするんですか?

「・・・なるほど。」

「おはよー。」

はい、おはようございます。

「もう、おわった?」

もう少し待っていてください。もうすぐ白玉楼なので、そこでもとを断ってしまえば終わりです。

「わあった。」

「ってなわけで、喋っている間に何か屋敷に付いた。」

「おや、もう着きましたか。」

「思った以上に近かったな。レミリアたちの乱入が無ければもっと早く付けただろう。」

「でしょうね。」

「さて、さっさと終わらせましょう。」

「はいよ！」

「！ 気付かれていましたか。」

「気配ダダ漏れだぜ？」

「もつと精進しないと。」

反省するのは良いのですが、貴方が今回の実行犯ですか？

「教える義理はない！ 私の名は魂魄妖夢！」

「白玉楼の庭師なり！」

「魂魄・・・実行犯だな。」

「では、行きましょう。」

「椿折！」

椿折つばせ

空中で刀を下に振り下ろす。

「重い！」

全く、いきなり私の体に手を突っ込んだと思ったら大刀を取り出すとは。

「悪い悪い。でも、大して問題ないだろ？」

「そうですが、せめて言うてくださいよ。私の時空穴は私しか制御できないんですから。」

「その割には、必要なものが出てきたな。」

片付いてない武器庫でしたから。

「下手したらハンマーとかだったってわけね。」
「其れでもいいでしょう。」

「無駄話はそこまでです！」

「地上戦か、良いだろう。」

「いざ、尋常に！」

「しゃべっている暇ねえぞ！」

おや、柄で溝を殴るとは。

「カハツ！ うう、まだまだ！」

人符「現世漸」！」

「靈力を込めた漸撃か、こくうじん虚空陣！」

「食らえ！」

かかりましたね。

ゆきかぜ「雪風！」

こくうじんゆきかぜ虚空陣雪風

カウンターで切りつける。

「？ ハッターか！」

「……」

「食らえ！ ・・グハツ！ ハアハア、何をした！」

「ただのカウンターだろ。気付かないお前が未熟なだけだ。」

「そのくらい、理解している！」

何か、橙さんのときみたいですね。

でも、今回は相手が違いますよ。

「剣伎「桜花閃々」！」

「速い！」

これが見えないとは、貴方もまだまだ未熟ですよ。

「何千年も生きているお前と一緒にするな！」

「そこ！」

「ガハツ！」

「貴方もまだまだですよ。」

「妖怪になつてまだ半年もたつてねえんだよ！」

「そうなんですか？」

ええ、実年齢は其れなりの年なんですけど、その身体に入ってからはまだ半年もたつていないのです。

「それなのに異変解決に出向くとは、己の実力を知れ！」

「よつと。」

「ほう、力が乗る前にあたりに来て、切れなくすると。」

彼の過去は恐ろしいですよ。正直よく知りませんが。

「どんな人生を歩もうと、今の体が使えなければ意味が無い！」
成程。

「？」

「誰がつかえてないって？」

水平切りを、首を外して避けるとは。

「ほらよ！」

投げつけた！？

「痛！」

「トリッキーな体は好きだぜ。ま、其れもこれも俺がトリックキヤラばつか使ったからだけどな。」

身体をそり返した構えですか。

「気持ち悪！」

「うつせえ！ あ、大刀返すわ。」

あ、はい。

「さてと、改めてかかってきな。」

「・・・なめないでください！」

両手で、交差切りですか。

「バクステ！」

本当は前ですけどね。

「避けられた！」

「喰らえ！」

腰より下を高速回転させて、攻撃ですか。

「グッ！」

刀二本で受け切れますかね。

「折れちまいな！」

「受けませんよ。」

「ガッ！」

弾きましたか。流石と言うべきですね。

「だったら、これだ！」

あの体勢から後ろに猛ダツシュとは。

「何をしたいか知らないが、そんなのが通るとでも思っているのか！」

下段に水平ですか。

「かかったな！」

そこからジャンプできるんですか！？

「何！？」

「捕獲完了！」

脚で、頭をつかんで？

「おらよ！」

「えっ！」

バク転して、叩きつけるとは。

「っしや！」

「なかなか、やりますね。」

工夫だけは色々考えていますからね。

「なるほど。どんなものも工夫次第と。」

そう言うことですね。

「では、私も工夫しますか。」

「左手を逆手に？」

「行きます！」

「ばーか。」

「イタツ！」

「ハッ！」

左に避けて足をふみ、肩を入れると。

「碎ける！」

踏んでいるがために、その場で倒れ、そこにエルボードロップですか。

「ガハッ！」

流石に吐血まではいかないですか。

「リアルグロッキーはちよつとまずいからね。」

「うう。」

あら、気絶しちゃいましたね。

「なかなか丈夫な人間だったな。」

半分だけですけどね。

「半分？」

彼女は、半分人間で半分幽霊なんですよ。

その証拠に、彼女の周囲には常に半霊と呼ばれる半分の霊体があります。

「ああ、この人魂みたいなやつね。」

そうそう。

「ま、とりあえず倒したつぱいから奥に行くぞ。」

ええ、そうしましょう。

その後、妖夢さんは放置されました。

何故かというと、今までで一番丈夫だったからです。

【第参拾壹話】 刀を振り回す庭師（後書き）

次回は、とりあえず大ボスです。
それでは

【第参拾弍話】 死を呼ぶ亡霊（前書き）

今回は妖々夢編の大詰めです。
どうぞ

【第参拾弍話】 死を呼ぶ亡霊

「ズエイ！」

屋敷内に入って、襲いかかってくる霊をバツタバツタとなぎ倒しています。

「この程度で止められると思ってんのか！」

霊相手に何を言っているのか。

「そおい！」

そろそろ奥についてもいい頃ですね。

思いつきり突っ込んでください。

「応！ フタエノキワミアツー！」

いやいや、其れはない。

「おらあ！」

木材が碎ける音とともに突き破ると。

「ふう、まだ満開じゃないけど、御花見には十分ね。」

「あんたが西行寺か？」

「あら、私を知ってるの？」

「いや、お前自身は知らないが、あんたの一族の名字は知っている。」

「なるほどね。だから、私を西行寺と。」

でも、名字が変わるとか考えなかつたの？」

「ばーか、今の世の中、妻の方の姓を名乗ることくらいできる。」

そして、異変を起こしてきた人間が、なにも干渉していない奴の姓を名乗るのではないと考えた。」

「よくわかんないけどまあ、止めに来たわけね。」

「そう言うことだ。」

私の存在忘れていませんか？

「悪い出番なくしちまつたな。」

とりあえず自己紹介をさせていただきます。

彼はキトリ、私はルアートと申します。以後、お見知りおきを。

「そう、それじゃあ私も自己紹介ね。」

私は西行寺幽々子。今回の犯人よ。」

「自分で犯人言うか？」

ま、良いでしょう。単刀直入に春を解放して頂けませんか？

「表現がそれであっているかわからんが、とりあえず異変を何とかしろ。」

「そうね。この世界のことだから分かっていると思うけど、私に勝つたらね。」

「上等！」

では、どうぞ。」

「相手は亡霊だったな。だったら、御札だな。」
「ちよ、また私の体を漁って。」

「良いじゃねえか、便利なんだし。」
「はあ。」

「お、これが。」

「余裕はないわよ！」

避け切れますよね。」

「勿論！」

流石ですね。」

「あらら、意外と慣れてるわね。結構高密度にしたつもりなんだけど。」

「まだまだあめえんだよ！」

懐に入りましたね。

「食らえ！」

貼りきれましたね。

ですが……

「貴方ねえ、霊なら札はつてりゃ良いってモノじゃないのよ？」

「そういうものなのか？」

こっちでは札が聞く方は弱い方なんですよ？　ちなみに彼女は霊の

中ではかなり上級な方です。

「なるほどね。」

「油断大敵よ！」

「グフオア！」

気を抜かないでくださいよ。

「ああ、悪い。」

「……なん……」

「はあ？」

「何で死なないのかしら？　私の能力はちゃんと死を操る能力とし

て発動しているはず。

なのに、何で死なないの？」

「お前の能力危ねえなおい！」

えっとですね。この人形事態は生命をもっていないんですよ。

「マジで？」

マジです。で、その中に魂とその魂に対応したエネルギーが憑依して操っているんです。

「え、俺そんな気ないぞ？」

生きている人間も同じですよ。

脳に意志があり、その意思が電気信号で身体に指令を出す。

其れがその人形の場合、脳の代わりにエネルギーが、意志の代わりに魂があるんです。

他には、エネルギーが無くなると完全に動かなくなるんですね。しかもDNAだの何だのと複雑なんですよ。

「意志も魂もかわらないだろ。」

まあ、大きな違いはないです。

「なるほどね。つまり行ける屍と。」

ま、そんなところです。

「そう、じゃあ私の能力は無意味ね。」

「しゃべってないでやるぞ！」

「あらあら。」

私は知りませんからね。

「インフェルノディバイダー！」

「隙だらけね。」

「ラピッドキャンセル！」

ラピッドキャンセル

動きを強制的に中断し他の動きをする。

「なっ！」

「踵落とし！」

「クッ！」

肩の筋肉に直撃ですね。

「プラスマー！」

久々の高速レーザーです。

「グッ！」

「なんだなんだ、周りに任せるだけで自分は何もできねえのか？」

「.....」

挑発はほどほどにしてくださいね？

「はいよ。」

「あまり甘く見ない方がいいわよ？ 死符「ギヤストドリーム」！」

「ドリームキャスト！？」

違いますよ。

「蝶型か。今さらだが色々とその好みがあるな。」

「軽々と！」

ホラ、さっきので怒っちゃいましたよ。

「斬神！」

「あらら？」

受け身技ですね。

「チツ」「反魂蝶」！

「まずい！」

地中に逃げますか。

「無駄よ！」

弾幕を応用したゲイザーですか。

「あつぶね！ 地中に弾幕って打てるのか。」

まあ、応用です。

「まったく、弾幕ほど便利な飛び道具はないな。」

どうでしょうね？

「ハア・ハア・ハア……」

「なるほど。」

そう言うことです。弾幕とは自身の霊力や妖力などを放つものから結構な体力の消費があるんです。

「流石に運動不足は聞くわね。」

そろそろ決めさせてもらうわ！ 楼符「センスオブチェリーブロッ

サム」！

「何だ！？」

喰らってはいけませんよ！

「壊れかねないということか！」

「逃がさないわよ！」

「クッ！」

ギリグレイズですね。

「千魂冥烙！」

千魂冥烙

ウロボロスで巨大な蛇を作る。

「なっ！」

「これで終わりだ！」

「さてと、さっさと元に戻せ。」

「……」

まあまあ、さっき起きたばっかなのですからお静かに。

「……もう終わっているわ。」

「はあ？」

「もう終わっているの。西行妖の満開で何を封印しているのか見たかったけどさっきの戦闘で、貴方の技があたっちゃってね。」

全部の花が散っちゃったわ。」

「終わりってことは……よし、帰るぞ。」

間をおいてそれはないですよ。」

「知らん。」

ま、これで終わりなそれを信じましょう。

それでは幽々子さん、またお会いしましょう。

「ええ。」

【第参拾弐話】 死を呼ぶ亡霊（後書き）

何か、あっけない終わり方でした。

次回はどうしましょう？

それでは

【第参拾参話】終わった・・・・・・・・・・と思った？（前書き）

タイトルから御察してください。

どうぞ

【第参拾参話】終わった・・・・・・・・・・と思った？

「おわったなあ。」

終わりましたね。

「さて、何をする？」

住居を探すのでは？

「そうだったな。」

さて、状況説明です。

西行妖の件が終わったのでとりあえず、魔法の森で森林浴をします。

「そんじゃ、とりあえず人里でも探すか。」

止めておきましょう。あそこはかなり人が多く貴方の大嫌いな女性もいますよ。

「・・・・・・・・だな。」

では、この辺で空き場所を探しましょう。

「あるか？」

有るというよりも全体的に空いてますよ。

「でもなあ、木が邪魔でまともな場所ないぞ？」

では、どんなところが良いんです？

「そうだなあ、やっぱり草原か海みたいな広々としたところが良いな。幻想郷に海はありませんよ。」

「マジで？」

川はありますがね。

「じゃあ、その川はどこに行くんだよ？」
「知りませんよ。」

「知らないってお前なあ。」

でも、草原ならありますよ。

「ああ、鈴蘭畑の近くね。」

そう言うことです。

「でもまあ、前は諦めたけど、やっぱり安住の地はほしいわけだ。」
元人間だからですか？

「そう言う事。さて、とりあえず。」

！ 何をするんですか！？

「少々木材をな。」

ああ。

「そんじゃ、お前持て。」

はい？

「俺も一応持つからお前も持て。」

はあ。

「こんなところだろ。」

はい、先ほど言った草原である。太陽の畑のはずれに来ました。

「何で奥じゃダメなんだ？」

この奥にはものすごい実力の妖怪がいます。

「なるほど。」

ま、敵になる可能性が大きいですけど。

「あそう。」

さてと・・・あれ？

「ん？ どした？」

アレって、幽霊ですよ。

「そうだけど、其れがどうした？」

幽霊は普通は冥界にいるものなんですよ。

「そうなのか？」

ええ、そして外に出るためには相当な力で境界を破壊するか抜ける
かしないとイケないんですよ。

「ふむふむ。」

そしてあの幽霊にはそれほどの力はない。

「と、なると？」

冥界にて何かしらの不具合が起きているということですよ。

「それが？」

行きますよね？

「……勿論！」

「さて、冥界についたわけで。」

とりあえず白玉楼ですね。

「またあ？」

またです。

「おい、妖夢か幽々子いるか？」

なんだかんだで普通に接するんですね。

「一応ね。」

「あ、どうも。」

「いるわよ。」

「……」

どうしました？

「いや、異変が終わっちまったら何か丸くなったなあと思ってな。」
そうですか。

「で、どういったご用で？」

えっとですね、冥界の結界が壊れているのですが、修復の方はどうなってるんですか？

「ああ、結界の方ね。結界は紫に任せているけど、彼女のことだから、寒くてやりたくないなんてダダこねてるんでしょう。」

紫さんって、あの八雲の？

「そうそう、あの八雲の。」

「何なんだ、八雲の紫って。」

えっとですね、八雲とはこの幻想郷の生みの親です。

「ちよっ、すげえな。」

でも、あの方の居場所を私は知りませんよ。

しかも八雲の存在自体は知っていても、下の名前が紫と言うのは初耳ですよ。

「そうなの？ 苗字は有名なのに下の名前は知られていないのね。」

「俺を忘れていないか？」

おっと、失礼しました。

「とりあえず、その紫ってやつのもとに乗り込んでぶっ潰せばいいんだろ？」

「そうなりますけど……」

「マヨヒガには簡単には入れないわよ？」

「マヨヒガ？」

「ええ、マヨヒガは、幻想郷でもかなり特殊でね、彼女が境界を開けない限り入れないのよ。」

つまり、紫さんを説得するか、強引に入るしかないんですね。

「なるほど。、だったら話は早い。さっさと行こうぜ。多分適当でも付くだろうし。」

「そう簡単には……」

「つくわよ。」

着くんですか。

「そんじゃあな、情報提供感謝する。」

「じゃあね〜。」

「私ほとんどしゃべってないorz」

「あらあら。」

「ズエア！」

ただ単に無鉄砲に進んでも何も有りませんか？

「流石の俺もそこまで馬鹿じゃない。」

はい？

「敵が多いところを探して進んでいる。」

そうだったんですか？

「気付け馬鹿。」

貴方ほど馬鹿じゃないです。

「まあいい。ほれ、ボスが見えたぜ。」

・・・こういうもんなんですかねえ？

「おいその狐！」

「？ 私か？」

「お前意外何処に狐がいんだよ。」

全く、挑発的なものいいですね。

「お前、少し口のきき方に気をつけたほうが良いぞ。」

「誰が敵に口のきき方に気をつけるか。」

「それもまあ、正論だな。」

「此処の境界が開けばマヨヒガだろ？ 紫ってやつに用がある通さ

せてもらうぞ。」

はあ。

「何の用かは知らないが、そのもの言い、何をたくらんでいるかわ

からんな。」

「やるか？」

「良いだろう。」

もう、私は知りませんよ。

「勝手にしろ。」

「私の名は八雲藍、紫様には指一本触れさせない！」

「俺はキトリ、推して参る！」

・
・
・
アレ?
?

【第参拾参話】終わった・・・・・・・・・・と思った？（後書き）

次回は八雲の九尾との戦闘です。
それでは

【第参拾四話】初の中の再（前書き）

今回は、前回出てきた藍様との戦闘です。
ぜひ

【第参拾四話】初の中の再

えーはい、今私たちは八雲家の藍さんと戦闘を開始するところです。

「そつちは二人か。なら、こちらも二人で行かせてもらっぞ。」

「実際戦うのは俺一人だが、まあ良いだろう。」

「行くぞ、橙。」

「はい！ あ、この前戦った奴だ！」

「そうなのか？」

「ち、橙だと！？ 良わー、面倒だしルアート、お前もやれ。」

はい？

「正直あのレヴェル二人はだるい。だからやれ。」

はあ。

「そんな嫌な顔すんなよ。俺だつて、正直戦いたくないからな。」

分かりましたよ。でも、私の方に近づけないでくださいよ。

「分かっている。その代わりお前も近寄らせるな。」

了解です。

「そつちの考えはまとまったか？」

「今度は負けないよー！」

「／／」

「……」

……何でしょう、この光景。

「藍がロリコンってことでよくね？」

ですね。

出血多量で死にそうな量の鼻血出していますし。

「はっ！ いかんいかん。さあ橙、私はあつちのでかいをやるか

ら橙はあつちの小さい方をやってくれ。」

「了解です！」

「さあ！ 行くぞ！」

「かかって来い！」

私は離れさせていただきますよ。

「了解。ウロボロス！」

「なんだ！」

あえての寸止めですか。

「さてと……」

そして、回収で近づくと。

「切り裂け！ バーサーカーバレッジ！」

爪を伸ばして切り刻むと。

「解説している暇ないよ！」

おっと、クイーン！

「えっ！」

ふむ、下がりますか。ですが、無意味ですよ。

クイーン！ 思いつきり暴れまわってください！

「……開いた！」

「ハハハハハ！」

「速い！！」

おや、グレイズですか。

ですが、まだまだ。

「ハハハハハ！」

「うわ！」

大丈夫ですよ。最近砥いでいませんから、ものすごい打撃程度です。

「ちつくしよう！」

何処まで行きま、！

「橙になんてことするのさ。」

だったら呼ばなきゃよかったものを。

「お前の相手は俺だろ！ スレッジ！」

「ふん！」

「受け切りやがった、だがその判断は間違ってるぞ。」

「！ 足払い！」

「ガジェットフィンガー！」

ガジェットフィンガー
ダウンしている相手を強制的に起こす。
その際にスレッジハンマー、マグナティックホイール、ジエネシツクエメラルドテイガーバスター、キングオブテイガーなどの技で相手を引き寄せ磁力を布石する。

「？」

「これは決まりコンボだろ。」

「しまった！」

「ジエネシツク！」

「クツ！」

「エメラルド！」

「誰が捕まるか！」

空中で立て直して避けますか。

「それ！」

ナイト。

「フギヤ！」

「無駄だ！」

「！ 吸い込まれる！」

「捕まえたぞ！ テイガ！」

「クソ！」

「バスター！」

「ガハッ！」

「藍しゃま！」

行かせませんよ！ ルークウォール！

「！」

発射！

「うぐっ！」

ま、貴方ほどの若さではこの程度でしょうか？

「橙！ おのれ〜！ よくも橙を！」

「だから呼ばない方がいいって言ったんだ。」
「全くです。」

「よう、お疲れ。」

「お疲れ様です。後は貴方に任せていいですよね？」

「応、任せろ。」

では。

「せっかく有利に立ったのに一人でやるのか？」

「頭に血の昇った狐など、俺一人で十分だ。」

「言ってくれるな！」

彼の言うとおりですね。

「頭に血が上つてりゃあ、どんなに高密度でも穴ができる。」
「その穴を見つけてくぐると。」

「おら！」

「グッ！」

鳩尾に一発。

「ほらよ！」

そして、延髄に肘おろし。

「おらよ！」

そしてドロップ。

「ガハッ！」

「ほらほら、頭冷やせや！」

えげつないですね。

「知るか。」

「ググ、そう簡単に負けるか！」

「おわっ！」

「そりゃ、ずっと乗ってれば振り落とされますよ。」

「だな。」

「幻神「飯綱権現降臨」！」

「おや、初スペルがこんな大技と。」

「良いのか？」

正直そこまで細かなルールはありませんから。

「あ、そう。」

それでは、頼みますね。

「はいよ。よっ、ほっ、おっと。」

人形の体を生かしますね。普通の人間なら絶対に曲がらない方向への関節やその他いろいろと。

「そこだ！」

後ろ向きの状態から踵で腹を蹴ると。

「うっ、がは。」

あれ？

「頭に血が上ってたんだ。多少急所に入っただけでも軽く気絶する。」
「そういうものなんですか。」

「そう言うものだ。」

橙さんは、式だから元の紙切れに戻って・・・ってあれ？ 藍さんもない。

「ああ、あいつならさっき煙にまぎれて何処か行ったぞ。」

え、ちよつとそれってどういうことですか？

「あいつも誰かの式ってことだ。」
「そうですか。」

【第参拾四話】初の中の再（後書き）

なんとなく再登場の方がいました。

「ありがとう！」

はい、来ないでください。

「ちよつ、m！」

はい、次回は大本です。

それでは

【第参拾伍話】空間の隙間を操りし者（前書き）

今回は、妖々夢編最終回です。
どうぞ

【第参拾伍話】空間の隙間を操りし者

「そおおい！」

とりあえず藍さん達を倒した後に屋敷内を轟音とともに進んでいきます。

「此処かああ！」

と、一つのふすまを突き破ろうとすると。

「あば！」

何かしらの結界のような壁がにぶつかりました。

「何なんだこれは？」

結界ですね。

「そのくらいわかるわ。何でその結界が此処に張られているんだと聞いている。」

そんなの当たり前じゃないですか。

「は？」

此処に何かがあるからですよ。

「成程ね。で、これを壊すには？」

これですね。

「やっぱ御札か。」

そう言うことです。

「そんじゃ、さっさと突破しようぜ。」

そうですね。

「……できましたよ。」

「よし、そんじゃ入るか。」

注意はしてくださいね。

「応。」

そうして結界を破壊して、そのまま進むと。

「……」

……

「ああるええ〜？」

おかしいです。非常に滑稽な光景です。

「何なんだこいつは？」

爆睡しています。あれだけ轟音を出したにもかかわらず爆睡しています。

「……起こすべきか？」

恐らく彼女が紫さんでしょう。起こして下さい。

「はいよ。バインドボイス！」

バインドボイス

ものすごい大声。

……

「……起きねえぞ？」

……仕方がありませんね。

「どうすんだ？」

私が起こします。

「あそう。」

ハアアア……セイ！

「グフォア！」

「うわあ、鳩尾に一発かよww」

一応起きましたね、ってあれ？ いない？

「布団の下に潜るように落ちたぞ。」

成程、流石は一昔前に神隠しの八雲と呼ばれるだけあって空間に隙間を開いてその場から逃げますか。

「誰が逃げたつて？」

おや、いましたか。しかもしっかりと着替えていらっしやる。

「それよりも、何よ神隠しの八雲つて？」

いえ、貴女の三つほど先代がそう呼ばれていましたよ。

悪戯好きで色々な物を隙間に落として手に入れたとか。確か名前は

八雲薄紫さんでしたっけ？

「さあ？ 先代に興味はないから。そんなことより何の用？ 寒いから寝てたいんだけど？」

「冥界の結界が壊れて、幽霊が流出しているからさっさと直せ。」

「ああ、アレね。あれは幽々子が勝手にやったことだから私は関係ないわよ？」

「橙が関わっていたが？」

「ギクツ！」

図星のようですね。

さて、さっさと直してください。

「お断りね。できなくもないけど、冬場は動きたくないの。だからせめて春まで待つてくれない？」

「もうとっくに春だぞ？」

「そんなことないわよ。おとといまであんなに寒かったじゃない。」

「アレは、幽々子が春を集めてたからだ。春が解放された今は外は温かいぞ？」

「んー。」

さて、さっさと直してください。

「ZZZ。」

「駄目だこりゃ。」
ですね。

「戦闘開始！」

「インフェルノディバイダー！」

「駄目ね。」

「チイ！ ちよこまかと！」

彼はいつも通りの戦闘。紫さんは隙間を使って翻弄して戦っています。

「こっちよー！」

「オプティックブラスト！」

首を回転させながらレーザーですか。

「まずい！」

「あめえよ！」

オプティックブラストは反射するレーザーですからね。

「オラオラオラオラオラ！」

首を回転させながら無駄に暴れると。

これでどう反射するかは分かりませんね。

「甘いのはそっちね。ここよ。」

「ぐふお！」

成程、確かに足元はレーザーの死角でしたね。

「触れるな！ ガンマウェーブ！」

「うふふ。」

流石に隙間は厄介ですね。どんな攻撃もその場にいなければ当たらない。

「だったら。」

おや、動かない。それどころか目も瞑っている。

「そんなことをしたところで無駄ね。」

「虚空陣・・・」

「あら？」

「雪風！」

やりますね、雪風のスピードはほぼ相手が止まっているに等しい状態。

相手が動かないのであれば攻撃は当たる。

「クツ！」

「！ 標識だと？」

「ただ逃げ隠れするためのものじゃないわよ？」

「あつそ、だけどたかが標識。」

おや？

「切られた！」

「おらよ！」

・・・ああ、腕を高速振動させることで熱を生みましたか。ですが、それで標識を焼き切るとは、人形ならではですね。

「ほらよ！」

引きずり出しましたか。

「よっこいしよつと。」

「何だつてんだ！」

投げた先に隙間ですか。隙間を何とかしないとまずいですね。

「だな。とりあえず能力を封じる手段が俺にはない。その状況でどうするかだ。」

簡単ですよ。

「？」

隙間の中に攻撃を入れればいいんですうよ。

「成程、だが隙間の中は恐らく無限空間だ。上限が無い状況で攻撃を入れても何の意味もないぞ。」

だったら、彼女をホーミングする攻撃を隙間に入れればいいんですよ。

「ああ。そんじゃ、やるか。」

どうぞ。

「突破口は見つかったかしら？」

「ああ、とっておきの方法がな。その眠気も覚ましてやるよ。」
「どういった技が出るか楽しみですね。」

「だったら早くしてくれない？」

「おうよ。キラー！」

キラー

追尾ミサイル。

「その程度で何ができるの？」

自分の眼前に隙間を開いたと。

「おらよー！」

「なっ！」

自分の前に隙間があることで身を隠したと。

「確かに良い考えね。でも、それじゃあどっちにしる無理ね。」
「ですが、これでは彼の攻撃は両方とも当たらない。」

「私が入ったら意味ないじゃない。」

「フツ。」

キラーが隙間に入って、そして紫さんも隙間に。

「キヤー！」

「ほれ来た。」

隙間の中でひたすら追い掛けられていますね。

「何これー！」

「お、隙間から出てきたな。」

「どこにいても同じじゃないのよー！」

そろそろ決めてはどうです？ 彼女の体力じゃ、そろそろ逃げ続けるのも限界でしょうに。

「確かに、時速何キロにしたっけ？」

「知りませんよ。」

「えっと、確か時速参百キロだったっけ？」

「それは辛い。」

「そんじゃ、決めてやるか。ハア・・魔人拳！」

魔人拳

腕に魔力や妖力をまとって思いつきり殴る。

「ボディブローー！」

「グッ！」

終わりましたね。色々な意味で。

「どういふことどうおあああ！」

キラーがお二人に当たって爆発です。

「・・・」

さて紫さん、もう起きてますよね。

「あら、気付いてた？」

結構長生きですから。

「私よりも？」

ええ。

そんなことよりも、勝負は彼の勝ちです。結界の修復を今すぐお願いします。

「あれだけ動けば眠気も覚めるわ。すぐにやってあげる。」
有難うございます。それでは、私たちはこれで。

「ええ、それじゃあね。」

【第参拾伍話】空間の隙間を操りし者（後書き）

はい、ゆかりんこと八雲紫を撃破しました。

これで、妖々夢編終了です。

次回はどうしましょうかな？

それでは

【第三十六話】 記憶の奥底・・・（前書き）

異変が終了いたしましたので三十六とさせていただきます。
今回は色々と大事な部分です。
どうぞ

【第三十六話】 記憶の奥底・・・

「えっと、これは此処に合ってこっちがこれで。」

はいどうも。今私たちは太陽の畑の外れで建築中です。

「お前も手伝え。」

面倒なので嫌です。

「お前の家でもあるんだぞ？」

知りませんよ。正直私は家を必要としてませんしね。

「あ、そうだったらお前家に入れねえから。」

かまいませんよ。その代わり貴方の情報網が一気に無くなりますよ。

「チツ・・・」

まあ、そう機嫌を悪くしないでくださいよ。まあ、それはさておき閑話休題一つお聞きしてよろしいでしょうか？

「何だ？」

なぜ女嫌いなんですか？

「女嫌いじゃねえ、他人嫌いだ。」

はい？

「俺は自分自身しか信じちゃいねえんだよ。」

成程。ですが、何故私と行動を共に？

「お前が付いて来ているだけだ。そしてさらについてとして俺が異変解決に行く理由はただの暇つぶしだ。」

・・・そうですか。では、次はその理由を説明させていただきますましようか。

「何だと？」

まあまあ、よろしいじゃありませんか減るもんじゃありませんし。

「他人に話すようなものじゃない。」

私はこれからも行動を共にするということで一応知っておきたいだけですよ。

「あまり詳しく覚えてない。」

かまいませんよ。最初からそこまで追及はしませんから。

「そうか。じゃあ、手伝え。」

「……ま、いいでしょう。」

「良いんかい。」

ま、お気になさらず。

数時間後。

「やっと終わった。」

お疲れ様です。

「お前ほとんど何もしてないな。」

やりましたよ。鑢やすりがけとか鉋かんながけとか。

「あつそ。」

そんなことよりも早く聞かせて下さい。

「……まあ、手伝ってもらったんだ。一応話たる。

当たり前だが、これは俺がまだ人間だった時の話だ。

俺はまあ、普通の何処にでもいるような学生だったんだ。

当たり前のように学校に行き当たり前のように勉強をして当たり前のように同じような毎日を過ごしていた。

俺が他人を嫌いになったのはいつ頃だったかな？

理由もよく覚えていない。

だが、ただ一つ言えることは普通じゃない部分が一つだけあったんだ。」

普通じゃない部分とは？

「ああ、悪い。相槌は無しで頼む。」

？ まあ、良いでしょう。」

俺は毎日毎日同じように過ごしていた。其れはもうあきるほどに。其れだけなら良かった。それだけなら……

何の理由もなく普通に過ごしていた。でも、唯一違ったことは、誰一人として俺の周りに人はいなかった。いないだけでもまだよかった。ただ単にこっちから話に行っていないだけだと思った。

ただどな、いなかったんじゃない。来なかったんだ。

これが分かったのは、試しに話していることを聞いてその内容に入ってみたらな。

「……」 の話か？

「……いや、別に。そと行こうぜ。」

「おう。」

「久々に でもやろうぜ。」

「お、良いね。」

「……」

この時やっと気付いた。いや、再確認したんだ。俺が避けられてるってな。

再確認してからだ。更に他人を嫌いになったのは。

ドンッ！

「あ、悪い。」

「！ 触んなよ！ キモイのが伝染るだろ！」

「は？」

「ったく、これだから嫌なんだよ は！」

「ったく、俺が何をしたし。初対面であれはないだろ。」

「さつき に触っちゃってさ……」

「嘘！？ だったら早く保健室で消毒してもらわないと！」

「……」

俺は自分自身良い顔をしているとは思っていなかった。

自分が他人よりも劣勢だったことも自覚していた。

だからどんなに酷い対応をされても特に考えてはいなかった。其れが普通だとも思った。

そこからかな？ 家に引きこもってゲームやらパソコンやらを始めたのは。

「相手が見えない方がいいな。ん？」

「お前 だろひきこもってるとか御似合いだなwwwそのまま永久に家にいなwww」

「か此処はなり済みましたな。えっと、「どなたですか？ 人

違いであつてもこの言葉遣いは通報しますよ。」つと。」

「あれ？ 違う方でした？ ごめんなさい。」

「ちよろいもんだ。「いえいえ、良いですよ」つと。」

はじめてすぐだ。ネット上で別人を演じてきたのは。

でも転機が起きた・・・と、思ったただけだった。

「はじめまして。私 と言います。」

「ん？ ああ、俺は だ。よそしく。」

ほいで、進学したての時は大人になれば誰でも平等に接することができるんだと思っていた。

でも、それは単なる勘違いだったんだ。

「あ、どうも。」

「ん？ 応。」

暫く同じクラスにいればだれでも親しくなれるものだ。

だが、誰も俺と親しくなる人間はいなかった。

それどころか元に戻っただけだ。

「うわあゝ、 の隣の席だよ。」

「変な病気が感染しないように気を付けなよ。」

「分かってるつて。」

そこからさ本気で他人を避け始めたのは閻魔には親に負担をかけないとか言われたが、本当の理由は親すら信じれなくなったから一人暮らしを始めた。

流石に社会に出れば人間は変わると思っていた。
でも、やっぱり変わらなかつた。

「これやつておきますね。」

「ああ、良いよ。お前がやってら客が店から居なくなつちまう。

お前は裏でお得意のパソコンでもやつてる。」

「……」

そこからもう完全に分かつた。いや、分かつていたけれど分かりたくなかつたんだろう。

誰一人人間の真を見ようとしない、見た目が良い。こういつた癖が可愛い。これができれば格好いい。誰もが表面だけ見て分かつたよ
うなふりをして口先だけで話す。

他人のことを考えている人間はだれ一人いない。

だったら俺だけでも他人のことを考えられる人間になろうと思つた。
でも、たつた一人変わったところで意味はなかつた。

表面しか見たことのない人間は真から話しても話している人間の見た目や行動しか見ない。

だからもう諦めた。

成程。よく解りました。

「……」

でも、なぜその中でも女性を嫌うのですか？

「簡単な話だ。女はすぐ表面に出て遠慮を知らない。

其れに比べて男は表に出さない。

真を見れる人間にとつてすぐに表面に出ようとなんだろうと関係ないからな。

だったら見えないとこでやり取りをしてほしい。」

馬鹿ですね。

「何だと？」

其れは貴方が臆病なだけです。

何が真を見るのですか何が表面しか見ないですか。

貴方は今までの経験を全てだと思っただけで他人との接触を絶った！だから他人嫌いが直らない！ 湿疹ができるのは強く思いこんでいるから！

他人との接触を断つ前に全力で本心を伝えたらどうですか！

「……無駄なんだよ、人間誰だっておんなじだ、他人のことを考えないで自分のことしか考えない、だから部下や道具を欲する、

部下に利用されているとも知らずに！」

利用なんかじゃありません！ 信じあっているからこそ任すことができる！

「自分がやりたくないから任せるんだ！ 自分のことしか考えていないから！ 楽がしたいから！」

じゃあ、何故あなたは私に手伝えとか言いながら自分もしっかりと仕事をしたんですか！

「その方が速いからだよ！」

其れが相手を信じると言う事なんですよ！

「！」

自分のためにしっかりと働いてくれるという信頼があるからこそ貴方は私に手伝うように言った！ 失敗したら一からやり直してさらに時間がかかると知っておきながら私に手伝うように頼んだ！

それほどに貴方と私は深く接し、お互いを理解した！

「……」

どうなんですか？ 返答次第ではすぐさま貴方の核を破壊しますよ。

……

「……かもな。俺は今まで他人と深く付き合ったことはなかったからこうなったんだ。

お前と深く付き合っただけでいくうちにお前を信じていたのかもな。」

……

「でも、まだ他人は信じれない。」

では、私と貴方の関係は？」

「開心かいしんした相手とも言つとこか。」

開心？

「開いた心と書いて開心。」

相手の真を完全に見てはじめてなし得ること。」

「……良いでしょう。」

では、そろそろ休むとしましょう。」

「……応。」

今さらだが、分からないやつだ。」

何か言いましたか？

「いや、何も。」

自分が微笑しているのに気付いていませんね。初めて見ましたよ。彼の純粹な笑みを。」

【第三十六話】 記憶の奥底・・・（後書き）

我ながらいい話を書いたと思います（自己満足ですがねww）
ま、実際あんな状況になるのは珍しいと思いますかね。

「空気ブレイカーだなお前。」

おっと、では、今回はこの辺で。
それでは

【第三十七話】UNKNOWN? (前書き)

久々の行進です。

今回は、紅い忘れ傘さんのUNKNOWN!〜正体不明〜とのクロスです。
どうぞ

【第三十七話】 UNKNOWN？

「暇だ。」

暇ですね、っとまあ、家できて寛いでいるのですが、外と違って何もなさ過ぎて暇で暇で仕方ありません。

「外行くか。」

そうですね。

やっぱり外に出るんですね。

つてなわけで、太陽の畑を暫く何の目的もなく歩いています。

「ところでさ？」

はい？

「此処の奥地に住んでいるものすごい妖怪って誰？」

風見幽香さんです。彼女はかなりの上級妖怪で、気に入らない人は不通に殺しますから。

「そりゃ危ねえな。でもそいつとも戦わなくちゃいけねえんだろ？」

面倒臭いったらありやしねーぞ。」

だったら異変に手を出さなきゃいいじゃないですか。

「それは俺に暇すぎで死ねと。」

大丈夫ですよ。貴方は簡単には死にませんから。

「この体も不便なのな。」

両極端ですね。

「どこら辺が良くてどこら辺が駄目なんだ？」

とりあえずまあ、身体の高自由度が高いところですね。後は食事や睡眠を必要としないこと。

「駄目なところは？」

まずは硬く脆いところです。他には、身体が生身に比べると変形しないこと。

「なるほどね。」

と、こんな感じに無駄話をしながら歩き続けて十五分。

「何処だ此処！」

良くわからないところに出ました。ひたすらまっすぐ進んで十五分普通ならまだ太陽の畑のほす、なのに此処はというと・・・

「草原には変わりはない。」

ええ、でもどこを見ても太陽の畑の象徴である向日葵畑が見えません。

「どついうこつちゃ？」

とりあえず、あそこに建っている建物に向かしましょう。もしかしたら誰かいるかもしれませんし。

「だな。」

でも、あの建物なんでしょうね？ どう見てもレンガや木造じゃありませんし。

「お前コンクリしらねえの？」

コンクリ？

「コンクリートだよ。いろいろ混ぜて作ってあって最初は流動体でそのまま放置しておくと同まって壁とかになる。」

つまり、レンガをつないでいるあれの凄いやつと。

「そんなとこだ。」

それよりも、何なんでしょうねこれ。

「えつと？『私立星陽学園』？」

学園ってことは学び舎でしょうか？

「そう言うことになるだろう。」

そのころの私立星陽学園内部。

「デйна先生。」

「はい、なんなのです。一之瀬さん。」

「結界の一時的な異常を感知したんですが、今日は転校生でも来るんですか？」

「そんなことはないのです。此処にはこの学校の生徒と先生しかい

ないはずですし、第一転校手続きなんてもらってないのです。」

「でも、校門前に誰がいるぜ。」

「はい?」

一人の少年の言葉にクラス全員は窓の外に乗り出した。

side out

「何なんだこの状況は。」

何で皆さん窓からこちらを覗いているのでしょうか?

「……ああ、アレだ。不審者だと思われてんだ。」

なるほど。では、堂々と入れば問題はありませぬね。

「応!」

学園side

「ちよつとちよつと、入ってくるよ!?! どうすんの!?!」

「ちよつとみんな落ち着くのです。皆はおとなしく自習をしておくのです。私はあの良くわからないやつのところに行ってくるのです。」

「

「自習か、ラッキー」

side out

「騒がしいぞ。」

おかしいですね。こそこそしていれば怪しまれるのは分かりますが、こんなに堂々としていて騒がれるとは。

「その考え自体がおか仕方ってことか?」
「でしょうね。」

「ピンポンパンポン なのです。」

つて、こんなことしている場合じゃないのです。その貴方、何者
なのです! 反乱軍レジスタンスの人ならただじゃおかないのです。即刻此処か

ら立ち去るのです!」

「だってよ。」

立ち去れと言われましても行くあてもありませんし、ただ単に迷い込んだだけなんですけどねえ。

「何をこそそと話しているのです！ 早くここから立ち去るです。従わない場合は強硬手段に出るのです！」

「放送室に聞こえてねえのに一人でしゃべってるよ。」

「それが一番だ。」

「あ、こら、無視するなです！」

校内

「えっと、こういうときは職員室を探すのが一番だな。」

成程。其れは確かですね。でも、その必要はないみたいですよ。

「は？」

「こゝら、何侵入してるのです！」

世間一般に言う幼女が全速力で此方に走ってきています。皆さん廊下は走つてはいけませんよ。

「さっきの方そうしてた人か。ちようどいいや。」

「早く立ち去るのです！ 細胞変換能力！」

おやおや、腕が巨大な突進槍に。

「まずいな。」

逃げますか。

「それが一番だな。」

「あくまでも逃げ切るつもりですか？」

今度は、急に翼が生えて、もうなんだかよくわかりません。

「仕方ねえな。邪咬！」

邪咬

ウロボロスで捕まえた相手を投げ飛ばす。

「ちよっ！ あわわ！」

思いっきりたたきつけました。

「つたく、何なんだこの餓鬼は。」

「餓鬼じゃないのです！ この学校の先生なのです。」

「は？ その見てくれで先生？ 笑わせてくれる。」

間違いないではありませんよ。

「え？」

彼女が先生と言つのはまんざら嘘ではないでしょう。あれほどの力を有しながら冷静に制御しているところを見ると。見た目相應の年じやないでしょう。

「よくわかつたのです。私はダイナ・ゾイル。そんなことよりもさつさと立ち去るです。」

「こういうところは年相應だな。」

そこは置いといて、とりあえず私たちも自己紹介をしましょう。私はルアート、彼はキトリです。

ところでダイナさんでしたっけ、私たちはこの世界に迷い込んでしまい人がいるであろうこの建物には言っただけで、決して怪しいものではありません。

「侵入者ではあるがな。」

「・・・成程、事情は理解したのです。とりあえずは学園長室にきます。」

「はいよ。」

何とか疑いは晴れましたね。

「ああ。」

学園長室

「なんか、変なオーラが出てるが。」

「中谷君も言ってますねそんなこと。」

確かに人出はないオーラが出てます。

「ま、そんなことは良いでしょう。こんごうん！ ゼル？ 入りますですよ。」

「ノックとともにこんこんってww」
さて、気配の正体は誰か。

「どうしました？ って、誰その方？」

「この世界に迷い込んできたらしいのです。確か名前は……
なんでしたっけ。」

「キトリだ。」

ルアートと言います。

「そうそう、キトリ君とルアート君なのです。」

「今度はお前も君付けだ。」

「気にすることはないのでしょう、私の年齢は七千八百五十八歳です
から。」

「「「嘘おー！」「」」

本当ですよ。って、学園長とディナさんも驚きすぎですよ。

「まあ、其れは良いとして、私はゼルエル・オ・レーベル。「ゼル」
って呼んでね。」

「まあ、其れは良いとして、金魚が大変なことになってるぞ。って
かその前になんだよバーサクってww」

「餌だよ。」

「まあ、そんなことは置いといてと、ゼルエルさん単刀直入に言います。
「はいどうぞ。」

此処には世界を移動できるような隙間や穴が存在するようですが、
其れを扱っている方はどなたですか？

「いないんだよこれが。」
はい？

「此処は世界と言ってもものすごく小さいところか、すっごい不安
定だね。まあ、その理由が色々な世界にちよつとずつ干渉している
からなんだけど、だから、大体は探せば見つかるけど、貴方達のい
た世界がどこかよくわからないから探しようが無いの。」

「俺らがいたところは幻想郷って言うところだ。こいつ曰く忘れられた
モノが行きつくらしい。」

「幻想郷・・・忘れられたモノ・・・さっぱりね。」

「What?」

そりゃそうですよ忘れられている場所が普通知られているわけないじゃないですか。

「それもそうだな。そんじやあ、紫が来るまで待つか、ゼルかデイン、もしくはこの学校の誰かが結界に干渉して穴をあけてくれるのを待つか。」

「それはかまわないわよ。私たちも無関係の人をこの世界においておきたくないし。」

「それもそうなのです。ところで、キトリ君とルアート君は種族は何なのです?」

種族ですか?・・・人形ですかね?

「ですかね? って君は自分の種族も解らないの?」

「俺は元人間だな、こいつも元人間らしい。今は人形型妖怪ってとこだ。」

「なるほどなのです。」

一応誤解も解けて、幻想郷に帰れるようになるまでしばらくこの世界にとどまるしかないですね。

【第三十七話】UNKNOWN? (後書き)

ちよつとだけ続きます。
それでは

【第三十八話】UNKNOWN? (前書き)

UNKNOWN編第二話です。

あひる

【第三十八話】 UNKNOWN？

この世界にとどまることになった私たちですが、最初に連れてこられた場所は・・・

「教室だよ。」

教室です。迷わないようにとディナさんが連れて来てくれたのですが。

「この体になってまで勉強する羽目になるとは。」

「何を言っているのです。此処は普通の学校とは違うのです。」
と、言いますと？

「ま、授業を見ていればわかるのです。」

「そんなじゃ、見学と行こう。」

そうですね。私はメモくらいは取っておきますよ。

「良い心がけなのです。それでは授業再開なのです。」

「だりい〜。」

「転校生が気になるのは分からなくもないのですが、授業に集中するのです。」

「それもそうだ。」

「蒼君が言うならね。」

「リンが言うなら。」

「女子が言うならしかたないか。」

「なんだこの連鎖はww」

そんなことよりもすっかり聞いておいた方がいいですよ。

「ん？ ああ。」

つてなわけで、授業を聞いていたわけですが、とことん常識を覆しています。まあ、幻想郷も常識外れですが、こっちは災害が人為的に起こっているだの何だの。

「成程ね。」

そこを普通に理解できるんですかね。

閑話休題授業が終了して、人が集まってきました。

「ねえねえ、何処から来たの？」

「種族何？」

「コツペパン食べる？」

「がやがやと騒ぎたてています。」

「五月蠅い！」

「！！！！」

「すいませんね。彼、他人嫌いなんですよ。昔色々あったらしくて。」

「そうなんだ。なんかごめんね。」

「いや、気にするな。ところで、あそこで本を読んでいる奴だけ来ないが、何なんだ？」

「お前、琴音が見えるのか？」

「琴音って誰さ？」

「あの黒い羽根はやした奴だろ？」

「え？ どこどこ？」

「あそつか、俺とリンとセイルしか見えないのか。おい、琴音！」

「お前のこと見えてるってよ。」

「本当？ 蒼ちゃん？」

「本当だよな？」

「ばつちり見えてる。」

「とりあえず個人的な話の良いとして、自己紹介くらいしましょうよ。」

「それもそうだな。俺はキトリ、種族は人形の妖怪だと思う。幻想郷の太陽の畑を散歩していたら此処に迷い込んだわけだ。」

「私はルアート、名前以外は彼とおんなじとみてかまいませんよ。」

「幻想郷……ごめん。」

「どうしたの琴ちゃん？」

「幻想郷の結界砕いたの私だ。」

「……嘘お！」「」

「いや、ね、作者がそのうちこの人たち呼ぶから結界を壊してきて
つて。」

「あー、確かにそんなことがあったような無かったような。」

「つてことは、すぐにでも戻れるのか？」

「其れは無理ですね。」

「そうか、つて誰だ？」

「申し遅れました。私いちのせなつ一之瀬奈津といいます。」

「そういや俺らも自己紹介がまだだったな。」

俺は中谷蒼留。人間だ。」

「私は、あまさかことね天坂琴音。種族は天人。」

「私はあまさかりんね天坂鈴音。琴ちゃんと同じ天人だよ。」

「私はリリア。ドレアム。龍人だよ。」

「私はアリサ。マグナクレス。同じく龍人。」

「ああ、俺は雲漸刹那ね。見ての通り幽霊だよろしく。」

「ああ、俺めんどいから忘れていいわ。」

「そ、そうか。つてかあまり近寄るな。」

御免なさいねこんな人で。そんなことよりも琴音さんでしたっけ？

今一度幻想郷の結界を砕くことは出来ますか？

「できなくもないけど。そう簡単にも行かないもんなの。あの時は作者が場所を教えてくれたから良かったけど、この世界は不安定だから、場所がコロコロ変わっちゃうの。」

そうですか。

「そんじゃあ、暫くは此処に滞在することになるわけだ。」

何かあったら一応協力しますね。

「そいつは助かる。」

話がだいぶまとまったその時です。

「ピンポンパンポ〜んなのです。「災獣」が出たので速やかに退治してほしいのです。以上なのです！」

「こんな感じなのか？」

「まあ、こんな感じかな？」

では、私たちも行きますか。

「はいよ。」

校庭

「今回はこんなやつか。」

そこには、雪男ですかね？ そんな感じなのでかいのがあります。

「さっさと片付けようか。」

「だりいな。」

「それでは、早速。」

「」「」「戦装ッ！」「」「」

「一之瀬さん。戦装貸して。」

「かしこまりました。」

「ちよっwwメイド服ww」

「うん、其れが正常だよ。」

「ま、皆変身するってんならおれもやるか。センチネル！」

超合金のロボットですね。

「お前も普通じゃないのかよorz」

「もともとは普通の人間だったんだけどな。」

「マジで？」

「マジで。」

さて、出番が少ないですが、此処は一つ良いですか？

「なんだ？」

貴方の能力ですが、本当は違うんですよ。

「つまり本当はキャラクターをコピーする程度の能力じゃないと。」

そう言うわけです。

「いきなりだなおい！」

まあまあ、落ちついて。貴方の本当の能力はですね。

「おう。」

糸を操る程度の能力なんですよ。

「糸？」

ええ。今までの攻撃は其れを応用してキャラクターと同じような動きをしていたってわけです。

「細かい説明よろしく。」

はい。まず今までの攻撃や変身は貴方の体内にある糸をその理想の状態に束ねているだけなんです。

「つまり、この体も糸と。」

そう言うわけです。そして、糸と言ってもそう言ったものだけではありません。

関係の糸や空間の糸、その他時間の糸も糸の寄せ集めも操れるんですよ。

「だからザ・ワールドや壁の移動もできたってわけだ。本でついでに布も操れると。」

そう言うことです。後ついでに言いますと自分から伸ばしたいとは燃やしたり電流を流したりと思うがままですよ。

「おk。」

「なんだかよくわかんないけど何かを勘違いしていたってわけか。」
そう言うことです。では、私も参加しましょうか。

「ルアートも戦うんだ。」

まあ、一応。

「よし、指示は俺に任せろ！ お前らは作戦Tだ！」

「了解！ ロケットパンチ！」

ロケットパンチ

そのままの意味だよ。

「グガ！」

「受け切ったか。」

「隙あり！ 雷撃漸・天衝オ！」

ルークプレス！ ミリオン！

「刹那が切り上げルアートが上から潰すと。」

「グオオオオオオオ！」

「暴れだしたか。」

総員退避！」

『了解！』

「あいつは恐らくパワー型だ。見た目からして雪崩を起こしたりする奴だろう。そう考えるとアリサを軸にして戦うのが良いだろう。だから、アリサは前衛で頼む。後は今まで通り作戦Tだ！」

『了解！』

「そろそろ変えるか。」

「あ、戻ったww。」

「クラスターフレア！」

「ガンフレイム！」

ガンフレイム

地面から火柱を放つ。

「ギユオア！」

「やっぱ効いてる。」

そのようですね。

「オワツ！」

いやはや、なかなかの観察力ですね。あの短時間であれだけ指示が出せるとは。

「蒼留様。そろそろとどめがさせます。退避させてはどうですか？」

「了解。とどめに入る！ 総員退避！」

『了解！』

「頼むぞ琴音。」

「しくじりはしないわ。大煉獄魔法・テラ・アルカトラズ！」

「どんなとどめになるやら。」

「・・・拘束」

おや、閉じ込めましたか。

「固定。」

「ギユエア！」

「そこに多数の棒が突き刺さると。」

「^{バースト}火葬。」

文字通り火葬しました。

「これは心臓に悪いよな。」

「そうか？ 別にこんなの普通じゃね？」

「ちよ、え？ お前今まで何見てきたの？」

「ナイフで仙人掌にされた人とか、アイアンメイデンで処刑された人とかe t c . . .」

そんなの見た覚えないんですけど。

「つてか、ほかのメンバー見てみなよ。はきかけてるじゃない。」

「じゃあ、何であんな殺し方したし。」

「何時もああしてるから。」

「駄目だこいつら。強いのは確かだが、全員どつか抜けてる。」

まあ、一応例の災獣でしたっけ？ 倒せたから良いじゃないですか。

「終わりよければすべてよしってか。」

【第三十八話】UNKNOWN? (後書き)

次回でUNKNOWN編最終回です。
それでは

【第三十九話】UNKNOWN? (前書き)

UNKNOWN編最終回です。

あひな

【第三十九話】 UNKNOWN？

「お疲れー。」

「おう、お疲れ。」

「……」

どうしました？

「いや、災害を起こす獣って言うくらいだからどんなもんかと思っただけど、思ったよりもって言うか半端なく弱かった。」

「そりゃそうなのです。あいつは超低級なのです。」

おや、ディナさん。

「超低級か。まあ、あんだけ何もさせずに攻撃できりゃあ、そうだろうな。」

そむはさておき 閑話休題結界の方は何とかなったか？

「それはもうちょっとだけ待って。今境界の位置を探してるから。すいません、迷惑をかけてしまい。」

「いいのですいいのです。どちらにしる壊してしまったのはこっちなのです。」

「そう言うことだ。とりあえず帰れるようになるまでゆっくりしていけ。」

「ああ。」

有難うございます。私たちもできるだけ境界の位置を探しますから。

「俺も？」

勿論です。

「……だあ〜りい〜よ。」

「同時に言うなお前ら。」

「そんなことよりも、琴ちゃんは何処？」

「ああ、あいつなら、さつきディナたちに付いて行った。」

恐らく境界の破壊のためでしょう。あの穴も彼女が結界を破壊した影響でできていたわけですし。

「成程ね。」
「つてか、物足りねえよ！」
「どうした刹那!？」
「物足りないんだつて、さっきの災獣が弱すぎて消化不良だよ！」
「なんじゃそりゃ。」
「あゝ、其れわかるわ。本気出しても時間短いと物足りねえよな。」
「なぜわかるし、何故意気投合したし。」
「こんな人じゃないんですけどねえ。」
「つてことで。」
「やることは一つ。」
「「勝負だ!」」
What?
「なんてこつたい＼(＾O＾)／」

つてなわけで、校庭です。

「行くぞ!」
「かかってきな!」
「冷撃剣・兜!」
「インフェルノディバイダー!」
「グフエア!」
「グフエアww」
「わが生涯に、一片の悔いなし。」
「えー、思ったより弱ー。お前そんな障害で悔いないの?」
「ま、死んでんだけどね。」
「ですよー。とまあ、たらし幽霊を瞬殺して、教室に戻ります。」

教室

やる事が無いのか、皆さん各々騒いでいます。

「そつ言えばさあ。」

「ん?」

「お前は、体の構造どうなってるの？」

「さあ？」

「さあ？ って、お前の体だろ。」

彼についての説明は、私が。

彼の体は全てが糸で構成されています。そのパーツごとに糸の種類が異なりますが、だいたい理想道理になります。つまり、彼の体を針かなんかで引っかけると、ほどけますよ。

「あ、本当だ。」

「リリア、何やってんだお前は・・・」

「お、俺の体が・・・」

因みに切れたりした部分は、再生しますし、糸を外から取り入れればその量だけ力を増したりできます。

「へー、そーなのかー。」

「蒼留、お前はそんなキャラだったか？」

「いや、とある闇使いのセリフだ。」

「本人は一回しか言ってないがな。」

つとまあ、私からの説明は以上です。

「お疲れ。はい、コッペパン。」

いや、私たちは食事を必要としないので、気持ちだけ受け取っておきます。

「ごはん食べないの！？ それって人生の半分以上損してるよ。」

「そうでもないさ。この体でしかできないこともある。」

「たとえば何？」

そうですね。普通の生き物の三大欲求が無い分、色々試すことができるんですよ。

私たちは長寿ですし。

「そうなの？」

貴方の体でしょう。今まで腕が外れたこともあれば、全ての関節をバラバラにされたこともあるじゃないですか。

「・・・嘘お！」「・・・」

「腕が外れたことは覚えているが、関節バラバラは俺の記憶にない。」

あの時はスリープ状態にしましたからね。

「どんな生活をしてきたらそうなるのよ。」

「さあ？」

さあ？

「さあ？ って本当にお前らイレギュラーだな。」

「お前らの戦っている相手に比べたら普通だ。」

「ん〜、其れもそうだね。」

「戦っているのは、災害そのものだもんね。」

そのまま暫く話しこんでいると。

「結界壊してきたよー。」

「お、終わったか。」

それでは、そろそろ幻想郷に変えるとしましょう。

「あーあ、もつと異世界の話を聞いておきたかったんだけどな。」

「確かに、興味深かったけどね。」

「短い間だったけど悲しいものなのです。」

「もう会えないと思うとね。」

それなら問題ありませんよ。

「はい？」

何かしらの意味で、此処と幻想郷をつなぐ糸を引いておけば彼の能力でいつでも此処に来ることができます。

「そんな使い方あんの？」

貴方の能力でしょうが。

「それもそうだな。」

ま、そろそろ時間も時間です。行きますよ。

「おう、じゃあなお前ら。何かしらの機会があればまた来るだろ。」

「その時は、また授業の見学をします。」

「今度は、負けねえからな。」

「そりゃ面白い。」
「それではみなさん。」
「また会う日まで。」

幻想郷

貴方ってあんなキャラでしたっけ？

「ん？ キャラ変わったか？」

ええ、凄く。

「お帰りー。」

「のわ！ 紫か。」

・・・紫さん、ちょっと良いでしょうか。

「？ 良いわよ。」

本当は見てましたね。

「あらばれてた？」

ばればれですよ。ビシヨップ。

「アチチチー！」

少しは反省して下さいよ。

【第三十九話】 UNKNOWN? (後書き)

何か微妙な終わり方でした。

次回はどうしようかな？

それでは

【第四十話】軽く戦闘を試みよう（前書き）

なんか行き詰ってたらこんなになりました。
どうぞ

【第四十話】軽く戦闘を試みよう

「ああ、暇。」

はいどうも、また暇をしています。まあ、当たり前といえば当たり前なのですが（笑）

「そつえばさ。」
「なんですか？」

「俺の本当の能力って、『糸を操る程度の能力』だろ？」

ええ。人間関係の糸や時間の糸に空間の糸、他にも糸の塊である布の類も操れますよ。

「実践するか。」

それは構いませんが、私はあなたと戦いませんからね。

「わかってらあ。相手を探さなきゃいけないんだが、相手がいない。」

美鈴さんとかいるじゃないですか、妖夢さんとか咲夜さんとか。

「まあ、悪くないんだけど、ちょっと物足りないっていうかなんというか。何か微妙なわけだ。」

なるほど、だったら、フランさんでいいじゃないですか。

「なぜにフラン？」

彼女なら、戦闘相手としても申し分ないですし、いろいろといいと思いますよ。

「ああ、無理。あいつは何するかわからない。」

それは、そうですね。

「つーことで、人里に戦闘相手を探しに来たわけだ。」
人里にする必要がありますか？

「人が多い＝戦えるやつがいるかもしれないってことだ。」

あーなるほど、そういうわけですか。でも、そう簡単に。

「いるわけないか。」

そうですね。ここは人里、妖怪に戦いを挑む方はいませんよ。

「うあゝ。畜生。」

それでは、白玉楼に行きますか？ それとも紅魔館に行きますか？

「どっちかという白玉楼かな？」

そうですね。

白玉楼

「おー、久々。」

そうでもないと思いますよ。

「いや、結構久々だ。」

ま、いいでしょう。そんなことよりも糸は買ってきましたか？

「そこはぬかりない。切られた時のために買ってきた基盗んできた。」

「いやいや、盗んじゃダメでしょう。」

「気にするな。」

それもそうですね。

「おい！」

？

「まあいいか、妖夢ー！ 居るか？」

「はいはい！ おや、キトリ君。どうかしましたか？」

「ちよつと手合わせ願いたい。」

「はい？」

ちよつといろいろありまして、彼の能力の再確認をしたいんです。

その相手として妖夢さんを選んだんです。

「そうですね。でも、いまは仕事が残っていますので、それが終わ

ってからでもいいですか？」

「構わん。とりあえず手合わせしてくれればいい。」

だそうです。

「わかりました。では、少し待っていて下さい。」

「うい。」

私はお手伝いさせていただきますよ。

「ありがとうございます。」

いえいえ、お礼はいりませんよ。

数時間後、妖夢さんの仕事もすべて終わり、やっとこさ戦闘をできます。

「それでは、死なない程度に行きます。」

「いや、その必要はない。思いつきり切りかかってもかまわない。」

「わかりました、では本気でいきます。」

今回はそうではなくては意味がありませんからね。

「それでは、今回は弾幕は無しで行きます。」

「応!」

では、戦闘開始です。

「さっそくいくぞ! ウロボロス!」

いつものチェーンですね。

「甘い!」

それをサイドによけて、切りつけます。ここはセオリーといえればセオリーかと。

「はっ! 兜割!」

空中に飛び上がり、頭をかち割るよつに急降下してきます。

「蛇咬!」

「うわ!」

飛び上がったところにウロボロスで投げると。

「波道拳!」

そこから置き攻めと。

「くっ!」

後転で距離をとり、そこから、反射させる。

「ふん!」

糸で、ガードを入れて防ぐ。

「それ!」

回転しながら切りあがると。

「切られたか、ならばこうだ！」

急接近をして、打撃に持ち込む。

「同じ手は食いません！」

それをガードして、カウンターで切りかかる。

「ぐっ！」

肩から腰辺りまで切られ、左腕がとれた。

「やべ、ほつれた。」

「大丈夫ですか？」

「問題ない。よっと。」

糸になった腕を回収して、新しい糸を体に取り入れる。

「おお、治った治った。これだと、球体関節じゃなくてもいい気がするが、まあいいか。」

「なるほど。これなら切りかかっても問題ないですね。」

「そういうことだ。よし、そんじゃ、もう少し試すか。」

そういうと、急に体を糸に分解し始めた。

「……どこからくる……」

警戒をしています。これは。

「拘束！」

「！」

おや、糸で相手を拘束すると。

「この程度！」

刀を振り始めますが、刀にも糸を巻きつけて動かせなくすると。

「これで終われ！」

「あがつ！」

関節をあり得ない方向に一気に曲げました。これはだれであっても痛い。

「なるほど、こうなってるわけか。」

まったく、普通に脱臼とか関節が外れるってレベルじゃないですよ。

治すの私なんですから。

「ああ、悪い悪い。」

「これじゃ、しばらく何もできないじゃないですか。」

「たまにはいいんじゃない？ 幽々子にやらせても。」

「そうですよ。一応いい年なんですからある程度は自分でできるでしょう。」

「だめですよ。幽々子様にやらせたら食糧が一日もしないで尽きてしまいますから。」

「そうなんですか？」

「ええ。なんせ、幻想郷の食料消費量の三割を占めていますから。」

「どれだけ食うんだか。」

まあ、そういうことならお早めに直しておいてくださいね。

「え、なんか秘薬とか持つてるんじゃないんですか？」

残念ながら私は持ち合わせておりません。

「そ、そんなあゝ。」

「ま、がんばれ。」

【第四十話】軽く戦闘を試みよう（後書き）

微妙でした。

妖夢にした理由は特にありません。

それでは

【第四十一話】戦闘の代償（前書き）

はい、その後です。

どうぞ

【第四十一話】戦闘の代償

「つと、そうはいかないわよ。」
「はい？」

とりあえず、白玉楼から立ち去ろうとしたときです。幽々子さんが現れて、彼の肩をぎりぎり握っています。

「まったく、妖夢が何もできないところちも困るわけよ。妖夢のこ飯はおいしいし、なんでもできるし、私は楽できるし e t c . . .」

「お前の我儘かい！」

確かに、一理ありますが、今回は、貴方が妖夢さんに戦いを挑み、関節をがつつりと壊してしまいましたからね。代わりとして身の回りの手伝いをするのは当然かと。

「いやだ！　なんで女しか住んでねえ屋敷で手伝いしなきゃいけないだよ！　紅魔館なら普通に脅してしまえば誰もよらなかつたけどな、この二人、とくに幽々子は「おなかすいた〜」。とか言ってる。確実に部屋に乗り込んでくる。だから絶対いやだ！」

まあ、確かに幽々子さんならやりかねませんね。

「そんなことしないわよ。」

「いや、やりかねない。」

「やりかねないですね。」

やりかねませんね。

「そんなみんなして言わなくても・・・」

まあ、そういうわけなのでこれにて失礼します。

「させませんよ。」

「あがつ！」

おやしぶとい、妖夢さんが半霊でつかみかかってきましたよ。

「私をこんな状態にしたんですから、それ相応のことはしてください。」

「畜生！　霧散！」

あ、糸で逃げるとはズるいですよ。

「させないわよ。」

「掃除機だと！」

おや、吸い込まれる吸い込まれる。

「アアアアアアアアアアアあああああああああつて俺はコミカルな幽霊じゃねえよ！」

まあ、途中で戻ればいいだけなんですけどね。

「だったら！ 死府「ギャストドリーム」！」

いきなりスペルを発動しないで下さいよ私もよけなくちゃいけないんですから。

「あらら、ごめんなさい。」

「だー、面倒くせえ！ マグナティックホイール！」

「あーずるい！」

「うつせえ！」

・・拘束魔方陣。

「！」

これは八割方あなたの仕事ですよ。

「お前までもか！」

つてなわけで、妖夢さんをたいへんな状態にした代償に白玉楼の手伝いをするようになりました。というよりしました。

「この野郎」

とりあえず、夕食の準備ですね。料理は得意でしょう？ さっさとやりますよ。

「はいよ。」

とりあえず一日分の食料の余りをすべて使っていいとのことですが、
・
・
・

「ざつと十キロ超つてとこか。これだけ調理する妖夢もすげえな。」
感心してる暇はありませんよ。この食材でできる献立を考えて全部使い切らなければいけないのですから。

「とりあえず野菜と肉は、全部一気に炒めちまえばいいだろう。」
全部同じ味になりますよ？

「大丈夫だ。ただの野菜炒めから煮物、なんだって派生してやる。」
「どうやったらそうなるんですか・・・」

「これでも、野菜炒めをカレーにしたことだってある。」

「とりあえず、調理開始じゃー！」

そう言っつて、なにを始めるかと思えば、本当に適当なサイズに切っ
てひたすら炒めるだけですよ。

しかも能力をフルに生かして二十近くの調理器具を一気に使っつてい
ます。で、その能力を使っつている本人はと言えば。

「ふあゝ。」

ものすごくくつろいでいます。体中から糸が噴き出していて、その
糸一本一本がものすごい勢いで調理を進めています。

「我ながら便利な能力だ。」

でしょうね。では、私は幽々子さんのお相手でもしてきますよ。

「応、いつてらっさい。」

居間

幽々子さんいますか。

「はいはい。どうしたの？」

少々暇をしています、お相手いたしましょうか？

「あら、ありがとう。それじゃ、将棋でもしましょうっ。」

いいですね。負けませんよ。

数分後・・・

チエックです。

「あらそう、じゃあ、とるわよ。」

そう来ますか。

数十分後・・・

「はい、王手。」

では、割り込みを。

「そう来るのね。」

数時間後……

チエックメイトです。

「あらら、負けちゃった。」

いい勝負でした。

「そうね。お互い王以外はほとんどとっっちゃったし。」

「お前ら……」

おや？ どうしました？

「とつくに飯できてるぞ。」

「そうなの？ いただきわ。」

「はいよ。」

にしても……

「ん？」

本当に同じ調理法から派生して数百の献立を。

「このくらい普通だろ？ ま、大半は俺のオリジナルだ。」

普通ではないと思いますよ。

「そうか。」

「ってなわけで、妖夢は一日で完治して、一日で変えることができ
たとき。」

流石は半人半霊。人であり霊である。人であって人でない。すごい
ですね。

「ああ、すごい。」

【第四十一話】戦闘の代償（後書き）

ちよつと続きました。

妖夢の回復力半端ないWW

それでは

【第四拾弐話】宴会（前書き）

萃夢想編です。

順番間違っているかも知れませんが気にしない。
どうぞ

【第四拾貳話】宴会

本日は博霊神社で宴会です。珍しく彼も参加すると言っています。

「正直言っちゃうと食うものも飲むものもないんだけどな。」

「それはどういふことかしら？」

「ただ単に飯を食う必要のない体ってことだ。」

「あら、そう。」

ところで霊夢さん。

「何？」

今日はずいぶんと気前がいいですね。

「貧乏生活の割には、飲み物も飯も豪華だ。何かあったのか？」

「いやあね、偶にはこういふこともいいかなあってね。」

大して大きな理由はないと。

「まあ、気にしないで食べて食べて。」

「だから俺等は食わないって。」

「な〜に言ってるの〜。乗りが悪いじゃない！」

「寄るな酔っぱらい！」

「よつれらいよ〜。」

明日は二日酔いですね。

「だろうな。ってか、霊夢って歳いくつだよ。」

それは聞いちゃいけないと思いますよ。

「とりあえず、フランが495歳でレミリアが500歳。

後はしらね。」

なんでスカートレット姉妹だけ知ってるんですか？

「フランはスペカで暴露してたしレミリアについてはさっきフラン

から聞いた。」

なるほど。

「でもまあ、なんだ。酒が入るとみんなしてキャラ崩壊だな。」

そうですね。

「レミリアがカリスマブレイクして、藍は・・・まあ、いつも通りで、アリスは藁人形に五寸釘さして、ルナサとメルランと後誰だっけ？ まあ、とりあえずプリズムリバーもぶっ壊れているわけだ。」
「お酒の力は恐ろしいですね。」

「そういうことだな。」

「辻斬り！」

「グフオア！」

「おや、妖夢さん。さっきからピチューンピチューン言ってると思ったら辻斬りをしていたんですか。」

「つたく、糸の消費は抑えたいんだよ。また関節つぶすぞ！」

「あが！」

「あらら、またですか。」

「大丈夫だ、どうせ1日で治るし治らなくても半霊で活動ができるしな。」

「ですね。」

「でも、唯一壊れていないのが。」

「咲夜だな。酒を飲んでいないのか、ただ単に酒に強いのか、ぱつと見未成年のどこをみると飲んでいないんだろう。」

「飲んじゃったらレミリアさんのお世話とかができませんからね。」

「常識人だな。」

「常識人ですね。ですが、この幻想郷に常識というものは存在しませんよ。」

「だろうな。戦い方から種族その他いろいろ、もう面倒で面倒で。」

「統一してほしいわ。」

「それはあなたも統一されるといふことですよ。」

「そいつは勘弁。」

「と、一晩中みなさん飲み明かして行きました。」

翌日・・・

「キトリー！ 宴会すつぞ！ 博霊神社集合な！」
「魔理沙か、つてか、どうやってここを突き止めたんだ。」
「さあ？ 閑話休題そればかり今日も宴会とは霊夢さんも気前がいいですね。
「最近異変も何もないしな。」
「そうですね。」

そう言つて、今日も今日とて宴会になつたわけです。

「俺は飲まねえし食わねえからその場を見て改めてこいつらがバカだと認識するんだがな。」

私は見ていて楽しいですよ。

「馬鹿騒ぎを見てれば大体のやつは楽しくなるだろう。暇な奴らだ。」

宴会というものは他の死んだもの勝ちなんですよ。

「物事なんだつてそうさ。」

楽しめばなんだつて出来ますしね。

「マスタースパーク！」

「破山砲！」

「！ シールド！」

いきなりスペルが飛んでくるとは。

「やっぱこの世界は普通じゃねえ！」

でしょうね。

それでまた、一晩中騒ぎ続けたわけです。

さらに翌日……

「キトリー！ 宴会やるぞー！ 申の刻に博霊神社な！」

「今度は橙か……つてか、また宴会すんのかよ！」

三日もやるとは……

「ま、いんじゃないね？ どうせみんな食いもんだの飲みもんだの持ち寄り騒いでるだけなんだから。」

片づけは全部霊夢さんがやっていますがね。

「お疲れってわけだ。」
「ま、誘われたからにはいきますか。」
「おう。」

夜

「ってなわけで博霊神社だが・・・」
ほとんどの人がもう集まっていると。
しかも始まっている上に出来上がっちゃっている人までいますし。
「飲みたいやつには飲みしとけ。」
「ですね。」

「遅いぞキトリー！」

「もう始まっているよー！」

「もう出来上がっているの間違いじゃないのか？」

「ルアートちよつと来て。」

「なんですか、アリスさん。」

「そーれ！」

「危な！いきなり槍兵とは。」

「なかなかやるじゃないの。」

・・・ポーン。

「あだ！」

酔っ払いは寝ていてください。

「それは同意だ。」

にしても、本当に飽きませぬね。

「宴会だからな。何回やつても楽しめるってことだ。」

でも、三日連続で、しかもほとんどの人が集まっていますよ？

「それだけ暇なんだよ。」

「そうですかね？」

「どういうことだ？」

「こっちは考えられませんか？ と、言うよりもこっつとしか考えられないんですよ。」

「なんだ？」

今までのループの中でもこういった異変はあつたんですよ。

何日も何日も宴会をやつて、楽しませ続けるという。

「いんじゃない？別に。」

まあ、犯人は悪気はなかつたんですよ。でも博霊の方が何日もやつたら身が持たないのと片付けが面倒つてことで異変としてみて、解決したんですよ。

「なるほど。そんじゃ、この宴会はそいつが仕組んだつてことか。ええ、私は大体予想は付いているのですが、それでは面白くない。気づくまで見物と行きますよ。」

「面倒だなお前。」

今さらですか？

「ま、今さらだな。とりあえず今日は無理だな。明日の早朝にでも出かけるか。」

そうしましょう。

翌朝

「さてと、とりあえず会場になつていた博霊神社に行くのが先決だな。」

掃除を手伝わされるのを覚悟で行きますか？

「俺は散らかしてないから問題はない。」

それもそうですね。

では、出発しましょう。

【第四拾弐話】宴会（後書き）

次回は霊夢との絡みです。
それでは

【第四拾参話】妖気（前書き）

とりあえず前回の流れで博霊神社です。
どうぞ

【第四拾参話】妖気

博霊神社

「到着つと。」

とりあえずここに来たら霊夢さんに聞くのが手っ取り早いですね。

「だな。霊夢ー！ 居るかー！？」

「いるわよ。」

「うわ吃驚したなお前、いきなり後ろからぬって出てくんよ。

しかも顔色悪いぞ。」

二日酔いですか。」

「当たらずとも遠からずよ。」

毎朝毎朝宴会の片づけをしては昼ごろに宴会の準備をしてまた夜に宴会で飲む。

こんなのを昔週間も続けてみなさい。誰だって疲れるわ。」
でしようね。

「まあ、その件に関してなんだが。」

「何、手伝ってくれんの？」

「いや、違えよ。第一俺はなんも飲み食いして無えから散らかしてないしな。」

私も同じく。

「そうでもないわよ。ルアートはともかく、あんたは妖夢に切られたりして糸撒き散らしてるじゃないの。」

「マジで？」

「マジで。ってなわけで掃除をしてもらうわよ。」

「いやいや、それは今度やるからーつ聞いていいか？」

「なによ？」

「最近、ここら辺妙に妖気濃くないか？」

しかもただ単にここが濃いってだけじゃなくて、同じ妖気がどこもかしこもあるんだ。」

「さあ？ 毎日宴会してるんだからそのせいじゃないの？」
「それも考えられますね。」

「でも、だとしたら幻想郷全域にある妖気の説明がつかない。」
「そんなことどうだっていいじゃない。」

とにかく、掃除は手伝ってもらおうからね。」

「そいつは承諾できないな。」

いくら俺の糸が散らかっているとはいえ俺が任意でやったわけではないからな。

頼むんなら妖夢か魔理沙にでも頼め。」

「あなた……寺子屋とかで習わなかった？ 自分がやってなくてもゴミが落ちているのに気付いたら自分から捨てるって。」

「知らぬ！ 分らぬ！ 解せぬ！」

「はあ。」

つてなわけで戦闘開始です。

「何があつた？」つて思う方もいると思いますが、ゲームとかではとりあえず会話がひと段落したら戦闘が始まるなんてしょっちゅうなので、あまりお気になさらず。

「喰らいなさい！」

「ガードつと。つてかあの被い棒だっけか？ あれ振り回して大丈夫なのか？」

一応、強化してあるみたいですから。

「あそう。」

とか言っていると札弾幕が飛んできています。

「ガンガードじゃ！」

まあ、そうなりますけどね。

「ハッ！ やっ！」

ガンガードお構いなしに飛ばしてきます。

「……まずい。」

糸の壁が壊れでしまいましたね。いわゆるガードクラッシュというやつですか。

「今回は、ルールが違うのよ！ 壱の府「夢想妙珠連」！」
「チツ！ アーマーゲドン！」

おお、ナイス相殺。

「まだまだ！」

「ちよつ！ スペルって何発も連続で出せたっけ？」
「今回はルールが違うんですよ。」

「何なんだよルールって！ ウロボロス！」

高所に逃げるとはいい方法をとりましたね。

「甘いわね！」

「何？ ぬおわ！」

霊夢さんは博霊の巫女ですよ。瞬間移動なんて朝飯前ですから。

「らしいな。参ったぜ、まさかあの高所で上をとられるとはな。」

「そんなこと言ってる余裕はないわよ！」

そう言つて、霊夢さんは急降下してきます。

「まあ、上をとられたとこであんまり意味ないがな。」

そういうと、彼は何やら不穏な空気を出しています。

「千魂冥落！」

ウロボロスを上を打ち上げますか。

「キャツ！」

霊夢さんはガードで乗り切りますが。

「一夜に千の死をもたらす冥府の蛇よ！ その顎あごで、全ての魂を喰

い尽せ！」

ちよつwwテンプレww

アストラルフイニッシュ！

「ふー。」

帽子、どうしました？

「ん？ 吹っ飛んだ。」

いやいや、あそこに舞ってますよ。

「そうか。よつと。」

本当に、便利な能力ですね。

「だよな。」

「さーて第二ラウンド始めようか。」

「ちよっ、ぬるっておきあがるな。」

「さっきも言ったでしょ。今回はルールが違ってます。」

「どづいっことだ作者!」

【第四拾参話】妖気（後書き）

いつもより短めでした。

その分続きますゆえお願いします。

それでは

【第四拾四話】ルールが違うのだよルールが（前書き）

第二ラウンドです。

でしよ

【第四拾四話】ルールが違うのだよルールが

今回は、ルールが変わっているため、ちょっと苦戦しています。

「だからルールって何なんだよ。」

今回は、スペルを限定して、ダウンしたら別のスペルが打てるってことです。

「あー、あれか。スパ？見たいな感じか。」

よくわかりませんが、そんな感じですよ。

「さて、さつさとやるうか。」

「あ？ ああ。」

って、もう始まってますけどね。

「さつさと行くわよ！」

お得意の空中戦に持ち込む気ですね。

「蛇咬！」

ウロボロスで捕まえて叩きつけます。

「まだまだあ！」

霊夢さんもそのままにはなりませんね。

「甘いわね。」

叩きつけられる前に飛んでダメージを避けると。

「ほらよ！」

飛び上がって体勢を立て直したところに指からビームを出す。

「なめないでほしいわ！」

流石は専門家というところですね。簡単によけます。

「今度はこっちから行くわよ！」

札と座布団の弾幕をまきちらしながら急接近してきます。

「けし飛べ！」

糸を振りまわして、弾幕を消し去ります。

「そこよ！ 昇天脚！」

サマーソルトキックを繰り返します。

「ほら！」

「きゃっ！」

腕を糸で引っ張って体勢を崩します。

「アイアンフィスト！」

電気をまとった拳で殴ります。

「無駄よ！」

結界で、ガードをします。

「おら！ 下段がから空きだぞ！」

「よっと！」

結界の隙間を狙っての攻撃は軽く飛び上がりガードされます。

「さて、そろそろ行くわよ。」

スペルが飛んできますよ。

「わかつてらあ。」

千魂冥落！」

蛇を作って迎撃の態勢です。

「神霊「夢想封印」！」

いくつもの球が、彼を追尾して追いかけてきます。

「チィ！」

蛇を壁にして身を守ります。

「霧散！」

蛇を維持してそのまま糸に散ります。

「ほらほらほらほら！」

霊夢さんは構わず打ち込んできます。

「おら！ こっちだ！」

「うっ！」

霊夢さんの後ろから抜き手を首に当てます。

「ウロボロス！」

怯んで、動きの止まっている霊夢さんに維持しておいた蛇を当てます。

「まだまだよ！ 神技「八方鬼縛陣」」

「何！」

魔方陣から力を放出してウロボロスを消し去ります。

「さすがだな。」

「それはどうも。」

「だが、今のは相当な力を使わず。そう何発もつてまい。」

「それはどうかしら！」

霊夢さんは高速で移動して近接戦闘に持ち込みます。

「いいだろう。受けて立つ。」

「ハアッ！」

霊夢さんは、霊力で強化した両手を突き出し彼の胸を打ちます。

「斬新！」

当て身投げですね。

「うっ！ まだまだ！」

絶対掃除手伝ってもらうんだから！」

目的はそっちですか。

「最初からそうだっただろうと。」

でしたね。

「ほんじゃ、二本目もらうぞ！」

ガンマクラッシュュ！」

どこまで飛ぶんだか。

「また瞬間移動で上をとるまでよ！」

「止めとけ。」

「！」

あそこは宇宙空間ですからね。

ガンマクラッシュュは宇宙空間から小型の隕石をつかんで急降下する

技ですから。

そこまでいけば生身では破裂しますよ。

「えー。」

ピチューーン！

「なんでこうなったし。」

さあ？

「まったく、なんで宇宙空間なんていくかなあ！」

「お前が勝手に来たんだろ。俺は知らん。」

「つてか復活はやっ！」

「博霊の巫女は伊達じゃないわ。」

「あつそ。まあ、情報がないなら俺は別の場所で情報を入れてくる。情報としてはゆかりが一番手に入りそうだから連絡入ったら頼むわ。」

「

お願いしますね。」

「まあ、解ったわ。」

「じゃあな。」

では、この辺で失礼します。」

「じゃね。」

【第四拾四話】ルールが違うのだよルールが（後書き）

霊夢戦は終了です。

次回は誰にしましょうか。

それでは

【第四拾伍話】霧散と言えば？（前書き）

なんか徐々に短くなってきてます。
どうぞ

【第四拾伍話】霧散と言えば？

「さて、紫の方は霊夢に頼んだからいいとして、次はどこに行くべきか。」

「さあ？」

「さあ？　つてお前……」

私は誰が犯人なのか今までの間で知ってますしもしそれを教えたとしても貴方じゃ見つけれませんよ。

「あそつ。」

霧と言ったら今まで前科がある方がいるでしょう。

「霧……前科……なるほど。紅魔館か。」

御名答。では、いきますか。

「紅魔館は魔法の森の湖のそこだったな。」

数分後……

「到着つと」

美鈴さんはいつも通り寝ているのでパスですね。

「ああ、こいつの体術はだるいからな。」

では、いきますか。

紅魔館内

「レミリアの部屋つてどこだっけ？」

確か、そこを左に曲がって三つ先を右に、そしたらすぐに左に曲がって……後どうでしたっけ？

「お前も覚えてないんかい。」

「すいませんねえ。」

「ま、そこらへんの妖精メイドか小悪魔にでも聞けばいいか。」
「そうですね。」

「さつそく発見つと。excuse me?」
「なんで英語?」

「はい?」

「レミリアの部屋ってどこだ?」

「そこを左に曲がって十個目の角を右です。」

「おう、あんがと。」

結構慣れてきましたね。

「そりゃこんだけ女だらけならね。」

でも、絶対に触れたくねえし信じねえ。」

そこは変わりませんか。

「とりあえず行くか。」

ええ。

レミリアの部屋

礼儀としてノックはしましょうね。

「そのくらいはするわ。」

おーいレミリア居るか?」

「入っていいわよー。」

「ういーす。」

どうも。

「久しぶりね。で、なにしに来たの?」

「単刀直入に言うと、幻想郷中の霧散した妖気について何か知らないか?」

「知らないわ。」

「そか、じゃあいいや。」

お騒がせしました。

「そこまで騒いでないからいいわよ。」

「そんじゃあな。とりあえず妖気云々でなんか情報は行ったら頼むわ。」

よろしくお願いしますね。

「ええ、何か情報が入り次第連絡はするわ。」
「おう。」

「どつやらレミリアでもないらしいな。」
「そのようですねww」

「……お前、知ってるのにわざと違うところ行っただろ。」
「そりゃそうですよ。正直今回の犯人は後早くても二刻ほど絶たないと出てきませんからね。」

「ダルし。」
「ま、出てくるとしたら博霊神社ですね。」

「はぁ？」
「今まではそうでしたよ。」

「なんでこんなとこまで来るはめになったんだよ。」
ww

「一人で楽しんでんじゃねえ！」
「おっとww」

「チツ！ 待てこら！」
「貴方に私が捕まえられますか？」
「ラブコメの砂浜じゃねーんだぞ！」

ww
「蛇咬！」
「危ない危ない。」

「待てい！」
「ルーク！」
「あべし！」

「普通にたたき落とされましたね。」
「うるせえ。」

「まあ、此処でけんかしていても始まりませんよ。」
「……それもそうだな。」

それじゃ、博霊神社に戻るか。」
そうしてください。

「なんで君たちが中から出てきてるんですか？」

「お、美鈴起きてたか。」

おはようございます。

「おはようございます。……ってなんでなたたちが館内にいたんですか？」

「お前が寝ている間に入った。」

今回も寝ている貴方が悪いですよ。

「……そうですね。」

でも、不法侵入者の撃退は私の務め。勝負です！」

「はぁ!？」

【第四拾伍話】霧散と言えは？（後書き）

次回は美鈴戦の予定です。
それでは

【第四拾六話】 幻想的格闘家（前書き）

遅くなりました。

美鈴戦です。

どうぞ

【第四拾六話】 幻想的格闘家

「鋼の拳だ！」

「くう！」

いきなり磁力のついた拳で殴ります。

「うし！ 準備万端。」

「いったい何を？」

美鈴さんには今まで見せていませんでしたかね。

「よくわかりませんが、行きます！」

飛び上がって、踵落としを仕掛けます。

「アトミツクコレダー！」

腕を掲げて磁力で引きつけます。

「うわわ！」

「そい！」

地面にたたきつけて。

「ソードサマナー！」

空間から剣を召喚します。

「おっと！」

ですが、弾幕慣れと空中浮遊で余裕でかわされます。

「まだまだ！」

懲りずに剣を放ち続けます。

「そこ！」

美鈴さんが正拳突きを向けると一閃の衝撃波が飛んでいきます。

「ちよっ！ スレッジ！」

うまく無効化させます。

「珍しいな。弾幕っぽくない。」

「ただ撒けばいいというものではないというのを学びましたから。」

「誰からだ？ スパークボルト！」

電磁砲を放ちます。

「ふっ！」

「オラ！」

よけたところに腕を飛ばします。一応糸でつないでますね。

「がっ！」

お、いい具合に溝に入りましたね。

「やりますね。」

美鈴さんは弾幕らしい弾幕を放ちます。

ですがその弾幕は軌道が遅く攻撃できるようには見えません。

「それがどうした！ ガンマウェイブ！」

地面をひっくり返して攻撃します。

「ふふっ。」

「チッ！」

地面の波は美鈴さんの放った低速弾幕に止められました。

用途としては防御壁と動きの抑制でしょうか？

「だったらこれだ！」

ちよっ！ いきなり取りに来ないで下さいよ。

「関係ない！ おら！」

なぜか、弾幕に向かって切りかかります。

「いったい何を……！」

「チッ！ 封魔陣がばれるとはな。」

封魔陣

エネルギーを切ることでそのエネルギーを収縮した魔方阵を発生させる。

発生した魔方阵は用途多彩。

「気付いたのはぎりぎりでしたけどね。」

「ほう。だったら、これでどうだ？」

ソードさまなーを多方向から打ちます。

相手の動きを抑制するのは弾幕の基本ですね。

「なかなかですね。ですがどれもこれも少し外れていますよ。」

「そんなこたあ解ってる。」

「いったい何を考えているのでしょうかね。」

「……そこだ！」

「遅い！ ガハッ！」

なるほど。わざとずらしていたのはよけた際に自分から当たるように仕向けるためですか。

「そういうことだ。」

意外に簡単にはまってくれたがな。」

「遠距離がだめなら！」

かなりの猛ダツシユですね。

もう目の前です。

「紅砲！」

「がっ！ 近接戦か。いいだろう！」

もう、半分ただの喧嘩です。

ですが、喧嘩でありながら技の応酬がしっかりとしています。

「バーニングハート！」

半分当て身が混じります。

「そこだ！」

「ふっ！ その程度のカウンターで当たると思ってたんですか？」

「やっぱあの？（バカ）のようにはいかないか。」

そりゃあ、そうでしょうねえ。

「でも、これでどうだ？」

おや、自分を二人にしますか。

「新しい能力ですか？」

「いや、もともと。」

「そうですね！」

美鈴さんが気をまといながら回転しています。

「何をする気かしらねえが。回転して受け流そうたっそうはいかねえぞー！」

右回転の美鈴さんに同じ右回転を刺して回転を止めさせようとするが……

「はあああ……」

「チッ！」

弾幕が放物線を描き美鈴さんを覆います。

「スレツジ！」

弾幕をかき消しながら突っ込みますが。

「そこ！」

回転を利用した掌打でカウンターです。

「さすがは格闘家。大したもんだ。」

「本職は門番ですけどね。」

「居眠りしてるのか？ww」

「うっ！」

精神的ダメージというかなんといかww

「とにかく！今回は負けませんよ！」

「もう遅いけどな。」

「え？」

おや？

「さっきお前の掌打を喰らったときに型の筋肉の一部を軽く叩いた。これでお前は肩より先を動かすことはできまい。」

なんです、その北斗の拳の秘孔見たいなのは。

「そんなんじゃねえよ。ただ単に肩の筋肉に強烈な衝撃を与えてちよつとけいれんさせてるだけだ。」

えー。

「ま、後は逃げるだけ。」

そうですね。

「そんじゃあな。」

また今度。

【第四拾六話】 幻想的格闘家（後書き）

次回は博霊神社に戻りたいです。
それでは

【第四拾七話】真相を知るもの（前書き）

はい、博霊神社に戻ります。
どうぞ

【第四拾七話】真相を知るもの

さて、当初の目的通りに博霊神社に来てみました。

つていうよりも、来なくちゃどうしようもないんですよ。

「で？ そろそろ夕方だから、犯人が来てもいい頃だが。」

それなら、霊夢さん！？ 紫さん来てますか！？

「はいはい、ああ、紫ね。今のところ来てないけど。

なんで紫？」

「いやーね、ルアート曰く、此処で待つてれが犯人が来るらしい。

そのために紫の力が必要なんじゃない？」

「なるほどね。」

多分、その辺でのぞきでもしてるんじゃない？」

どうでしょうね？」

「聞き捨てならないわよ、誰かのぞきなんて。」

「ほらしてた。」

「うっ……」

ま、その辺はいいとして。この辺に漂っている妖気の元をご存じの
はずです。

「まあ・・・知ってるわよ。」

「よし、そいつに会わせてくれ。」

「えー？ なんてよ。私だってあいつと同じでもっと宴会したいも
ん。」

それも四六時中ってほどにね。」

四六時中は無理ですよ。昼夜は時間によって入れ替わるもの。ずつ
とよるなんてあり得ませんから。

「そうね。でも、昼と夜ってあやふやなものよ。」

「まさか……」

「そう、そのまさかよ。」

「夜と昼が同じに……」

「面白いな。昼でもあり夜でもある。太陽と月、それぞれが輝き続ける。」

でもなあ、月は太陽と違って自分から光っているわけじゃないからな。

太陽が裏にいるからこそ美しい。互いを殺しあってはいけないと思うぞ。」

貴方って、そういうキャラでしたっけ？

「ま、なんにせよ。戻してもらおうぞ。」

そしてついでに妖気の現況に合せてもらおうか。」

「よくばりね。霊夢、お茶頂戴。」

「いや、それどころじゃないし。さつさと戻してもらわないとこっちも主催側として大変だし。」

「あ、そう。」

じゃ、さつさとやりましょうか。」

「かかってきな。そのねじ曲がった根性叩きなおしてやる。」
さて、私もアシストしますか。」

「おらあ！」

腕を伸ばすなんて新しいですね。

「そんなんじやつかまらないわよ。」

隙間を開いて防ごうとしますが。

「甘え。」

おや、腕を糸にして捕まえますか。

「えっ？」

「串刺しだ！」

引きつけて体から針を出すとは残酷な。

「くっ！」

「なんだ？」

隙間で空間を裂いて、糸を切りますか。

「チッ！ 下あ！」

地面から蟲を出しますか。

「うわっ！」

「ウロボロス！」

鎖伝いで近づいてから。

「ケーニツヒフルーク！」

ケーニツヒフルーク

ライダーキックで相手を打ち上げてから獣化して咬み付く。

「そこよ！」

「ん？」

隙間を通ったことに気づいていませんね。相手に背後を見せています。

「幻想「第一種永久機関」！」

スペルカードですか。

そういえば美鈴さんの時は今回のルールが適応されませんでしたね。

「ガハッ！」

直撃ですね。

「オプティックブラスト！」

ビームでとりあえず攻撃しますが。

「馬鹿ね。」

「危ね！」

軽く隙間に流されます。

「フォトンショット！」

軽く弾幕を放ちながら接近します。

「まったく。」

また隙間を展開します。

「霧散……」

隙間を目隠しにして、自らを糸と化しますか。

「見失った？」

気づいていない様子。

「ザ・ワールド！」

時間を止めて、紫さんの周りに弾幕を張り巡らせます。

「そして時は動き出す。」

「！」

隙間を全方位に展開して逃げ切りますが。

「ほらぁ！」

「ぐう！」

地面から腕を出して顎を打ちましたか。

「さて、とりあえず一本。」

「あら、ルールはもう解っているのね。」

「まあな。ま、第二ラウンドは瞬殺だ。」

「あら、言ってくれるじゃない。」

何をするのでしょうか？

「……」

「動けないんだろ？ そりゃそうだ。俺の糸が体中に絡まっている。」

「

なるほど、考えますね。

「そんじゃ行くか。俺の初スペル。」

スペルですか。

「糸繰蝶乱舞。」

おや、紫さんが浮き始めましたね。

「な、なにを。」

地面に叩きつけて。

「かはっ！」

上から腹に糸を叩きつけて。

「うう。」

そして浮かせて。

「ぐあぁぁ！」

はい？

「さて、どこまで耐えられるか。」

ああ、なるほど。締め付けてるんですか。

「ギ、ギブ。」

「……」

放しましたね。流石にこれ以上やれば私が止めましたよ。

「さて、じゃあ、さっさと戻して、元凶に合せてくれ。」

「わかったわよ……」

紫さんは私に眼で恐ろしい子と訴えていますが無視しましょう。

【第四拾七話】真相を知るもの（後書き）

次回が萃夢想編ラストになるはずですが、
それでは

【第四拾八話】萃まる夢、想い（前書き）

はい、遅れました。

最近新作を投稿しまくったせいで遅れてます。

今回で萃夢想編最後になります。

どうぞ

【第四拾八話】萃まる夢、想い

あんな技、いつ考えたんですか？

「ん？ さつき。」

己の最も細い糸を相手に絡めて意のままに操る技ですよ。

「そういうこと。さて紫、犯人のところへ案内してもらおうか？」

「案内ってほどじゃないわ。さ、これであいつは見えるはずよ。」

紫さんが何かの境界を操るとまるで別次元のような景色が広がりました。

ちなみに昼と夜はちゃんと戻りましたよ。

「さて、いつたいどんな奴なんだか。」

私たちの眼前には左右に生えた角に荒々しく袖の切られた服、そして特徴的な鎖に繋がれた飾り。

「あれ？ どうしたの紫？ って言うかそいつら何？」

「……まーた女か。しかもぱつと身だけは餓鬼だ。」

「餓鬼って何さ、私は伊吹萃香。ただ宴会を楽しんでいただけの鬼だよ。あ、餓鬼って言う字には鬼が入っていたっけ？」

「……いや、お前が鬼だつてことは見りゃわかるし。」

「つてかなんで私が見えるの？」

今更それを言いますか？

「とりあえず、お前今回の主犯だろ？ なんでこんなことしてんだ？」

「こんなことつて、何が起きているか判ってるんだ。ま、そこにいる奴が解ってるんだもんね。」

私のことですか。

「霊夢の肩を持つわけじゃないが、いちいち宴会に呼び出されて体を切られるのもごめんだかな。」

しかも妖気が駄々漏れた。まんべんなく霧散させておけばいいと思っただらうが、ちよつと甘かったな……つてか、見てたのか。」

「あんたが切られるのは私の所為なの？」

「いや、それは妖夢の所為だ。」

まあ、妖夢さんが酔って辻斬りしているのが悪いですね。

「でも、宴会が多いのはお前のせいらしいな。」

「まあね。」

ところで私は知っているからいいのですが、何故宴会を続けさせるのですか？

「そうだね、そいつのためにも教えてあげるよ。まあ、理由は至極単純。宴会って楽しいじゃない。」

私はにぎやかに騒いでいるのが好きなの、いつもいつも宴会なら楽しいことこの上ないじゃない。」

「お前いたっけ？」

ずっといましたよ。霧散した状態で。

「そうそう、しかも冬が長引いたせいでお花見が遅れたし。桜が咲いたと思ったらすぐに散ってね。これほど悔しいことはないじゃない。」

「まあ、理由はわかった。」

「お、解ってくれるかい。」

「だが、お前は主犯だ。一応倒さないと後々かつたるいからな。これ以上宴会に呼ばれて無駄な消費をしたくないんだよ。」

私は宴会好きですけどね。ま、主犯を倒すというその考えはいいと思いますよ。

「私にあんたたち全員を見てきたんだよ。私の「萃める能力」でみんなを萃めて宴会をさせた。その意味がわかるかい？」

「知るか。」

「あんた「達」じゃ私を倒せない。」

そうはいつでも所詮は限りのあるもの私たちに勝率はありません。

「あつはつはつは！ 私をそこらへんの妖怪と一緒にしない方がいいよ。」

「ほづ。」

「我が軍隊は百鬼夜行、鬼の萃まる所に人間も妖怪も居れる物か！」
さて、戦闘開始ですよ。

「先手必勝！ ウロボロス！」

「弱い！」

まあ、軽くはじかれて当然ですよね。

「この程度で私と渡り合うと？ 笑わせてくれるね。符の壱「投擲
の天岩戸」！」

大岩を軽く投げてきますね。おお、怖い怖い。

「砕く！」

それを普通に殴って砕けるあなたもすごいこと。

「お、なかなかやるね。だったらもう少し本気出しちゃおっかな！」
さらに大きく密度の大きい岩が飛んできますね。

「これは面倒だな。ぬん！」

おやおや、糸を巻いて岩の軌道を反らして……

「そおい！」

投げ返します。

「おもしろいね！ それ！」

萃香さんも砕きますか。

「これじゃ、らちが明かないね。」

そんなこと言っておきながら超笑顔ですね。

「だって、楽しいじゃないか。私の力に及ばないにしろ遠くない相
手がいるんだよ。」

「確かに力はお前の方が上だな。流星は鬼というだけはある。だが、
力だけでどうこうできると思っているのか？」

何かたくらんですね。

「ほう、純粋な力を上回る戦いがあるのかい？」

「今からそれを見せてやるって言ってんだ。」

何かをためるように体を屈めています。

「……！」

「そこかな？」

萃香さんが地面をたたき割るとそこには無数の糸が根のように張り巡らされています。

「ばれたか。」

「それでも、勘は冴えるんだよ。じゃ、これで一本！」「思いつきり近づいて大岩で殴りかかろうとしますが。」

「捕まえたぞ。」

萃香さんの動きがぴたりと止まってしまいました。

「あっちゃー、そっぴりさっきの紫の時もこんなだったね。私としたことがしくじったよ。でも……」

「な、なんだ？」

萃香さんの体が急激に大きくなっています。

「鬼符「ミツシングパワー」！」

「何だと！」

「まさかあなた、さっきのが私の最大の大きさだと思ってたの？ 甘いね私の分身ともいえる妖霧はそこら中に散らばっているんだ。まだまだ大きくなれるよ。」

なるほど、散り、そして萃まる。これは一筋縄ではいかないようです。

「包んでだめなら突く！」

腕を鋭く伸ばして心臓部を狙います。

「はい、さんね〜ん。」

ですが、小さくなつて避けられます。

「甘え。」

「あが！」

後ろから岩の残骸をたたきつけるとは。

「言っただろ純粋な力を上回る戦いを見せてやるってな。」

「そうだったね。一本取られたよ。」

なかなかやりますね。

「そんじゃ、本気を出しちゃおっかな！」「百万鬼夜行」！」

「！ 吸い込むわざか！」

ただ吸い込んでるわけではありませんよ。

「は？ ぐふああ！」

弾幕や先ほどの岩の残骸なども吸い込んでいますね。

「チツ！ 避けるので精いっぱいとは情けねえ。」

確かにこれはそう簡単に打ち破れるものではありませんね。

しかも全てが萃香さんに届く直前に塵と化しています。

「密度が上がってやがる！ がっ！」

「とりあえずこっちも一本だね。」

おや、珍しいことがあるものですね。

「うるせえ。あっちが引き寄せるならこっちも引き寄せてやるっじ

やねえか！ スパークボルト！」

「無駄だよ！」

当たる前に消えてしまいましたが磁力は付いたみたいですね。

「アトミツクコレダー！」

引き寄せようとかんばりますが。

「ぬお！」

中心があっちに偏ってまったく意味をなしませんね。

「ほらほら、もっと頑張つてよ！」

「どうしろと……お、いいこと思いついた。」

どんなんです？

「まあ見てな！」

体中の糸を放出して何をするよ。

「こうするんだよ！」

「へ？」

なるほど、糸で完全に囲んで……でもそれでどうするんです？

「だから見てるって。」

弾幕などはまだ飛んできてますよ。

「そこが肝だ。」

「うわ！」

はい？

「あいつは自分に触れる前に塵にしてるんだろ？ だったら塵で囲んで周りから衝撃を与えればその衝撃は塵を伝いあいつに当たってわけだ。」

なるほど。考えましたね。

「な、なかなかやるじゃん。まさかこんな戦い方をするとは思わなかったよ。」

スペルを解きましたか。まあ、定石ですね。

「それじゃ、どうしようか？」

「いや、俺に聞くなし。」

「やっぱり本当に純粹にやった方が面白いよね。鬼神「ミッシングパープルパワー」！」

さつきと同様に大きくなりますが、今度は持続型のようです。

「その勝負、乗った！」

彼も糸を補充して体を大きくします。大きいと迫力ありますね。

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ！」

「それぞれそれぞれそれぞれそれぞれそれぞれ！」

もはや弾幕もくそもない。ただのケンカです。

「ぬえい！」

「そこお！」

おや、クロスカウンター。

「だー、もう糸が切れちゃった。」

「私もだ。もう体力がない。流星は人形。体力では勝てなかったか。」

結局ダブルダウンで終了しました。

「ふー、ま、宴会は少し減らそうか。もっと楽しいことができた。」

「つまり、今回は解決か。」

そうですね。お疲れさまでした。

「また相手してくれるかい？ 多分私と互角に渡れるのはあんたと

「あいつらしかいないと思うから。」

「望むところ！」

彼も変わったものですね。

【第四拾八話】 萃まる夢、想い（後書き）

萃夢想編が終了しました。

次回はどうしましょうか。

また、しばらく間は空くと思いますがよろしくお願いします。
それでは

【第四十九話】 ゆっくりとした割と楽しい一日（前書き）

日常的な話にしてみました。

どろぞろ

【第四十九話】 ゆっくりとした割と楽しい一日

キトリ宅

はい、萃香さんが起こした（？）異変も解決し、今は普通に太陽の畑のはずれの自宅でゆっくりと時を過ごしています。

「ゆっくりして行ってね!!」

「してるよ……ふう。」

とまあ、饅頭みたいな癒される生き物も家にいますし、非常に安らぎます。

「つつかさ、こいつはなんでここにいたんだ？ 人の布団で普通に寝てたし。」

「ゆっ!」

まあ、いいじゃないですか。でも、心なしか霊夢さんに似ていますね。

「それもそうだな。」

「! ゆっくり来た!!」

何か来たらしいですよ。

「はいよ。あーい？ 誰だ？」

あーらら、お仲間が来ましたね。

「うーうー」

「いっしょにゆっくり!」

「はあ？ なんだってんだよ。」

まあ、にぎやかでいいじゃないですか。こっちはレミリアさんに魔理沙さんですか。

「なーんでこう、此処の住人みたいな顔してるかな？」

そういう生き物なんですよ。確かこの生物の名前はゆっくりでしたか、成長するにつれてその個体と同じ波長をもった人の顔になるんです。

「つまりは、こいつらは霊夢、魔理沙、レミリアと同じ波長ってわ

「何か。」

「「「「ゆっ!」「」」」

「そういうことになります。」

「そんなじゃ、そいつらのとくに連れて行ってみるか。」

「それはそれで面白そうですね。」

博霊神社

「おーっす霊夢。っと萃香もいたか。」

「あらいらっしやい。どうかしたの?」

「いや、今回、お前に見せたいやつがいる。」

「見せたいやつ?」

「こいつだ。」

「ゆっくりして行ってね!」

「うわ! 何それ気持ち悪! 霊夢の生首!?」

「お前の顔はいいぞ。」

ゆっくりですよ。霊夢さんのと、魔理沙さんの。あと、レミリアさんの顔の子がいます。

「へー、初めて見たけど、結構かわいいじゃない。流石私!」

「胸を張れるほどか?」

「なんか言った?」

「いや、なにも?」

「おや、ちょうど二人が来ましたよ。」

「お、確かにちょうどだな。」

「よー霊夢ー。遊びに来てやったぜ!」

「久しぶりね霊夢。」

「あらあら、珍しい組み合わせね。」

「たまたま見かけて、目的地が同じだったので一緒にいただけです。」

「おや、咲夜も一緒にでしたか。」

「お嬢様あるところに咲夜あり。私は常にお嬢様の傍らにいますよ。」

「そうか、まあいい。とりあえず俺の家に霊夢と魔理沙とレミリアのゆっくりがいたからちよっと連れてきてみたわけだ。」
結構かわいいんですよ。

「ゆっくり？ 咲夜、ゆっくりってどんな生き物？」

「人の顔をした頭だけの生き物です。」

「そう、私の顔だからさぞかわいらしいのでしょうか。」

「私のもいるらしいじゃないか。」

ええ、魔理沙さんのゆっくりもいますよ。

「……………」

どうです？ かわいいでしょうか？

「どう思う？ レミリア？」

「か、かわいい〜！」

そうでしょう咲夜さん。この丸く柔らかい質感。そして、この純粹無垢な表情。何匹いてもいいですよ。

「なあキトリ？」

「ん？」

「ルアートってどういう趣味をしているんだい？」

「いや、かわいくないとは言わないが、そこまでとは思えない。」

「だよ。レミリアはどう思う？」

「咲夜が小動物が好きなのは知ってたけど、こういう方向まで精通していたとはね。ま、私は気にしないわ。私もゆっくりは嫌いじゃないし。」

「そうか、魔理沙は……聞くまでもないか。」

「うわ！ こいつもう魔法を覚えたぜ！ この調子でマスタースパークまで教えてやるぜ！」

「こいつをどう思う？」

「さあ？」

と、私は私のやるべきことをやらなくては。

「そうだ。おめえが状況を説明したりしねえと読者様がよくわかん

ないだろ。つつか、この小説ってお前視点だろ？」

そうでしたね。さて、仕事仕事。ちゃんとやしないと大変なことになるってしまいます。

「何がどう大変なことになるのか。」

えつとですね。が になつたり、 が したり。

「いやいや、ピー音入れんなよ。」

それじゃ、禁則事項です。

「ネタ出すなし。しかもかなり似てるのが逆にうぜえ。」

qざwxせrfvtgbyhぬjみk、おl。p；；@：¥」「」

「ちゃんと言えてねえぞ。」

まあ、本日はこの辺にしておきましょう。その子たちはあなた方になつているようなので差し上げます。

「マジか!？」

ええ、多分まだまだ沢山いると思いますし。

「んなわけないだろ。」

いやいや、否定しますが解りませんよ。今まで目撃例が少ないゆっくりが三匹も家にいたんですよ。

だったらまた来てもおかしくはないと思いますよ。

「よし、今度キトリんちにいつてやるぜ。」

「いや来るなし。俺の安らぎの時間をなくすなし。」

私は構いませんよ。でも、お茶とかは出せませんよ。私たちは飲まないのです。

「そう。それじゃ、私たちもそろそろ帰りましょう。もう夜が明けてしまうわ。」

「そうですね。お嬢様の安全のためにも、そろそろ返しましょう。」

「よし、じゃあ俺等も変えるか。」

そうですね。それではみなさん。また今度。

「今度はちゃんとお賽銭入れて行きなさいよ。」

「気が向けばね。」

「……ってか今夜だったの!？」

「萃香気づくの遅い!？」

キトリ宅

「「ゆっゆっ!」「

「なんで今までにあったやつら全員がゆっくりが俺んちにいるんだよ!」

私たちのもいますよ。

「あ、本当だ。自分のがいるとうれしいものだな。」

でしょう? これが愛着というものです。

と、本日はとても愉快な一日でした。

【第四十九話】 ゆっくりとした割と楽しい一日（後書き）

我ながら楽しい話だったと思います。

次回はどうしましょうか。

それでは

【第五十話】備え（前書き）

まずさ所に遅れてすいません。

今回はまあ、伏線とかいろいろです。

どうぞ

【第五十話】 備え

「そおい！」

「ぐはあ！」

「つたく、雑魚が手え出すんじゃないねえ！」

はい、皆さんこんにちは。

今、私たちの家を妖怪に不法侵入されたところです。

「まあ、俺はそう簡単には負けないからな。軽くあしらってやるよ。」

と、自信満々ですが、それは今のうちですね。

「なに？」

これから始まる異変は、今までとはわけが違っています。今までにも解決できなかったことが少なくありませんからね。

「ほう、博霊と霧雨が異変解決を失敗したと。」

博霊と霧雨だけじゃありませんよ。あの白玉楼の魂魄と西行寺も手を出していましたからね。

「あいつらまでもか……そいつは面倒だろうな。じゃ、今回はおれはパスだ。」

パス？ 貴方がパスと、こういったことだからこそやってやるんじゃないかと思うんですけどね。

「できる範囲ならそういうさ。だがな、プロでさえミスるようなことにアマが手を出してどうなる？」

おや、結構解ってるんですね。

「バカ野郎。できねえことやるよかできることを完璧にこなす方が大事だろ。」

そういう思想でしたか。ちょっとがっかりですね。

「なんだって？」

いえ、何でも。まあ、あなたが動かなくとも私は情報を阿求さんに持っていていかなくはいけないのでね。

ついでになくてもいいですけど、何かあった時に私抜きで何とかな
りますかねえ？

「たぶん、なんとかならん。」

ならないのかよ。ま、ならついてくれば良いんじゃないですか？

その代り、いつも通り戦闘要員になっていただきますよ。

「えー。」

えー。じゃないでしょう。ただでついでにさせるわけないでしょう。

「ま、いいや。戦闘経験を積むという面では異変に出るのは十分す
ぎるほどだからな。」

そういう捉え方をしますか。それもいいでしょうが、今回は一人で
発つのは厳しいと思いますよ。

今回はいろいろとした準備をした方がいいでしょう。せめて……そ
うですね、アシストをしていただけの方が必要ですね。

私でもいいですが、そろそろ飽きたでしょう。誰か誘ってはどうで
す？ たとえば……リリーホワイトさんとか。

「春じゃなきゃいねえよ。」

じゃあ、アリスさんとか。

「無難だが、かぶるな。しかも、俺とあいつは型が同じだアシスト
もくそもねえよ。」

あー、確かにそうですね。

「結局お前が一番いいんだよ。なんだかんだでいろいろやってくれ
てるし。」

なんだかんだ先生じゃないですよ。

「なぜ知ってるし。」

「先読みをする程度の能力」です。

「ああ、お前そんなんだつたっけ？」

そんなんです。閑話休題^{それはきいておき}本当に今回は本当にアシストしていただ
ける方が必要ですよ。

今回の異変は情報収集が非常に困難なんですよ。いつも一人でやつ
ていましたが、今回のループは今までよりも遥かに困難です。少し

でも負担を軽減していただきたい。

「……なるほどわかった、一応アシストしてくれそうな奴を捜してくる。」

「探してくる」「じゃなくて「探しに行く」ですね。

「だな。」

「とりあえず、今までであったのが、アリス、魔理沙、霊夢、ルーミア、大妖精、チルノ、美鈴、小悪魔、パチュリー、咲夜、レミリア、フラン、レティ、橙、リリーホワイト、ルナサ、メルラン、リリカ、妖夢、幽々子、藍、紫、萃香だな。」

よく全員覚えていましたね。

「まあね。で、今のところ誰がいいと思う?」

「私でいいんじゃないか?」

「萃香か、情報収集や、戦力としては悪くない。だが、鬼ということとで本来襲ってくるはずのやつらが逃げちまう可能性もある。」

「私はそんなに怖いかい?」

「いや、そんな怖かねえけどよ……って、いつからいたし。」

最初からいましたよ。それはこの話が始まってからずっと。

「いたっていつか見てただけだね。」

「おいおい。」

「いやー、異変が起こるっていうから、どんなのかと思ったけど、そんな軟弱な奴らばかりなんだ。」

まあ、どうせ行くのは竹林ですし、相手は兎と不死者。貴方が出る幕はないでしょう。

「そうかい、じゃあ帰るね。」

「応。」

またの機会に。

「さて、萃香はだめっと。後、有力候補は美鈴、パチュリー、咲夜、藍、紫ってとこだな。」

良い忘れていましたが、八雲家は今回霊夢さんに付くそうです。そ

れと咲夜さんはレミリアさんと一緒に行くらしいです。
「マジでか。じゃあ、紅魔館にでも行ってみるか。」
そうですね。

そんなこんなで紅魔館。

「おーす美鈴。」

「ZZZ」

「って寝てるのか。こんなんでよく門番が務まるな。」

「そつでもないですよ。」

「!」

「お、起きた。」

ほら、こうやって少し妖気を発せばすぐに起きるんです。

「そつですよ。寝てるとは言え、精神はいつでも研ぎ澄ましています。」

「でも、それって裏を返せば妖気を消していけば簡単に侵入できるんだろ?」

「……」

ま、凶星ですね。

「ま、いいや。とりあえず単刀直入に言う。ルアートの先読みをする程度の能力ではこれからそう遠くないうちにかなりやばい異変が起こるらしい。そこで美鈴かパチュリーにアシストを頼みたい。」
「なるほど、異変の補助ですか。ちょっとお嬢様たちに交渉してみますね。」

「つまり成立すれば来てくれると。」

「ええ、私も最近張合いがなくて退屈していたので。」
よかったですね。結構すぐに見つかって。」

「ああ、これでお前の負担も軽減されるな。」

紅魔館館内レミアアの部屋

「……なるほど、話はだいぶ理解したわ。これから異変が起こりうるからそのために美鈴かパチエを貸してくれと。」

「そういうことだ。俺自身は問題ないがこいつはいろいろと負担がでかい。そのためにも美鈴やパチユリーの力を借りたい。」

「美鈴はだめね。門番隊の子だけでは無理な部分も多いから。戦力を失うのは困るの。」

「え……」

あちら、残念。美鈴さんは無理そうですね。

「……」

「ま、その気を落とすな何かあれば声かけっから。」

「そうですね、それじゃあ次の機会に。」

そこまで肩を落とさなくてもいいと思うのですがね。

「ま、いいや。じゃあ、パチユリーの力を借りたい。」

「パチエのことは私に聞かれてもね。本人がどういうか。」

「私はいやよ。新しい知識が手に入るわけでもないし、どうせなら小悪魔でも連れて行けば？」

そういえば、私は小悪魔さんに会ったことはありません。どんな方ですか？

「ぱつと見は強そうだけど性格のせいで事実上最弱ってとこだな。」

「的を射てる話ね。」

なるほど。でも、この屋敷にはたくさん使魔たちがいます。本人が行かないのであれば彼らを連れていくのもありなのでは？

「それもそうだな。そんじゃ、二人位借りてくわ。」

「そう、じゃあ、どの子にする？」

「人身売買みたいに言うな。」

それにしてもすごい人数ですね。

「ああ、この中から二人選ぶとなると基準が全く分からんな。よし、ルアートお前が選べ。」

いいでしょう。基準は私が勝手に決めますよ。

「任せる。」

んー、それでは、その長身で髪の高い貴女と背の低いショートヘアの貴女。

これからお願いしますね。

「あら、いい子に目を付けたわね。」

「だから、人身売買じゃないの。にしても、極端な二人を選んだな。」

最初に言いますと基準は好みではありませんよ。

「だろうな。共通点が見当たらん。」

ま、これで一応決まりですね。美鈴さんやパチュリーさんには勝らずとも劣らないと思いますよ。

「そうか。じゃ、少しの間借りてくぞ。」

「ええ、もし気に入ったなら返さなくてもいいわよ。」

「「ええ！」」

「そうか、そんじゃ死ぬまで借りてくわ。」

「「ええ！」」

「どっかで聞いたセリフね。」

「そうか？」

ま、これで今回はなんとかなるでしょう。

それじゃ、先に帰っててください。すぐに行きますから。

「了解、そんじゃ行くか。」

「……行きましたね。」

さてレミリアさん。貴女、今回の異変に出るつもりですね。

「ええ、面白そうだし。咲夜も連れて行くわ。」

だから、美鈴さんの動向を許可しなかったと。

「そういうこと。何か問題でもあるかしら？」

いえ、今回は貴女にとってはホームグラウンドのようなものでしょ

う。思う存分動いてください。
「ええ、そうさせてもらおうわ。
」
さてと、では私も帰りますか。

【第五十話】 備え（後書き）

小悪魔二人は二次創作で俗に言う「こあ」「と」「こあ」「こあ」です。
しばらくは彼女たちもレギュラーです。
それでは

【第五十一話】（前書き）

はいどうも。

今回は前回登場した二人の小悪魔のお話です。

【第五十一話】

はい、前回選出した小悪魔二人をとりあえず家に連れてきたわけ
です。

「協力の見返りとは言わんが、自分の家だと思ってくつろいでくれ。
俺は食事は必要としないが、ある程度の設備は整っている。材料調
達は適当に済ませるかこいつに頼め。」

何故に私を？

「いいじゃねえか。（まずは信用を得るのが第一だろ。）」
あ、なるほど。

「……」

でも、お二人ともがちがちですよ。もはや石のように。

「まさか、ブレイクしたのか？」

ああ、あの石化魔法……って違いますよ。ただの緊張でしょう。我
々は少し外に出てみましょう。

人になれる前に場所になれないと。

「そうだな。そんじゃ、俺等は食材調達等に行ってくる。パチユリ
ーの時の様にするもよし。自由にするもよしだ。そんじゃあ、後で
な。」

では後ほど。

「で、お前そこで何してんだ？」

監視カメラですよ。

「食材調達はどうした？」

お願いしますね。私はこのサイズですから逆に食われてしまいます
し。

「なるほど。わかったからとりあえずこの拘束具を外してくれ。」
ご自分で抜けてください。

「能力封じの結界くらって出れるか馬鹿。」

それじゃ、本当に食料調達お願いしますね。私は此処にいますから。
「はいはい。」

さて、ではどうなるか見て見ましょうか。

「ゆっくりしていったね!!」

「はい。」

「……そういえば、私たち、お互いを読んだことってないよね。」
「うん。だって呼ばれない限りあうこともなければ呼ばれても放すことなんてないもんね。」

「……なにする？ あの人はくつろいでくれって言ってたけど。」

「いつしよにゆっくり!!」

「ありがとう。ゆっくりしてるよ。」

「それにしてもかわいいね。」

「うん。」

お二人はくつろいでます、ゆっくりを膝の上に載せて待ったりしているだけです。そして、私が選ばない限り彼女たちは会話することすらなかったようです。

「ねえ、そと行かない？ 此処結構埃っぽいよ。」

「そうだね。じゃ、とりあえず掃除しようか。」

「掃除かー、いつも道理といえばいつも道理かもね。」

「幸い道具はある……なんでこんなものがあるのかは分かんないけど。」

「それって、髪整えるときの霧吹きじゃん。なんであるの？」

あらら、ご存じない様子。掃除する前に霧吹きをすると、埃が水を吸って舞い上がりにくくなるんですよ。

「一応今まで道理でいいかな？ 一応道具はあるし。しかも上等だし。」

「じゃ、掃除しようか。ゆっくりたちはちょっと外にいてね。」

「ゆっくりしてっただうよ!!」

「ありがとう。でも高いところもやるから危ないよ。外でみんなで遊

んでおいで。」

「ゆっくりがんばってね!!」

「うん。」

ゆっくり（四匹）を外に出して掃除を始めましたね。霧吹きとかは使わないにしろ、さすが紅魔館に勤めていただけあります。テキパキと、それでいて確実に片付いていきます。

そして数分後。

「ふー、やっと片付いたよ。糸くずがいっぱいあったね。」

「そうだね。なんであんなにあっただらう。裁縫道具もないのに糸だけたくさん。」

あー、彼女たちは彼の能力を知らないご様子。まあ、そのうちわかるでしょう。

「まいつか。さて、じゃあゆっくりたちと遊ぼうか。」

「いってみよう!」

やばいやばい、見つからないようにしなければ。

「ゆ!」

「それ!」

「ゆゆ!」

「よいしょっと!」

「たかいよー。」

「はしゃいじやって。」

なるほど、身長の高い方は頭脳派、低い方は運動派ですか。これはこの先大事になってきますね。

「ゆっくりよむよ!」

「いいよ。字は読めるかな?」

「ぬぐぐぐぐ……むずかしいよ。」

「やっぱりね。じゃあ、読んであげるよ。」

「やっほい!」

さてと、そろそろ帰って。

「来てるぞ。」

じゃ、私たちも戻りますか。

「おう。」

「おーい、戻ったぞー。」

「あ、おかえりなさい。」

「妻じゃあるまい。そんな堅くなるな。」

いや、妻の方がゆるゆるだと思いますが。

「だっけ？ まあいいや、とりあえず食材とってきたぞ。魚に鴨、

後適当な野草だ。野草は全部食えるやつだ。」

「ありがとうございます。それじゃ、調理開始しようか。」

ちよっと待っててください？

「ん？ どうした？」

お二人のことはどうやって呼べばいいのでしょうか？ お二人ともパチュリーさんにつかえていた小悪魔ですが、流石にお二人ともそのまま呼ぶわけにはいかないと思いますし。

「だな。じゃあ、見た目からして……ロリとシャイで。」

流石にそれはかわいそうですね。しかもシャイはお二人とも共通ですよ。

「そか、じゃあ、お前はなんかないか？」

そうですねー……血のような紅い髪から焰ほむひさん。

「焰ほむひって炎ほむひって意味じゃなかったっけ？」

でしたっけ？でも血を連想させる名前よりは紅を連想させる言葉がいいかと。しかも焰ほむひというのは輝きを表すこともできます。

「なるほど。一応それっぽいからいいか。見た目とも会ってるし。」

それじゃ、もう一人……きらめくという意味で煌かがや。

お二人とも先ほど掃除をしたり遊んでいたりは物凄く輝き、煌かがやいてましたからね。

「なるほど。ネーミングセンスはどうかと思うが意味があるという

のはいいことだ。

じゃ、これからはそう呼ばせてもらうぜ。焔、煌。」

「……」

「ど、どうした？ 急に睨り泣きして。」

もしかして気に入りませんでしたか？

「いえ、私たち、まだ名前すらもらえていないような低級悪魔なんです。」

「それなのに名前を付けていただけでうれしくて。」

（ベターな展開だな）

そんなこと言わないで。

それはよかった。では、食事にしましょう。ゆっくりたちの分は作っておきますから。」

「ああ、にしてもまた二匹増えたな。」

我々の人数に比例しているようですね。同じ顔の方にはプレゼントしてますし。」

「いきものをプレゼントとか上げるって言い方はよくないが。まあいいだろう。」

さて、活発に動く焔さんと、知識の面を生かす煌さん。

これはいい仲間を持ちましたね。」

【第五十一話】（後書き）

更新力が心肺停止状態……ピー

さて、それはさておき。

そろそろ永夜異変に入ろうと思います。
それでは

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9368m/>

東方人形記

2011年10月6日16時36分発行